
月読 - つくよみ -

かなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読 - つくよみ -

【Nコード】

N8975C

【作者名】

かなこ

【あらすじ】

職もキャリアもない29歳のユリ・合う仕事などあるのだろうか
・ある日彼女はある財閥グループの孫だと分かり世界は一変する。
「これから世界を変えるゲームをするのよ」と言う祖母に導かれるまま巨大な世界に立ち向かっていく。そんななか王子のような存在だった誠士が、ユリの心を乱していく。

王子と負け犬女

お尻に、もぞもぞとする感触がはしった。すぐにそれはなで擦るような動きになり、ユリは痴漢であることを確信した。

午後のそんなに混んでない時間帯なのにツイていない。犯人は左後ろの中年男だ。

黙っていられる性格でなかった。なにすんだよ、この痴漢野郎、と言いかけてユリは少し考えた。どうせシラをきるに決まっている。持っているペンの先でその手を突き刺してやろうと考えた。

「おい、この手はなんだ!？」
不意に背の高い男が痴漢の手をつかんだ。

「な、何だよ、てめえ!」
「痴漢してんじゃないぞ、おまえ。今この手で痴漢してたろう! ねえ、お嬢さん今こいつお尻触ってましたよね」
「は、はあ……」

驚いてユリはどう返事をしていいか分からなかった。自分で痴漢と対決するより何だか恥ずかしかった。

「ほうら、証拠はあがってんだよ! 俺も見てた!」
「違う、違う、俺じゃない! 違うってば! いてて」
背の高い男は不遜で爽快な笑顔を見せて、痴漢男をねじり上げた。そのままユリは男たちと次の駅で降りねばならず、地下鉄駅員が鉄道警察を呼ぶのを待つことになった。

ちらり、とユリは隣の背の高い男を盗み見た。

少しくセ毛の髪を緩やかに後ろに流している。優しい顔立ちなのに、意思の強そうな茶色の瞳が印象的だ。薬指には結婚指輪がきちんとはまっていた。

『オーダーとしか思われない上等のスーツと靴を身につけているなんて、そんじょ、そこいらの人間じゃない。ステータスのある人だ』
ユリは自分を振り返って情けなくなった。自分とはなんて世界の違う人間なのだろう。

ユリは今日、仕事をクビになったばかりなのだ。

もうこれで何回目だろう。気が強くて、口のたつユリは上司に向かってズバズバと意見をするので、最後には嫌がられてしまうのだ。

29歳にもなって、バイトで入った職場を転々とするだけのユリにとって、ステータスを積み上げていける彼のような人間は全く違う世界の住人だった。

クビになって落ち込んでいたせいで痴漢にあつたのだ。

そう、今日のユリは自尊オーラののようなものが全くなくなっていた。

そうだった時は、いつも悪い人間や悪い物事がやってくるのだ。それはユリには決まった法則だった。

「じゃあ、これで。ぼく会社に帰りますんで」

痴漢が引き渡されると、男はニツコリとユリに笑いかけ、次にきた電車に乗って行ってしまった。ユリは調書を取られるため、まだそ

ここに残らねばならなかった。

『あの人、高倉グループの人だ』

背広につけていた会社章が目には焼きついた。

今どき会社章をつける人間など、会社役員か営業ぐらいなものだ。

30歳前後の彼なら、優秀な営業マンといったところだろう。中途半端な時間に電車に乗っていたのだ。この沿線の会社なら高倉商事の営業職に違いない。

ユリは腹が立つてきた。一流商社でバリバリやっているように見えた彼の出来すぎたアウトラインに、自信に、そして自分との不公平さに。

一方で、彼とどこかで会ったことがあるような気もしていた。

けど、あんな印象的な人を忘れるわけないし…

理性で考えてもありえないのに、おかしなデジャブはぬぐえなかった。その気持ち悪さがずっととれなかった。

そんな事件から数日後。

三角形の下に凱旋門、といわれた高倉グループのマークをユリは再び見るようになったのだ。

「そういう事にして、ユリさまと美雪さまに是非、高倉家へお越し

いただくようお願いいたします」

嶋崎と名乗る男は、ユリと母の美雪に深々と頭を下げた。古いアパートの外には不似合いなハイヤーが止まっていた。ハイヤーには三角形に凱旋門マークが冠されていた。

嶋崎の話では、ユリは高倉商事の現会長、高倉与太郎の孫だということのだ。

血縁は母と行方不明の父以外にない、と聞かされて育ったユリには驚くべき事実だった。

「ユリは渡さないって言ったでしょう」

「わたくしはユリさまにお聞きしているのです。もう未成年ではないのです。選択はユリさまにもあります。それに美雪さま、あなたも一生このままで終えられるつもりですか」

敷っぱなしになった布団を横目でちらつと見た嶋崎の言葉に、2人は何も言い返せなかった。

熱烈に恋し駆け落ちまでした夫は、働くこともせず酒を飲んでは暴力を振るうロクデナシだった。そのうちプイと出ていったきり夫は戻らなくなった。

ホツとしてものの、精も根も尽きてしまった美雪は体調が思わしくなくなり、ユリのわずかな稼ぎをアテにしながら寝たり起きたりの生活をもう10年以上も繰り返していた。

このままではダメになってしまう！

それは美雪もユリも十分すぎるほどに分かっていた。

「あの 会長さんは、私などを呼んでどうするつもりなんですか？ 私なんて 学歴もないし、仕事もすぐにクビになるし きっと会長さんは気を悪くすると思います」

「そんなことは関係ありません。先ほども申し上げましたように、会長はもう長くないのです。人生の最後に娘や孫に会いたいと思われるのは自然なことじゃありませんか」

「あの、与一は 弟は何と？」
美雪はおびえるように尋ねた。

「もちろん。お待ちになっています。与一さまは温厚な方です。確かに最初は話し合いが必要かもしれませんが、時間がきつと解決してくれますよ。大丈夫です」

伯父は歓迎していない。嶋崎の言葉から、ユリは悟った。けれど、このままの状態よりは高倉家に行くほうがいい。二人は高倉家に行くことを決意した。

祖母のゲーム

それは映像以外では、ユリが見たこともないような屋敷だった。

美しい木目の大きな門扉を抜けると、和風に手入れされた庭の奥に、数寄屋造りの家屋が現れた。玄関の前まですべるように運転した嶋崎は、うやうやしく車のドアを開け、ユリと美雪を屋敷へ導いた。

「おかえりなさい、美雪ちゃん」

美しい老婦人が玄関前で母を待ちわびていた。とても嬉しそうな様子だ。与太郎夫人、つまり、ユリの祖母だ。

72歳だと聞いていたが、60代前半くらいにしかみえなかった。

「あの、お母さま」

「よく帰ってきてくれたわねえ。本当に、よく帰ってきてくれたわささ、まず入って、入って。あなたがユリちゃんね。どうぞ、どうぞ遠慮しないで」

老婦人に背中を押されながらユリたちは屋敷に入った。

通された居間は、ソファのある洋室だった。

ひとつひとつの家具がどのくらいの値段か想像しただけでも、ユリはめまいがしそうだった。途中からもう考えることは止めにした。

「あなたたちを呼んだのは、実は私なの」

ジノリのカップに入れたコーヒーをユリたちに勧めたあとで、祖母は口を開いた。

「ええ?!じゃあお父さまが、私を許してくださったわけではないのですか」

「大丈夫よ、お父さまはもう半分意識がないから心配ないわよ。だからあなたたちを呼んだんですもの。あなたがユリちゃん?」

不意にユリのほうに風がむけられてユリはびっくりした。

「あ、はい。はじめまして、室生ユリです」

どう言っていていいか分からず普通に頭をさげて自己紹介をする。

「あら、はじめまして、高倉百合子です」
老婦人はユーモラスに言い返した。

「百合子さん?」

「そう、私とあなたの名前、似てるわね」

そう言っ、笑いながら美雪のほうを見た。

美雪は照れくさそうに笑った。

「時々ユリちゃんのごことは写真で見っていたの。出ていってからもあなたたちの事は気になっていたので…でも大きくなったわね。それにすごく綺麗になったわ。よかったわね、美雪ちゃん、いい娘がいて」

美雪は嬉しそうにうなずいた。

丸顔でくりくりとした目の美雪に比べて、ユリはシャープな美しさを持っていた。

目は切れ長だったし、ミディアムのショートカットがよく似合う直毛の髪は、全く美雪に似ていなかった。その美しさは恐らく、ろく

でもない男からの因子によるものだったが。

「ユリはモデルの仕事をしていた頃もあるんです。人気もあつたんですよ。けど、なぜだか急に仕事が無くなったり他の人に取られたりして… ああいった世界はやっぱり、きれいな事じゃやっていけないですね」

「その話 お父さまのせいよ」

「え？」

ユリと美雪は同時に声をあげた。

「高倉の血をひく娘がモデルなんて、見世物になるなんて、てね。週刊誌に嗅ぎつけられでもしたら困る、って裏から手を回したのよ」

ユリは声も出なかった。まさか、あの失った仕事やキャリアが祖父のせいだったとは。

事務所の身勝手さや不自然さに怒り世間に失望した。その実態は、権威を持った人間のたつたひとことだったのだ。

「ユリちゃん、怒った」

「…いえ…」

「私は怒っているわ、そういったシステムにね。だからね、私たち三人でこれからゲームをしないか、と思つて」

「ゲーム？」

「ええ。世界を変えるゲームよ」

一息ついて百合子は続けた。

「機は熟したわ」

「その為には、あなたたちにまず高倉商事で働いてもらうことが必要です」

百合子は真剣なまなざしで美雪とユリを見た。
ふたりも百合子をじっと見返した。

「商社は巨大な資金と影響力で、大きな仕事を独占してきました。それなのに、一般の人たちは、商社が何をやっているかハッキリと知っている人は少ないの」

「私も高倉のお話しが来るまでは、よく知りませんでした。石油の掘削から、飼料の輸入、銀行、外食産業：あらゆる分野に渡って商社は仕事をやってたんですね。ちよつとビックリしました」

ユリは心底驚いている様子で続けた。

「本当に世間を動かしているんですもの」

「一般の人はそれが見えないのよ。ひとつひとつの目の前の物事しか見えてない。自分の会社だけとか顧客やお得意さんくらいかしら。本当はとっても大きな波に飲み込まれているのに」

「それが商社ですね」

「ええ。小さな会社だって元を辿れば、どこかの商社の系列であることがほとんどなの。だから、上の会社の方針をかえれば”あ”と”い”間に今までの自分の生活が変わってしまうのに」

「直接仕事で関係してなくても、関係ありますよね」

「もちろんよ。オイルショックの時代には、商社が石油を買い占めたと噂がたつたせいで人々はトイレットペーパーや砂糖を買い占めに走った。不安に振り回されたのよ。…そんなの嫌でしょう？誰かのせいで自分たちの生活が脅かされるなんて。これからは格差社会でもっとひどくなると思うわ」

「そうですね」

「だから、こつちに来ない？動かすほうの人間になるのよ。今までユリちゃんは、マニュアルで決められた仕事を繰り返してきた人だから、そのむなしさはよく分かっていると思うわ」

「いつもいつも同じ仕事や、命令される人形のように仕事をしていると、やる気がなくなってきてイライラしたり、鬱っぽくなったりする。」

「反対に商社マンは、海外の外務大臣に会って自動車の輸入の打算を行ったり、医療分野で新しいネットワークを構築したり、実質的に世界を切り開いて動かしていくことが可能な職種だった。」

「グローバルな視点でものごとを見ているユリにとっては、魅力のある仕事に思えた。」

「何か手ごたえのあることがしてみたい！」

「もう、命令される人形や創意工夫のない仕事なんてやりたくない！」

「ただちよつとね……」

「百合子が苦々しく口を開いた。」

「今までのやり方では、もうだめだと思っの」
「どうしてですか」

「組織が巨大になり過ぎて、ただ利潤だけを追求するモンスターになつてしまった。これだけ格差が出た理由は、こういった体制のせいもあるのよ」

百合子は何か言いかけた。

「それを変えるおつもりなんですね」
「…そうなの。それはひとりではとつても出来ないの。私には時間もそう残されていないし…ユリちゃん、美雪、手伝ってもらえないかしら？」

「出来るでしょうか」
ユリは今までの仕事を振り返つて不安になつた。
ましてや、相手はグローバル企業だ。

「出来ることからでいいのよ」
「そうですね。焦らないことですね」
初めて美雪が口を開いた。

暁生

ユリと美雪は高倉本家に滞在することになった。

屋敷には、卒中で寝たきりの与太郎、そして夫人の百合子。通いでお手伝いさん、看護師、運転手の嶋崎。

息子の与一らは別宅に居を構えていたので、顔をあわせることもなくしばらくは気がラクであった。

「ね、ユリちゃん。今日の買い物は嶋崎じゃなくなって新しい運転手さんに連れて行ってもらって。嶋崎は体調が悪いらしいから」

朝、祖母にそう言われていた。しかし、現れた車から出てきたのは嫌になるほど見覚えのある顔だった。

「おはようございます」

「何！？ 何であんたがこんなトコにいるのよ」

それは、ユリの幼馴染とでも言っていていい男だった。

相良暁生。

家も比較的近所で中学校と高校が同じだった。何回か同じクラスになったこともあるが、ユリは自分に興味がある暁生のことが嫌いだ。つた。

自分より勉強もスポーツも容姿も人気も劣る男が一人前に自分のことを好きだ、なんてプライドが許さなかった。学校を卒業してから

滅多に会わなかったのに、どういう訳か今になって目の前に現れたのだ。

「今日からわたくしはここで運転手をさせていただきます」

「どうして。お婆さまは許可なさったの」

「これは大奥様のご命令です」

「

とても気分が悪かった。やっと貧困の影から逃れてきたと思ったのに、その過去の亡霊のような男がそばにいるなんてイライラした。ブスツと脹れたまま車に乗り込んだ。

「今日からってどういう意味よ。嶋崎はクビになったの」

「嶋崎はわたくしの父です。父は昨日づけ定年となりました」

「はあ？嶋崎があんたの父親？」

「小さい頃、両親が離婚したのです。お忘れでしたか」

お忘れでしたか、だと？

幼馴染じゃないか、と言われたようでユリはゾツとした。

そういえば暁生は母子家庭だった。寂しそうな母親だったが、ユリの家も母子家庭みたいなものだったので美雪に時折話しかけていたっけ。

嶋崎が暁生の父親だったなんて…偶然すぎて、これも祖父の思惑のひとつのように思えた。

「どこに参りましたか」

「銀座、そのあと代官山に寄って、そのあとは又言うから」
「かしこまりました」

「ユリイイ、ご無沙汰ねー 元気してたあ。ああ、今日は一段とキレイだわ」

モデル仲間だったジユディ。今は引退して広尾のマンションに住んでいた。

一児をもうけてさっさと離婚した今では、ファッション・コーディネートという肩書きで活動していた。

ぼろぼろで、まともに仕事もしていない時には会えない交友関係をユリは少しづつ復活させていた。

「今日はさ、ジユディに頼みがあってきた。あなたのセンスは信頼してるから」

「なに、なに？好きなユリにそういわれると、あたし何でも聞いてあげたくなっちゃう」

ジユディは顔をくしゃくしゃにして笑うと『きゃー』という感じで首を横に振った。

「私の服をコーディネートして欲しいの」

「いいけど… そんなのユリでも出来るじゃない。どうして」

「これから私は時間が無くなるの。だから専用のスタイリストが欲しいんだ。私の趣味を分かっている人をお願いしたい」

ユリは少し首を傾けてジユディを見た。

「メインはビジネスコーディネイト、その関係のパーティなんかも、私に似合っていて演出効果もある洋服、小物、バック、靴とトータルでやって欲しい。」

場面ごとの詳しいことはその都度、メールで送ろう、って考えてるんだけど…だれかい人いる？」

「OK、いいわよ。私が全部やるから安心して」

「ほんとに」

「ええ。その代わりにキスして」

まぶたを閉じてコケテッシュに唇と突き出しているジユディ。

ユリはその姿をみて楽しくなると同時に可愛らしく感じた。

ジユディのあごに手をかけるとゆっくりと唇を重ねた。

何度もついばむように唇を吸いながら数秒。

「っとオプシヨンはここまで」

「うん、ケチ！」

「ちゃんと代金は支払うから」

「体で払ってくれてもいいのよ」

「ジユディ、破産するよ」

「ユリのためだったら構わないわよ　て、言いたいけどそんなに大きな注文なの？」

口端で微笑みながらユリはジユディのマンションを後にした。

少しづつ運が向いてきた気がした。

すべるように走る車のなかでユリは、高速のナトリウムランプを越えた虚空に笑っている月をみつけた。

細く槍のように光る二日月。あれはこれから始まるゲームへの勝利の微笑みなのだ、ユリは月に向かって微笑み返した。

血族

従妹^{いとこ}という存在は、ユリにとって不思議だった。

本物の令嬢と言われている従妹^{はるか}の遙。

美雪に似た丸顔に大きめの瞳、細いネックレスがかかった白い首、肩下で緩やかにウェーブするアーモンド色の髪、パステルカラーのアンサンブルのカットソーに被われた胸は適度の大きさがあった。

「ユリさん、私になにか変かしら？」

ナイフとフォークを優雅に操りながら、目の前で、笑ったり、しゃべったりするのを、ユリはついついボウと眺めてしまっていた。

少し照れたように微笑む遙は、不安そうにユリに尋ねた。

遙は28歳だったが、とても幼く見えた。

「いいえ。遙さんがとてもキレイだから見とれていたんです」

「まあ」

そのまま遙はやや頬を上気させて、下を向いた。

「いやあ、そう言っていただけなんて光栄です。あなたのような美人にそう言っていただけなんて遙も喜んでいます」

「ユリちゃんは人気モデルだったのよ」

上座に座っていた百合子が、与一の後に口を挟んだ。

一族が集まって初めての食事会。

百合子を頂点に、向かいに与一夫妻と娘の遙夫婦、反対側に美雪、ユリという席順だった。

企業の重役そのままの風貌の与一。

確かに打ち溶けるような雰囲気はなかったが、威圧するほどのオーラは持っていなかった。

表面は紳士的である。育ちの良さと苦勞のなさが、危険本能を退化させているようだった。

…ふうん、とりあえずグレーゾーンだわね…

ユリが与一を値踏みしていたそのとき

「すみません、遅くなりました！」
瞬間、空気が変わった。

青空のエネルギーを部屋に引き入れるように、背の高い男が高倉家のダイニングに入ってきた。

「誠士^{せいし}さん、こっちよ」

「上手くいったのかね」

「あ、はい！何とか連絡がつかしました。あ、すみません！遅れて申し訳ございませんでした」

男はハキハキと答えながら、遙の横の一番下座に腰を下ろした。

ユリはびっくりした。

それは、あの男だったからだ。地下鉄で痴漢を退治したあの男。

「彼は、遙さんの夫で高倉誠士たかくらせいじさん。今は高倉商事でエネルギー開発部の仕事に就いています」

百合子が誠士の方へ、手を差し出して紹介した。高倉の姓を名乗っている。養子なのか。

「はじめまして、高倉誠士です。今日は本当に遅くなって申し訳ありませんでした」

誠士はぺこぺこ頭を下げて、美雪とユリに笑いかけた。

顔をあげた瞬間、ユリと目があつた。

『あ…』

誠士は思い当たるような表情を一瞬見せた。

「はじめまして」

しかし、ユリが美雪に続いて型どおりの挨拶をしたからか、誠士も初対面として会話を進めたのだった。

そのまま何もなかったかのように食事は執り行われていく。

「では、ユリさんは僕がいくことになっている新規事業チームに配属されるのですか？」

誠士は不安そうに百合子に尋ねた。

「ええ。いずれはね。そこであなたと共に社内ベンチャーを立ち上

げてもらいます。けど、その前に社内清掃や庶務をしてもらって、うちの会社の勉強してもらおうと思うのよ。ね、ユリちゃん」

「ええ。お願いします。私はキャリアがないので下働きからさせていただくのは、本当に助かります」

「お母さん、せめて秘書見習いくらいからでいいじゃないですか
与一はやはり凡庸だった。

「いいえ。そんな時間はありません」

百合子がきつぱりと答えたので、他の者は驚いたようだった。

「下働きは週3日までです。それ以外のスケジュールは私が決めます。高倉の娘としてユリは勉強することが沢山あるのです。それから美雪」

ぼう、と聞いていた美雪にお鉢が回ってきた。あわてて返事をする。

「あなたは私のかばん持ちです。これからはずっと私に付いてまわって勉強するのです。本当はあなたは、それが出来るハズなのです。沢山勉強してきたのですから」

不安そうにおびえながらも美雪はうなずいた。

「なんだかお婆さま、変わられたわ」

遙が食後デザートのリキュール・プリンを前に笑った。

「すごく生き生きされて」

そのままプリンをスプーンで崩す。

お爺さまが何も出来なくなっただけからね
心の中で逢はつづやいた。

食事会が終了して、やっと一同は気の重い仕事から解放されたよう
な気分だった。

早々に玄関に向かうと一たち。

「ああ、ハンカチを忘れてきちゃいました」

誠士は見送りに出てきていたユリをチラッと見た。

「私が探してきましょう」

ユリはそのままダイニングに引き返した。ラインが入ったカルダンの
ハンカチがテーブルに置いてあった。

「はい」

「どうもありがとうございます」

ニッコリと笑ってハンカチを受け取ったと同時に、誠士は名刺をす
ばやくユリに握らせた。

「ではおやすみなさい」

タイヤが玉じやりを踏みしめる音がして、すぐに一同を乗せた車の
音は聴こえなくなった。

ユリはどきどきとしていた。

部屋に帰って名刺を見ると、プライベート用の名刺らしかった。会
社のロゴや肩書きは入っておらず、高倉誠士という名前と携帯番号、

アドレスが書いてあるだけだった。

そして、名前の下に手書きで

10/16 15:00 東グランド・ホテル、ロビーで

と書いてあった。

デジャヴ

淡い陽光がふりそそぐオープン形式のロビーのカフェ。一際目立つ場所に誠士は座っていた。ユリは気づかれないように、少し遠くから誠士の姿を眺めた。

抑えた色調の茶色のスーツを着て、軽く足を組んだ姿勢で書類を見ている。

時折、ペンで書類に何か書き入れているようだった。楽しみに仕事に没頭する誠士の横顔はやんちゃな少年を思わせた。栗色の瞳が美しかった。

そんな誠士を周りの女たちがチラチラと見ていた。

「お待たせしました」

ユリは少し声のオクターブを上げて、誠士の横に立った。そうしないと、ハスキーな地声では怒っているようにとられる経験が多かったからだ。

「ああ。ユリさん」

誠士はパツと顔を上げると、いつかのようにニッコリと笑った。

「遅れてすみません」

「いえいえ。この間は僕のほうが遅れたんで、今日はちょっと早めに来たんです」

誠士は書類を片付けながら答えた。

ユリは居心地の悪さを感じた。

自分はこの男の前に座っていい人間だろうか。日向を歩いてきた眩しいスターの前に出たような気分だった。どんなに着飾ってきて、最初に抱いた想いを覆い隠すことは出来なかった。

ユリはコーヒをオーダーした。

「この間は、すぐに帰れました？」

不意に質問された内容を理解するのに、ユリは2秒ほどかかった。地下鉄の出来事のことのようにだ。

「え、ああ、はい。あれからすぐに帰ることが出来ました」

「よかった。実は、すごく気になってたんですよ。あの後、ユリさんが… あの… ユリさんと呼んでいいですか」

「ええ、どうぞ。私は誠士さんって呼ぶんでしょうか。本当は苗字でお呼びしたいんですけど、高倉さん、だとね…」

ユリは苦笑した。親族としての区別がつかない為、名前で呼ぶしかないことが気まずかった。

「いやあ、いいですよ。誠士って呼んでください」

ユリは誠士の真意を測りかねて、微笑み返すしかなかった。

「あれからは痴漢にあってないですか」

「はい。お婆さまが車をつけてくださってたんで」

「そうですね。それはよかったです。ほんと痴漢をするヤツは絶対許せません。うちの妹はひどい痴漢にあったせいで、いつとき神経衰弱になっただんですよ。あいつらは絶対に許せない！」

誠士は目に怒りをこめて語気を強めた。

男性でこんなにセクシユアル被害に怒りをもっている人をユリは初めて見た。

「あの…今日は、どういったお話でしょうか」

地下鉄の一件を話すためだけに、自分を呼び出したのだろうか。何か恥ずかしい弱みを握られているようでユリは内心ドキドキとしていた。

「いえ、別に用があつたわけじゃないです。ただ、ユリさんと少しお話しをしたかったんです」

「お話し？」

「食事会だと、なんだか堅苦しくって」
誠士は苦笑した。

「あの場じゃあ初対面としてお話しするしかないですよね。僕も、遙の両親の前に出たらいつつも緊張するんですよ。おまけにこの間はお義祖母さんまでいたし」

「そんな風には見えませんでしたよ」

「いやいや。僕は婿養子なんでダメダメなんですよ」

太陽のような笑顔の誠士のどこがダメダメなのかユリにはさっぱり

分からなかった。

「遙さんとは恋愛結婚ですか？」

「いいえ。見合いですよ」

少しはにかんだ顔で、誠士は答えた。

「でも、僕は熱烈に恋愛をするタイプじゃないんで見合いでよかったですと思っています。結婚は生活ですから」

「そうですか？誠士さんは熱烈恋愛タイプに見えますけど。影で泣いた女性がいつぱいいたでしょうに。ま、相手が高倉財閥の令嬢とあっちゃ勝ち目はないですから、女性たちも諦めも出来たでしょう」

意地悪く言い放った言葉にユリは自分で驚いていた。こんなこと、言うつもりはなかった。

誠士も驚いた様子でユリを見つめた。

「あの」

誠士は濁いた口の中から声を発した。

「ユリさん、ずっと以前どこかで会いませんでした？」

誠士が感じたそれは、ユリが地下鉄事件の後で感じた既視感と同じだったようだ。

「ああ、すみません。僕おかしいですね、古いナンパみたいな事言ってますね……」

「ごめんなさい、すみません。私、なんてことを……」

「いえ、いいんです」

そして訪れる沈黙。

二人とも何か思い出そうとしているため、心あらずの会話でその日は終結した。

やはり。

やはり、以前どこかで会っている。

灰かぶり姫

ビジネスの基本は人を見ることだ。

ユリは、高倉商事本社の清掃と食堂の後片付けの仕事をしだした。

会社というものの雰囲気、組織、そして人の裏側を見る機会も与えられた。

「二村部長って、安岡さんとデキてるくせにあれで隠してるつもりなのみたいよ、笑っちゃう!」

「浅岡専務は新しいプロジェクト好きだから、また上ともめるわよ!」

「栗田さんってそろそろ結婚するらしいわ。相手は外務省の人みたいよ」

女性トイレでの会話はゴシップが満載。

人の名前が出てきたらメモをとって後で社員簿と照らし合わせていく。時々、誠土の名前が出てくることもあった。女性に人気の誠土は隠れたアイドルのようだった。

その他、商社のOLや秘書たちがどういった生活を送っているのかも知る機会となった。美容、海外情勢、外国会話、茶道、パソコンのスキル等等もかいま見えた。

男性はトイレより喫煙ルームや食堂のほうで会話をしていた。しか

し、ぼちぼちとした仕事内容しか話さないことが多い。

得たことといえば、仕事内容や立場で人を見下した態度を取る男性が多くいた、ということ。

「おい、ここちゃんと拭いとけよ。あんたたちの仕事なんだから、きっちりしろよ」

「これ、もって行つといて！」

セルフサービスの食堂でぞんざいに用事をいいつける男性、重箱の隅を突つくようにネチネチ言う男性がかなりいた。

そういった人間に限って、上司の前などではへこへことしているのを、ユリはちゃんとチェックしておいた。

「人間の本性はね、底辺にいる時ほど見えるものなのよね。だからうちは代々、清掃と食堂業者は自前で入れているのよ。いわばスパイね。」

毎月担当者が報告書をあげてくるわ。そのことを知っているのは、血縁だけなのよ」

暁生が運転する車のなかで、百合子は楽しそうにユリのはずした三角巾をとって自分の頭にかぶった。

「こつやってね、時々私も掃除のおばちゃんとか、食堂のお婆ちゃんになって社内を点検するときがあるの」

「本当ですか。バレたことはないんですか」

「残念ながらないのよ。年をとった女は特に疑いもしないみたいね。世間ってそういうものよ。掃除や食事はまだまだ女の領域だと思われているのね。ほんとには、恰幅のいい男性がトイレ掃除したり食堂で働いたっていいのよね」

「ほんと」

「この仕事で、どんなことが分かったかしら」

「そうですね 私はずるい人を見る目は昔からあるんです。だから、それはこの仕事をしなくてもすぐに分かったと思います…」

それよりも、その反対の大きな仕事を実際に動かしてきた純粋な人たち、っていうか熱い人たちがいるのを知りました。

そういった人たちが、会社でどういう時間を過ごし、どう動いているのか。それを肌で感じると、わくわくしました。

今まではそういった人たちが周りにいなかったんです」

「ユリちゃんは 達成体験がとも少なかったのね」
百合子は少し悲しそうにため息をついた。

そう言われて、ユリは自信を失っていたことに気づいた。

唯一上手くいきかけたモデルの仕事はダメになり、その後、まともな続けられた仕事もなければ、結婚も出来ていない。
自信を失ったとしても不思議はない。

一番の大きな理由は、仕事だった。

ユリの特性を考慮して仕事を選択してこなかったのだ。

ユリの長所は、大きな視点をもっていたこと、と、創造力を持っていることだった。

お店だったら、どんどん改良してお客さんを喜ばせたいし、売り上げも上げたい。しかし、店長に案を提案すると必ずうつとうしそうな顔をされてしまうのだ。

労働条件も良くしたかった。だらだらと残業するのも嫌だったので、それを提案すると、それもまたはね付けられてしまうのだ。

事務職に創造力はもつと無意味だった。与えられた仕事を淡々とやりこなすだけでよいのだ。

そこに改良や長期の視点など全く必要なかった。

そして否応なくセクハラがあった。それを我慢することはどうしてもできなかった。ケンカをして何度辞めたことか。

キャリアにつながる仕事は、必ず遅くまでしななければならない。

母親の体調や精神的不安定さを考えると、遅くまで残ってする仕事は避けなければならなかった。となると、高卒で出来る仕事は小さな事務職かウエイトレスか販売員くらいしか職はなかった。

「ひとつずつ自信をつけていきましようね」
祖母はユリの手をとって微笑んだ。

「ユリちゃんはきつと出来るわ。あんな状況で母親を見捨てずにや

つてきたんですもの。うちの会社の嬢ちゃん坊ちゃんなんかにユリちゃんのようないわよ、きつと」

「そうでしょうか」

「そうよ。それだけあなたは強い。あの人たちは成功体験出来る状況にいただけなの」

「その差って大きいです…不公平です」

「ユリちゃんは、高倉家の娘。それは不公平ではないの？」

ユリは押し黙った。

そうだった。自分は高倉財閥の人間なのだ。

少し焦っていたのかもしれない。そうだ、少しずつ、少しずつ……

「そろそろ秘書課に配属します。詳しいことは、咲田麗華さくたれいかから聞いてちょうだい」

秘書課のなかでも地味めの容姿だった咲田麗華を、一瞬思い浮かべたユリだったが……

「え?! 秘書課に? そんな、いきなり無理です! まだ英語の勉強も進んでいません」

「そんなことはいいのです。明日からは秘書課に行くのです。いいですね」

その瞬間、タイミングよくというか、悪くというか 車は予定地に

到着した。

暁生がドアを開ける前に、百合子は自分でドアを開けて出ていってしまった。

ひ、ひしよかあ〜？

パソコンや外国語を魔法のように自在に操り、他社の人間関係やボスのスケジュールを完璧に把握している秘書課の人間たちを思い出してユリはゾツとした。

そんなこと、高等教育を受けてきていない自分に出来るとは到底思えなかった。

少しずつ、という考えが、祖母によってふつとばされてしまった。じつとりと背中に汗がにじむのを感じた。

麗華の思い

「柿本専務に連絡がつきません。携帯も繋がりません！エクスペレス社との面談にまだ来てないようなのです。」

この前のスケジュールは友同会の会議ですが、そちらに確認したら、もうとっくに終わっているみたいなんです」

受話器を持ったまま、震える声でユリは咲田麗華に尋ねた。

「では、柿本専務に同行している赤川さんの携帯に電話してみてください」

午後のスケジュール表を見直しながら、涼しい顔で麗華は答える。

秘書課に配属されて1週間目から、ユリは取締役たちのスケジュール管理をさせられた。

秘書たちはある程度の係りを決めて重役のフォローを受け持っているが、実際に仕事が動き出すと自分の係り以外の重役たちの調整もしなければならず、優秀な秘書ほど適応範囲は広がった。

その中で咲田麗華はダントツの能力だった。

頭がコンピューターで出来ているのかと思えるほど、的確に仕事を処理していった。

度胸もすごかった。経団連や政治家たちからのオファーであっても臆することなく断ったり打診したり駆け引きをし、仕事が優位に回るようにした。社内のネットワークと人事の把握も完璧だった。

高倉商事は男性の秘書も沢山いたが、男性たちは役員に同行していることが多く、事務はもっぱら女性たちの仕事とされていた。

華やかな容姿をもつ女性秘書が多いなか、咲田麗華は黒いスーツにひつつめ髪、そして眼鏡という、地味な戦闘服をまとい仕事をこなしていた。そんな麗華が仕事に入る前にユリに言ったことを他の誰も知らなかった。

「お待ちしておりました。やっと、ユリさまが来られたんですね。私は本当に嬉しいですわ」

秘書課配属初日。案内される前の待合ルームで目を輝かせて麗華はユリに言った。

「あの、お聞きになってないかもしれませんが、私はぜんぜん秘書なんて出来ないんですけど…」

「はい。今からお勉強されるんですよ。及ばずながら私がお手伝いさせていただきます。分からないことは何でもお聞きください。」

…ただ…ユリさまの身元は他の社員たちにはシークレットなのです。だから、仕事中は私が先輩風な口を聞いても許してください」

「はい。そんなのは、もちろんです」

どうして麗華がこんなに自分を奉っているのか不思議だった。高倉の娘だから、ということだけでは無い秀囲気を感じたユリは、関連施設案内の途中で麗華にたずねた。

「どうして私をそんなに丁寧に扱ってくれるんですか」

「……………」

麗華はしばらく黙っていたが、意を決したように話した。

「ユリさまは私が待っていた人物なのです」

「待つ？」

「はい。高倉百合子会長代理と私は、高倉商事をずっと何とかしたい、と思っていました。でも、前会長や役員たちの力の前では何も出来ませんでした。男たちの結束は強く、私たち女性が入ることはとても無理でした」

ユリは麗華の話が壮大になりそうな気配を感じた。

「総合職の女性は未だに男性の十分の一です。これは先進国でも最悪の数字です。貿易会社から興した商社がこういった状況なんておかしいと思いませんか。」

世界中をかけずり回る商社マン時代だったら男性主導でもよかったですかもしれないですね。ですが、もう対外貿易だけでは商社は回っていかないのです。

そんな時代に必要なのは、ニーズを起こして仕事にすることです。ニーズに敏感なのは女性です。これからは女性の目線でする仕事が必要になってきます」

麗華はオープン・カフェにユリを促した。晩秋の心地よい空気のなかでは外気が居心地よかった。

「咲田さんの考えは分かります。でも、私ができることなんてあると思えません。」

むしろ咲田さんや優秀な女性総合職の方たちで、そういった仕事をなさったほうがいいと思うんですけど」

「もちろん、そのつもりです。　　ですがその第一号にはリーダーがいるんです。それはユリさま以外に考えられないのです」

「ええ?!私か?!」

「はい。“どうして一生懸命やっているのに豊かにならないのか、こんな社会なにかがおかしい、どうしてだ、どうしてだ”と考え答えを追求されてきたユリさまほどニーズを把握するのに適任の方はおられないのではないですか」

自分の生活が覗き見られていたようでユリは、少し不快に思った。カフエオレのカップに口をつける。

「そんなの誰もが思っている事じゃないですか」

「もちろんです。ですがマルクスから量子学まで情報を探す方はそういませんよ」

「調べたのですか」

「ご気分を害されたのでしたらあやまります。ですが、そんな女性は滅多にいないのです。」

苦しい生活の中で自分を曲げることなく高めたい、という向上心を

持ち続けられる強さがユリさまにはあります。それはとても貴重なのです」

あの時の麗華は必死に何かを伝えようとしていた。会社にいるときの無表情とは全然違っていた。出来ないことなどない麗華が、そこまで自分に入れ込むことなど何があるのか？

仕事が出来なくて泣きそうになっているユリには、麗華が期待する大きさにつぶされそうになっていた。アポイントひとつスムーズに取れないではないか。

ガールズ騎士（ナイト）

「先生なんだかお疲れみたい」

桃子はシャンパングラスを持ったまま、ぼうとしているユリを心配そうに覗き込んだ。

「…ちよつとね」

作り笑いをしてからグラスをテーブルに置いた。

あれから1ヶ月半ほどたち、なんとか秘書課の仕事には慣れてきたものの、気が緩んだ瞬間に疲れが顔に出てしまったようだ。

今日はジュディから誘われた、とあるクラブ主宰のクリスマスパーティー。

モデル出身でファッション・コーディネーターのジュディ関係ならでは、華やかな顔ぶれが揃っていた。

モデル仲間はもちろん、メイクアップ関係、芸能人もいる。

そこへかつての教え子、桃子を誘ったのはユリだった。

桃子は町内にある神社の一人娘だった。ユリが高校生になったとき、神主でもある桃子の父親に家庭教師を頼まれたのだ。

ユリは成績がよいと近所では評判だったようで、それを聞きつけた桃子の父親が、小学校高学年になる娘の勉強をみてやって欲しいとやってきたのだ。

「そんなことより桃ちゃんは体、大丈夫なの？」

「ええ。今日は大丈夫です」

色白な頬が上気していた。桃子は病弱で、すぐに体調を崩してしま
う。

かつてはユリに付いてモデルのバイトまでしようとしていたが、体
力のない桃子は続けることが出来なかった。

そんな桃子なので、家で神社の手伝いをするのが精一杯で、毎日慎
ましやかな生活を送っていた。

今日は、可愛い造作の桃子が胸元と背中が大きくあいた黒いド
レスを着てきたのにユリは少なからず驚いたのだった。

そうか…桃子も、もう23歳だものね。

いつまでも妹のような存在だったので、一人前の女性になっている
のになかなか気づかなかったのだ。

「君たち、モデル？あっちで話さない？ドンペリもあるよ」

30代と思しき、ひよろつとした男が話しかけてきた。確かIT関
連の若き社長とか言われている男だ。

奥にあるソファのあるルームを指していた。今日はもう何人こうや
って声をかけられたのか分からない。桃子の眩しさに惹かれて男た
ちがやってくるのだ。

「ごめんなさい、今日は疲れているのでまた」

桃子が思いがけない力でユリの腕をつかんで引き寄せた。

そして、まるでユリを守る騎士ナイトのように前に進み出た。意外な強さだった。

「先生、行きましょ」

そのままユリの腕を掴んだまま桃子は出口に歩きだした。

「ちょ、ちよつと桃子」

「もう帰りましょ先生」

「じゃ、じゃあジュディにだけ挨拶してくる」
その言葉を聞いた瞬間、ふくれっ面をしていた桃子の表情が変わった。

「ええ」

歪んだ顔で桃子は笑った。

「…ごめんね。今日は嫌な思いさせちゃったかも」

帰りのタクシーの中でユリは桃子に謝った。

曉生に着いてこられたくなかったなかつたので、自家用車は断っていた。

「ううん。とっても楽しかったです。久しぶりにあんなに大勢の人の中に出られて。美味しいものも食べられたし」

「そつ?」

「はい。いつもは 私が神社の娘だからなのか、みんな気兼ねしてクリスマスパーティーってなかなか呼んでくれないんですよ」

桃子は笑った。

「ほらっ、おしゃれする機会も少ないから、今日のはりきっちゃった」

胸に手を当て桃子は背筋をくいと伸ばした。顔を見合して二人は笑った。

「みんな桃ちゃんに見とれてたよね」

「うっん、先生を見てたんですよ」

「違うよ」

「先生は分かっているんですけど…もう、あぶなかしくって見てもらえませんでした」

桃子は疲れたように体を背もたれにあずけた。その様子がいったばしの保護者のような風情だったので、ユリは面白くて仕方なかった。

「この年の女にあぶない、なんて言うかな？」

「だって、おかしい男性ばかりだったじゃないですか！あんなの相手にしてはダメです！先生はもつといい男と付き合わないと」

「青年実業家もダメ？いい男ってどんなよ？…そんなツンケンしなくたって、ああいう場合は適当に相手してりゃいいの。まあ、桃子

「やんは義行よしゆきさんっていう素敵よきな人がいるから関係ないか」

「……………」

不意に桃子が口を閉じた。

「…何かあったの？」

桃子はゆっくりと頷いた。

「別れました」

まっすぐフロントガラスに視線を向けたまま答える。車は渋滞にはまったようだった。クリスマス一色の街に人々が浮き足立っている。

「結婚しよう、って言われたんです。でも…私は返事をする事が出来ませんでした。」

義行さんはいい人だって、みんな言います。あんないい条件の人、もういないって。…けど、私は彼と結婚したくありませんでした。

彼のことは好きでしたが信用できなかつたんです」

「どっして？」

「言っている事とやっていることがチグハグだからです。もちろん、表面上の行動は言うことと結構一致しています。」

私に対しても積極的でそれを情熱だと思った時期もありましたし、今でも気持ちはあります。けど、頭のどこかで『この人は冷酷な人だ』という信号が鳴るんです。

『愛しているなら、こうしろ』という要求が、こっちに伝わってくるんです。それを　打ち消せませんでした。だから、別れて…よかったです。

ショックも大きかったです。後悔はしていません」

桃子の意思の強さにユリは高揚した。

感情に流されることが多い恋愛中において、相手の深いところを感じ取り、ピリオドまで打てる女性はそういないだろう、と思った。

「よく頑張ったね。…ごめんね、私、そばいてあげられなかったね」

「これは私と義行さんの問題だから　なーんて、もっと早くに先生に電話すればよかった、って今は後悔してます。あ、先生はそれどころじゃなかったか！」

桃子はユリに向かってイタズラっぽく笑いかけた。

「言ったわね！…ま、いつか。今日はガールズナイトだよ！」
「もちろん！」

ふふふふ、と微笑あった。

泊まりで一晩中食べてしゃべりまくるガールズナイトは、いくつになっても、どこまでも楽しい。

飽和

「以上の点から、今後動いていくのは”農”であると私は確信しているのです。」

新規事業部の企画会議。

高倉誠士はいつになく緊張していた。この部署が設立されてリーダーとなつてから、初めてのプレゼンテーションだった。

「皆さんの意見は？」

比較的若手が集められた新規事業部の人数は多くない。精鋭3人に、咲田麗華とユリ。

「まあ、面白いんじゃないですか」

オーストラリア駐在から帰ってきたばかりの営業若手・西村雄介が口を開いた。

「日本政府の食料自給率を上げるってのがイマイチ信用できないんですけど」

リスクマネジメント部の八坂融。

「違うんだ。政府を追従させるために僕たちが農を市場として、ビジネスとして活性化する、と考えないと。」

リスクはある！けど、その分まだ誰も本格的に入っていないから市

場としては成り立つと思うんだ」

「そうですね。各自治体がどのくらい予算が取れるのか、というのをもっと細かく調べたらどうでしょうか。よければ欲しい情報を教えていただければ他も私が調べますよ」

広報出身の女性総合職・滝田薫。

提案、そしてそれに伴う新しい仕事の打診。

その後も建設的に意見が出て話が進んでいった。

皆、やる気がみなぎっていて活気ある雰囲気は部内に溢れていた。

「はあ」

食堂でお昼を食べながら、ユリは短くため息をついた。

年があけてユリと咲田麗華は新規事業部に配属となった。

まだ秘書課の仕事も一人前に出来ないのに、どんどんとスケジュールを詰められたユリは毎日が苦痛だった。そう、メンバーの会話に着いていけないのだ。自分だけが場違いな気がした。

「何してるの？ユリさん？」

顔を上げると、誠士が不思議そうな顔をしてこっちを見ていた。

「え?!」

自分のお盆を片付けた後、台車にあった台拭きで、そのあたりの机

を一生懸命に拭いていたのだ。

しまった!!!!

最初に配属された食堂の後片付けの仕事をつい、してしまったのだ。

「あ!いえ」

あわててその場から立ち去る。

「待つて」

誠士が追いかけてきた。

「ねえ、ねえ、どう思います?さっきの僕の話?ユリさんは一言も意見をくれなかったから、ずっと気になってたんです」

「いいと思います」

ユリは逃げたいのに、誠士はお構いなしに着いてくる。

「ほんとですか?どこがいいと思います?」

「」

「あの、率直な意見でいいんです。今までプレゼンしてボロクソに言われ続けてきた僕ですから何を言われても驚きませんから、言っ
てください」

「分かりません」

「え?」

ユリの小さな声が誠士には聞き取れなかった。

ユリは立ち止まった。

「分かりません。そんなの私には分かりません。皆が何を言っているのか、私にはぜんぜん分からないのです」

感情的になつて最後のほうは語尾が震えた。

「失礼します」

必死で涙をこらえて走り去った。

ひどい！

お婆さま、ひどい！！！！

こんなスケジュール、誰だつて無理よ！

新人の社内研修というのは1年半ほどかけてやるのが通常だった。それをユリには、全くさせないで現場に放りこんだのだ。

誠士も誠士だ。

ユリが素人だということを知っているクセに… ユリの背景を知っている人間なのに、あんな扱いをするなんてどうかしている。

「ユリさま！」

不意に腕を掴まれた。咲田麗華だった。

「こっちへ」

腕を掴んだまま麗華はユリを使われていない会議室に引き入れた。

「落ち着いてください」
肩を掴んだ麗華は、強い視線でユリを覗き込んだ。

「もう嫌！私には無理！？あなたたちの言っていることが、さっぱり分かんないのよ！私のせいじゃないわ、こんなの誰だって出来ないわよ」

ユリの激情を麗華は受け止めた。

何も言わずに、そのままユリにもっと話しをさせる意思を表情で伝えた。

「私は大学だって行ってない、留学もしてないし、MBA（*主にアメリカで認められている経営学修士号）も持ってないのよ！

…それなのに東大出の人間たちよりハードなスケジュールで 出来るわけないじゃないの！」

麗華は眉を少しあげたあと、困ったような表情をつくった。

「そうですね」
視線を外すと、下を向いた。

「会長代理はちょっと急ぎすぎですね」
優しくそう言うと、会議室の椅子にユリを座らせた。

「コーヒーを入れてきます。ちょっと待っててください」
そういつて部屋を出ていった。

ひとりになった会議室はとても静かだった。

麗華を待っているうちにユリの心は落ちついてきた。

今まで溜まっていたものが吐き出されたようで、少しスッキリした感じだった。

「午後は二人で調べることがあるからしばらく外にいます、って高倉部長には言ってきました」

トレイにコーヒーをのせて麗華は入ってきた。

「部長はなんて？」

「不安そうな顔してましたが分かった、て。ユリさまのさっきの一撃が効いているみたいです」

麗華は笑いながらコーヒーをユリの前に置いた。

「あ、ありがとうございます」
取り乱して麗華に対して敬語を使えていなかったことを、ユリは思い出した。

「どうぞ」

砂糖多めの甘いコーヒーは、ユリの心をほぐしてくれた。麗華は元スーパ―秘書だけあって、お茶を入れるのも抜群に上手かった。ユリの好みも熟知している。

「おいしい」

「よかったです」

目を細めて麗華が笑った。

そういえば麗華は新規事業部に移ってからめがねをしていない。

「めがね、辞めたんですか？」

「…はい。普通だったら秘書になったらコンタクトにするんですけど、私はめがねをしてなければ戦えなかったんです。めがねは防具みたいな感じだったので」

「じゃ、新規事業部は戦わなくてもよくなったんですか？」

「いえ…」

麗華は少し恥ずかしそうに微笑んだ。

「なんかユリさまの隣にいとキレイになりたくなっただんです」

「どうしてですか？」

「綺麗な人のそばにいとさういう気持ちになりませんか」

驚いた顔をしてユリは麗華を見た。

麗華が自分を見習っている部分があるなんて…

「ユリさま、何が分からないですか？さっきの高倉部長の話、そんなむずかしくなかったはずですよ。」

新しい事業を始める、動機・理由づけ・データーを説明したのは分かりやすいよね？」

「はい。あの…部長が言っている意味は分かるんです。ただ、皆が話す専門用語が分からないっていうか、事業を展開していく実際も

分からない

事業つてこうやって進んでいくんですよ、ってというのが肌で分からないんです」

「やっぱり」

麗華は何度も頷いた。

「経験がないものが分からないのは、あたり前です。私だって分かりません。営業部にいたわけではないですから。」

ただ、会社に長い間いれば何となく分かるのと、MBAで習ったことで分かった気になっているだけなのです。私もこれからです」

「咲田さんでも分からないことがあるんですか」
「ちょっと嬉しくなってユリは尋ねた。」

「もちろんです。……あのね、ユリさま。どうも百合子会長代理は今の商社の人間たちがやっているような仕事を私たちに望んでいないようなんです」

「どういうことですか？お婆さまは何をさせたいんですか？」

「これは私が感じていることなのですが…ユリさまには仕事を覚えさせる気はないということですよ。」

だから色々な部署に短期で次々と配属はするけれど仕事を覚える前に配置を変えてしまうのではないのでしょうか？」

「そんなことしていったい何のメリットがあるんですか？」

麗華は少し言いよんだ。

「これも私の推測なんです。この会社の仕事の仕方に間違いがある、と思われているからかもしれません。」

その間違いに気づくことを期待して、ユリさまに仕事場に入ってもらっているような気がします。だから仕事の内容なんてどうでもいいのです。」

もっと大胆に考えると、今の社会の間違いをどうにかしたい、どうにかしよう、と会長代理は思われているのかもしれませんが。」

「今の社会？」

「はい。それはユリさまが、考えてこられた“なぜ豊かになれないか”に通じることなのかもしれません。」

「分からない。お婆さまはいつたい何を考えておられるのかしら。」

「それは私にも分かりません。」

世界を変えるゲームをする、と言った日、確かに百合子は今の商社を改革したい、とは言っていた。今まで仕事を覚えることに必死でユリはそのことを忘れかけていた。

最初に会った時に言われた祖母の言葉が、今、大きな謎に満ちてきていた。

はじまりのお茶会

半年がたった。

麗華に“仕事を覚えることを期待されていない”と言われてから、ユリは気持ちが悪くなった。

だからといって分からないことを放っておける性格でなかったので、懸命に勉強はしていた。

そのおかげで、みんなの会話にも少しずつ加われるようになってきていた。

「部長、バイオマスの新しいデータ、エドライブ入れておきましたから」

「あ、ああ、はい」

「では、お先に失礼します」

「はい。お疲れさん」

誠士はユリの言葉に答えたものの、何だか釈然としなかった。

新規事業部に配属されてから、ユリとの距離がいつこつに縮まらな
いのだ。 というより避けられているような感じがずっと続いていた。

別に無視されるわけでもないし、言った仕事はきちんとこなしてく
れたし、最近では活発な意見も入れて気を配ってさえくれるようにな
った。

ただ、誠士には冷たい風が吹いている気がした。

落ちつかなかった。

ユリに嫌われていると、なぜか自信が持てなくなるのだ。

どうにかしなければ…

ユリの冷たい美しい横顔を思い浮かべて、誠士は深い息をついた。

「今後はこのメンバーをコアとして、女性部を立ち上げたいと思います。リーダーは高倉美雪。サブリーダーは咲田麗華、室生ユリ、会計……」

「ちょっと待ってください。高倉会長代理はリーダーじゃないのですか？」

比較的上座に座っていた、吉岡早苗が手をあげた。

「私はあくまでフォロワーです。これからは皆さんがメインとなって新しい風を起こしていくのです」

借り切ったホテルの一室では、華やかなお茶会が催されていた。

テーブルの上座に高倉百合子を配し、ずらりと女性総合職のメンバーが座っていた。合計18人。

「詳しいことは私から説明させていただきます」

美雪がすくつと立ち上がった。バイオレットのスーツを着てどこかの女社長のような風情だった。

ユリは驚くばかりだった。

母の美雪がすっかりと見違えていたのだ。

朝食か夕食時に少し顔を合わせる程度になっていたので、いったい彼女が何をやっているのかよく知らなかった。

毎日、自分のことで精一杯だった。それは美雪も同じだったらしい。別人のようにテキパキを働いている美雪にしばらく口もきけなかった。

「これから皆さんは、高倉商事の亜流ともいえる仕事をするようになります。これは全く今までとは違った仕事だと思ってください。お手元の規約をこらんください。」

色々と書いてありますが、このメンバーはみな女性であること、が大前提です」
手元の資料を、みな覗き込んだ。

「私たち女性にしか思いつかない仕事を話し合うのが目的です。ここでは意見を言うていただくことがまずメインです。会社でやっている男性たちのようにプレゼンなどはしません」
何人かがくすりと笑った。

「プレゼンは証明みたいなものです。データを出してあれやこれやお偉いさんに納得していただく作業は全く女性的ではありません。」

皆さんも経験ないですか？『あ、これって売り出したら結構いけるかも』とか『こんなサービスやお店があったらな』とか思っ、ビジネスの種を見つけたこと。

でも、事業化するには納得させるだけの証拠を沢山作らないといけないのです。

特に男性は女性の意見を軽視する傾向がありますから、それに立ち向かって気力を出して意見するなんてしんどいですよね。

そうすると、もうやる気はなくなってしまふ。意見も出なくなってしまうのです。

もちろん、仕事の上での意見は皆さんしているでしょう。それはルーティンだから出来るのです。

今からはルーティンでなく、新しい形態を創造していくのです。

本当は女性たちのニーズは大きなヒントなのです。市場の半分は女性なのです。また、画一的なニーズでは満たされない時代です。これからは多くのヒントを拾い上げていくことが本当に重要です。

そういった話し合いは会議室でなく、こういったホテルやトレンドイナ場所でも出てくるものでしょう。

時代のニーズを感じるためにも必要ですし 皆さんも、こっちの方がいいですね？ケーキもついでるし
「皆がふふふふ、笑った。」

「いずれは企画した仕事は実行していきたいと思えます。ですが、

まず柔軟な発想です。日常の文句も大いに結構です。それこそ二一
ズだからです。

今の経営企画部や事業企画部でこんな話ができますか？無理です。
もう堅くって口も頭も回らなくなりそんな感じですよ。こういう部門
で、会社をやっている、というのが、今の商社なんです。危険で
す。

私たちは全く違った戦略をとります。生き残りというものは選択肢
が多いほど、確率はあがるのです。それが今回、この女性部を設立
した高倉百合子会長代理の目的です」

「あの質問です」

1人の女性が手をあげた。

「どうぞ」

「そういう目的でしたら、もっと多くの女性社員に協力してもらっ
たら、もっと多くの意見が出ると思います」

「もちろんです。ですので、皆さんは各部署に戻ったらアンケート
や、意見を求めて欲しいのです。

そこで、『いいかも！』とか『楽しそう！』って思う意見を言った
社員には、お茶会に参加してもらってください」

ああそうか、と皆うなずいた。

「最初に言いましたように、今日お集まりの皆さんはコアですが、
高倉の女性社員は皆メンバーなのです。ですので、お茶会のメンバ

「は流動的になると思います」

ここで美雪は息をつくために、水を飲んだ。

「なぜ女性社員だけなのか、と思われませんでしたか？男性社員の意見も聞いたらいいいじゃないか、と。」

ですが、そんなことをしたらそのまんま会社です。今の会社は男のものですよ。ですからわざわざ私たちは女性部を作ったのです。

きっと男性が入ったら甘味は食べられないし、会議室でやれ、ってなります」

メンバーたちは笑いながらも肯いた。

「私たち女性にとっては、効率より空間の気持ちよさが大事なのです。それが引いては、大きな効果に通じるのを私たち女性は知っています。」

リラックスしたり、おしゃべりしたりしながら、いいものを作っていく。これが私たちです」

ドイツへ

「え？出張？」

「はい。室生さんと西村くんにドイツに行つて欲しいんです」

誠士の言葉に、ユリの思考は停止した。朝礼が終り、少し気が緩んでいた時間だった。誠士はユリのデスクの横に立ってそのことを告げた。

『咲田さんもないところで私がやっていけるはずない。それもドイツになんて…』

「ぶ、部長、私には無理です」

「大丈夫です。出張には僕も行きます。室生さんは着いてきてくれるだけでいいんです。新人は着いていくのが仕事なんです」

誠士はさわやかに笑った。

「それと…これは大きな声で言えないんですが」
誠士はユリに近寄つて少し顔を寄せた。

「夏休みも兼ねてるんです。仕事を終えたらそのまま現地で休暇を取るつもりなんで、半分、旅行のつもりで来てください」

「いいんですか？」

誠士は笑いながらうなずいた。

「もう夏休みシーズンですから大丈夫。あつちの家に逢も行くんで

すよ

「遙さんが？」

「もちろん彼女のぶんは自費ですよ。ユリさんも、よかったら家に泊まりませんか」

「そ、そうですねえ」

普段なら即答で断るのだが、今回は地の利の不安があっただので答えに迷った。

「西村さんはどうするんですか」

「彼はフランクフルト支店の系列ホテルかな？なんせアイツは世界中飛び回っているから自分の気に入ったところを自分でキープすると思っよ」

「うっう」

ユリは頬骨に手をあてて、うめいた。

「じゃ、そっぴいことば、よろしく」

書類を持ち上げて合図のよつに振ると、誠士はそのまま行ってしまった。

なぜか、とても嬉しそうだった。

フランクフルトから少し北上すると、ドッテンフェルダー村と書い

た看板が現れた。

ここはメイン川支流のニダ川に沿って肥沃な大地が広がる土地で、中世から引き継がれた農場が、現在では、ある特別な方式に従って行われている場所だった。

バイオ・ダイナミック農法。

ルドルフ・シュタイナーの哲学的な農業方法。

バイオ・ダイナミックとは、有機栽培のうえに、更にダイナミックという方法が適応される。ダイナミックとは宇宙の力を呼び込み、農作物の生育に反映させることだ。

「宇宙の力を呼び込むのです」

農場を案内してくれたガルトナー氏が説明する。

「ただ種を撒いて、収穫するというものではないんです。

太陽、月、星々の運行が生み出す宇宙のリズムが植物に与える影響をも深く洞察しながら作業を進めます」

「宇宙のリズムを取り入れると収穫に差が出るんですか」
誠士が尋ねた。

「はい。月がおひつじ座、獅子座、射手座、にいる時は、豆類、穀物、実の生る野菜類を育てるのに適していて、他の日に撒いたのより多くの収穫があります」

ユリは資料でバイオ・ダイナミック法やルドルフ・シュタイナーという人間学者の思想を読んだ時点で大きな興味をひかれた。

地球だって宇宙のなかの天体のひとつ。
だとすると、天体の運行によって地球の大地が影響を受けるのが当然だ。

「ドッテンフェルダーは農業だけでなく、皆が暮らしていく共同体なんです。酪農やチーズ工場、養蜂所、パン焼き小屋もあります。

最近はそのらを売る小売店が繁昌しましてね、建物も大きくしたんですよ」

「パンを売っているんですか？」

「パンだけでなくここで採れるものは、みんな売っています。評判がいいので助かっています。

ここは障害者の方たちも同じように働いてもらっているので雇用の面でも助かっています」

この共同体は障害者の人たちも、健常者の人も同じように一緒に働いていた。

村で働く人たちは家族でここの住居に住む人と外部から通勤してくる人たち、という風に分かれていた。

そして村に住む人たちは、共同体としてひとつの財布しかもたない、という生活をしていた。

経済至上主義の世界からきた人間には、まるでユートピアの世界の

ようだった。

「ひとつの財布だなんて 誰それは多く使いすぎだ、とかいう問題は起こらないのですか」
ユリは質問した。

「ほとんど起きませんね。ここで生活していると、生活費はあんまりかかりません。大きな買い物は会計係に”これを買ってからお金が必要だ”という申請をします。」

そこで認められると電化製品など大きな買い物をする事ができます。共同体の根底にはシュタイナーの思想があります。経済は友愛だという精神です」

「友愛？」

「はい。シュタイナーは社会を三分節化する、社会三層論を打ち立てています。簡単にいえばフランス革命の宣言、自由・平等・友愛、これを精神活動・国家・経済と対比させることです」

「経済が友愛ですか？自由ではないのですか」
自由経済という概念を持っていたユリには意外な言葉だった。

「はい。経済活動の友愛とは、すなわち、お金に対して倫理や愛を持つ、ということです。極端に富めるものや貧しいものを作り出す仕組みは友愛ではありません」

「では自由は？」

「それは精神活動です。精神は束縛されない自由な状態であるべきです。思想を国家にとやかく言われたり、芸術作品を経済価値で判断するのは間違っていますか？」

「芸術の価値？」

「はい。例えばある人にとっては、素晴らしい心打たれる絵画があったとします。しかし多くの人にとってはそうじゃない。

そうすると、経済観点からみてその絵は評価されません。しかし、その絵が価値がないということではないと思うのです」

「全くその通りです。では国家は何をするべきですか」

「国家は平等に法律を運営しなければいけません。国に何もかも頼もつとするのはどうかと思います。

頼むというのは権利を預けるということで危険です。経済や思想の問題まで国に委ねるべきではありません」

『それでは、実質的にどういった仕組みがよいとシユタイナーは唱えているのですか』

ユリはそう質問したかったが、通訳を通すタイミングを誠士に奪われてしまった。

「バイオ・ダイナミック農法はどのように、ドイツの人々に受け入れられているのですか？よろしかったら、一般企業や政府との関係を教えてくださいませんか」

『そうだった… 今日には農業のことで来ているんだったわ』
我に返ったユリは、夏の風が土のにおいを運んでくるのを感じた。

この整然とつくられた農地のなんと美しいことか。

そして牧歌的で精鋭的な共同体の人たち。

木々の向こうにひろがる広大な大地と空…

シュタイナー…

ここでは時間がゆっくり流れている。

ユリはめいっぱい息を吸い込んだ。

「お二人とも、おかえりなさい」

家に帰ると、ぱたぱたと遙が迎えに出てきた。

遙と誠士はフランクフルトの郊外の一軒屋を借りて二週間ほど滞在する予定だ。

ドイツハウスは可愛らしい造りが多く田舎に行くほど童話の世界のようだったが、彼らの借家も暖かみのある造りだった。屋根がオレンジ色だったのだ。

「大変だったでしょ、ユリさん。あのね、ワインを用意したの。ドイツワインは好き？」

「ええ」

「ほんと！よかった。どんな銘柄がいいか分からなかったんで、片端から買ったの。どんなのが好き？甘いの？」

「そうですね」

苦笑しながらユリは遙に答えた。

「遙、ユリさんが居て嬉しいのは分かるけど、ちょっと先に着替えさせてくれよ」

「?!」

誠士の言葉に、遙は真っ赤になって黙った。

リビングに入った瞬間、ユリは動きが止まった。

「どうして？」

ダイニングの向こうから暁生が出てきたのだ。

品のいいサマーセーターを着て、ワインの栓を抜こうとしている姿は、いつもとは別人のようだった。

「お帰りなさいませ」

「あのね、暁生さんに着いてきてもらったの。ほらっ、こっちで私ひとりになっちゃうことあるから、色々手伝ってもらう人と相手してくれる人が欲しかったの」

遙が無邪気に笑って説明した。

「遙さん…それは女の人の方がよかったんじゃないかしら。身の回りの世話は女性のほうがいいわ。」

それに、私と誠土さんが仕事に行っている間に暁生と二人というのは、ちょっと世間的にどうかしら」

「大丈夫よ。暁生さんって嶋崎さんの息子さんでしょう？ほんと、礼儀正しくて、いい方。私、信用してるの。」

それに、ユリさんがいないと暁生さんだって失業状態になっちゃうでしょう？それは可哀相かなーって。ね、ユリさんだって暁生さんがいたほうが何かと嬉しいでしょ」

お嬢さま育ちの遙らしい無邪気さだった。

「まあ、いいじゃない。ね」

ユリの頑なさに驚いた誠土が、ご機嫌をとるようにユリに笑いかけた。

「ああ、相良くん、とりあえず、そのワイン開けて…あっと、グラスも用意しておいてくれるかな。人数分」

「はい」

ディナーは楽しく進んだ。

ユリはあれから明るく皆に接したし、ほとんど遙が舞い上がってしゃべっていたので、場が沈むことはなかった。

暁生は自分から話すことはなかったが、場を和ませる雰囲気を湛え

ていたし、質問されても無難に答えていた。

夜の9時を過ぎる頃、遙はすっかり酔いつぶれてソファに沈み込むように寝てしまった。

「強くないくせに今日は飲んだなあ」

そう言っつて誠士は、遙にブランケットをかけてやった。

「ユリさんが居るのがよっぽど嬉しかったんだなあ」

「どういう意味ですか」

「遙は、あなたのファンだったんですよ」

誠士は、言うのを少しためらったようだった。

「え？」

「モデルのあなたのファンだったんです。あなたと初めて会った日、遙、あなたの載っている雑誌を僕に見せてくれたんです。昔の雑誌でしたが、遙はずっと取っておいたみたいです」

その言葉を聞いて、ユリは遙をまじまじと見た。

唇を半開きにしたまま、少し赤い顔で寝息をたてていた。

何不自由なく育ったお嬢さまの遙が、そんなに自分の載った雑誌を大事にしてくれていたなんて…

「ユリさんだ、ユリさんだ、って言ってました。あなたにファンレターを書いたこともある、って。引退してから、ずっとどうしているか気になっていましたみたいですよ」

「そうだったんですか」

「もしよかったら遙に優しくしてやってください。きっと喜びます。ああ、もう喜んで酔っ払ってますね」

誠士は優しく笑った。

なんだかユリは、奇妙な気分だった。

ドイツまで来て仕事をしているのも信じられなかったし、モダンなドイツハウスの空間にいるのも変だった。

そして全く違った世界の住人のお嬢さまが自分を好きだということも、ましてや従妹だというのもやはりおかしいな気持ちだった。

蛍の記憶

数日間、ユリたちはドイツの農業と流通関係の現場を視察した。

そして最終日に、ドッテンフェルダー農場をもういちど訪れたのだ。ガルトナー家の夕食会に呼ばれていた。共同体の生活やそこで採れた作物を使つての料理も味わうことが出来る、そんな体験を3人は楽しみにしていた。

「大変、おいしかったです。久しぶりに子どもたちと食事をしたのも暖かい気持ちになりました。楽しかったです」

帰る時、誠士はガルトナー氏にお礼を言ながら堅い握手をした。

ガルトナー一家には暖かい空気が溢れていた。3人の子どもたちは無邪気で伸び伸びとしていた。

そんな子どもを見るのは本当に久しぶりだった。

殺伐とした日本の子どもとの現状と比べて、澄んだ目をした子どもはなんと愛らしく癒される存在なことか。日本人3人は、久しぶりにいい気持ちになっていた。

「また来て下さい。ああ、そうだ、今日は三日月ですから水路のそばを通って帰ったら蛍が見られると思います。幻想的で綺麗ですよ」

ガルトナー氏はぐるっと指を回して、水路への道を指し示した。

3人はガルトナー氏の言われた道を目指して歩き出した。

プルルル

西村雄介の携帯電話が鳴った。

「Hello」

英語で答えてから、すぐに日本語に切り替えた。

「うん、うん　そっか…うん。分かった　また後で電話する」

蒸し暑かった昼間にくらべて、今は涼しい風が吹いている。虫の音が遠く近くに聴こえてきた。

「部長」

「うん。いいよ。もう仕事は終わったんだし早く日本に帰ってやれよ」

「…すみません。じゃあ、お先に失礼します」

「出張、無理言っつてすまなかつたな」

「いえ、とんでもない。今回の出張は来て本当によかったです」

「そっか」

「はい」

「じゃあ、お疲れさん。また日本で」

「はい。室生さん、また」

ユリはそのまま会釈した。

どうやら西村に何か急変があったようだ。

「彼のお父さん、今あんまり容態がよくないんだ。今回の出張もどうしようかと思ったんだけど、アイツがいい、って言うていうのに甘えてしまった」

「西村さんってすごい度胸ですもんね」

「海外であんだけ強気でいられる男はそういない。だから、うちの部に来てくれた時はビックリしたよ」

そのままユリと誠士はビオトープのような水路の脇を歩いていった。

ふっ

青い光がかすかに光った気がした。

まだ10時まえだったので、あたりは薄暗い程度だ。欧州の夏は暮れるのが遅い。

「今、光りませんでした？」

興奮してユリが叫んだ。

そのまま、水路に走って下りていく。

「ほら、ここらへん！」

一生懸命あたりを探した。

その瞬間

小さくて微かの光が、浮かんた。

こっち、あっち、そして向こう

「わあ
」

日本の蛍よりも、弱い青い光だった。ほわっと点いては消え、浮か
び、ゆっくりと旋回していく。

「きれい
」

幻想的な光に魅了されているユリ。

三日月の薄明かりのなかで輝くユリの瞳に、誠士の心は奪われた。

月の女神ディアナのようなユリ。

狩猟の神でもあるディアナは、白馬がひく銀の馬車によって夜空を
駆け巡る。そして銀の弓を引き、銀の光の矢を放つ。

意思の強いユリの性格はディアナそのものだった。

しかし今は、女性らしい妖しさで空間を満たしていた。

生と死をつかさどる月の女神のやさしさ、残酷さ、甘美。それは蛍
の命のはかなさと同じだった。

「部長、ほら」

蛍を捕まえたユリが、誠士を招いた。

その微笑は聖母のようであり、いたずらっ子のようでもあった。

「僕、虫はニガテなんですよ」

苦笑しながら、そういった瞬間、誠士に記憶の音が響いた。

『ぼく、虫きらい』

誠士が言ったその言葉を聞いて、その子は悲しい顔をした。

『あ、そっ』

差し出したカブトムシを、そのまま握って指で隠した。

『よわむしだな。そんなんじゃないって笑われるよ』
痛いところをつかれた。

自分は妹を取り返さないといけないのに。
弱虫だと、取り返すことなんて出来なくなってしまっ。

『ぼくはよわむしじゃない！』

『いや、よわむしだ。くやしかったら、妹をとりもどしてみろよ』
いつにないイジワルをその子は言った。

『ああ！ぜつたいとりもどしてやる。なんだい、こんなの』
『あー！』

その子の手を叩いて、カブトムシを地面に落とした。

『何すんだよっ！』

『うるさいっ』

そのまま取っ組み合いのケンカになった。

なんで、あんなことをしてしまったんだろう

あの子は、僕を慰めるためにカブトムシをくれる、と言ったのに。

「あら、部長つて案外弱虫なんですね」

あの子の懐かしい光が斜め下から覗きこんで笑っていた。

それはすぐにユリの顔の輪郭をとった。

誠士は慄然とした。

「ほーら、おかえり。こーんなに綺麗なのに。分かんないなんて、
かわいそ」

あわせていた手のひらを開いてユリは、蛍を闇に放った。
ぼわーと光は、空へ上がっていった。

ユリと同時に誠士はその光を見上げた。

空はすっかりと藍色で、星と月が輝いていた。
そこに上っていく、かすかな光。

「分かっています」

誠士は穏やかな声でつぶやいた。

「え？」

「今、とても美しい世界にいるってこと ……彼らが宇宙の一部だ
てこと」

誠士は蛍の光と空を見上げながら、どこか悲しみの入り混じったよ
うな多幸感に満ちた顔をしていた。

「そして僕たちも」

誠士の言葉を聞いたユリは、満足げな少年のような顔をした。

何も言わず、二人でじっと宙を見ていた。

淡い上弦の月、微かに光る星の間を縫うように旋回する蛍。

二人がいるのは、どこか別の次元だったのようだった。

ユリは意識がぼやけるのを感じた。

誠士の生立ち

『たしかこのヘンにあったはずだ』

誠士は、クローゼットの奥からダンボール箱をひっぱり出した。

その箱から一冊のアルバムを取り出した。

ページをめくると、6〜15歳の子どもが集団で写っている写真が次々と現れた。

それは懐かしくも痛い思い出であった。

誠士が預けられていた施設での写真だった。

彼はそこで育った。

『あの子はどこだ？』

カプトムシをくれるといった少年を探す。

違う、違う……

いったいあの子は誰だったのだろうか？

彼か？

ひとりの少年のところまで目が止まった。

それは、春日裕太かすがゆうたという少年だった。

彼は施設でも一番仲のいい友達だった。

昆虫が好きでよく集めては、昆虫嫌いな寮母さんを驚かせていた。

裕太は建築現場に就職し、誠士は奨学金を受けて大学に進学した。お互いに違った道を歩むようになり、ふたりは連絡を取らなくなった。

誠士は一人前に働いてみえる裕太に会うのが、恥ずかしかったし、裕太はエリート道にいる誠士に、なんとなく近寄りがたい雰囲気を持ってしまったからだ。

近況を話し合ってから誠士は裕太に切り出した。

「おまえさ、昔昆虫好きだったろ？」

「ああ。そうだったなあ」

裕太は少し遠い目をした。

「なつかしいな。色々獲ったなあ」

「俺にカブトムシをくれようとした事あったろ？」

「あつたけ？」

「覚えてないか？ ほら、俺が妹のことで揉めてたころ……」

「うーん、あつたかもなあ」

裕太は首をひねっている。

「俺の妹がさ、施設から親戚に連れていかれそうになって、どうしようもなくなって俺が落ち込んだときだよ」

「ああ、あつたな。そうだ、そうだ。おまえ無茶苦茶荒れてたもんなあ」

「それはいいんだよ。そんな時、おまえ、俺を慰めるためにカブトムシくれなかったけ？」

「…ごめん 誠士。よく覚えてない　でも、薄っすらと記憶があるから、きつとそんな事をしたかもしれない…」

困った顔をしている裕太を見て、誠士はもうそれ以上言う気はなくなつた。

裕太の不器用な優しさは変わっていない。
それだけで誠士の心は温かくなつた。

「おまえさ、どうしてそんな事聞くんた？何か重要なことだったのか」

誠士のグラスにビールを足しながら、裕太がたずねた。

「いや。この間ドイツに行ったとき虫を見たんだ。その時、ふつとその事を思い出したんだ」

「おおードイツかー　ドイツといえば俺、今ちよつと関係ある仕事してるぜ」

「何だよ」

「バイオダイナミック農業ってのをしてるんだ」

驚いて誠士は、まじまじと裕太の目をみつめた。

「バイオダイナミック農法ってのはな」

「知ってる」

「え?!」

「知ってるよ。バイオダイナミック農法。ルドルフ・シュタイナーが提唱した技法だろ？　ドイツに行ったのはそれを見る為だよ。本

当は企業秘密なんだけどね」

誠士は口端をあげてニヤリと笑った。

「マジかよ！じゃ、ヘーエンベルクとかドッテンフェルダーとか見てきたのか？」

「ああ」

裕太は興奮していた。

「いいなー さすが高倉商事さままだ！あー俺も行ってみてー」

まぶたに手を当てて裕太は首を振った。

酔ったせいかわ少し顔が赤い。

「裕太はなんでダイナミック農法してるんだ」

「会社の先輩で農家出身の人がいてな、その人がシュタイナー理論をやってたんだよ。本格的に共同体も作るようになって、今はその準備をしてるんだ。よかったら誠士も会員になってくれよ」

「本当か」

実際にドイツでみた共同体を日本でも作るうとしているなんて

誠士の予測では、もっと後にならないと、あのような実験的な理想郷は日本に発生しないと考えていたのだ。

「それすげーよ！」

「だろ？今度うちの事務局に来るか？先輩に話しつけといたる」

「是非頼むよ！…で、いつにする？」

「ははは、さすが営業あがりだな。さっそく日時を決めようとする
トコは」

裕太は大声で笑った。

「代わりにドイツの話、もっと聞かせてくれよ」

なにかが動き出した。

それは、大きな事業が動くときの感じと同じ。

懸命にビック・プロジェクトに携わっていると、波に乗るように関
連した出来事がやってくることがあるのだ。

今回の再会も、それと似ていた。

しかし、それ以上のものが動くことを誠士はその時、予測出来な
かった。

始動

「よし。じゃあ、室生さんの意見を基本にやってみよう」

誠士の言葉に新規事業部のメンバーはうなずいた。プロジェクトとして少しずつ形になってきた。

農業を活性化したい、という希望は持っていても、実際に利益を出していく、となると、なかなか大変だ。

色々な意見が出されて事業の可能性を高めていく。

今回はユリが出した意見。

農家とサラリーマンのコラボレーション保険、という企画が通った。

「専業農家は農業という1本の収入源のみ、またサラリーマンやOLも会社という収入源だけです。

これは、どちらも不安なんです。農家は収入が一定化しないし、サラリーマンはいつ首になってもおかしくない、という不安があります」

小さな会議室でユリは新規事業部の皆の顔を見ながら話した。

「この両者がひとつの共同体としてお互いを保障しあえば、という保険的なファイナンスを思いつきました。ヒントは途上国の個人に出資している人々のインターネットサイトです」

「ああ、知ってる。ゲーム感覚でやれる小口融資でしょ？」
滝田薫が目を輝かせて答えた。

「発展途上国とかで、例えば、屋台を出したい人にお金を貸してあげたとしたら、相手は日記や写真をアップして自分の事業の報告をしたり、少しずつ返還したり、って具合で楽しく交流できる」

「はい。それを日本でも当てはめられると思ったんです。一件の農家に対して、数人のサラリーマンがその農家に資金提供する、反対にサラリーマンに「食」の保障をする、という顔の見える融資にするんです。

出資金が余った場合はきちんと償還する、安全な農作物を融資者に送る、など細かくメリットも決めていく必要がありますが、基本の形は相互扶助です。

お互いを知るために山村交流も実施し、家族ぐるみでお付き合いもできる、というメリットも打ち出したら、農村の活性化にもつながります」

「ここにはこの保険の窓口をJAにする、と書いてあるけど…どういうこと」

西村雄介がユリの配った資料をみながら首をひねった。

「はい。日本の農村はJAという大きな農業協同組合が市場をほぼ占拠しています。農家の信用も絶大です。そんな世界に我々アウトサイダーが入り込むのは至難の業です。

ならばJAを利用するべきです。この保険の窓口はJAを使うことでお金を借りたい農家を開拓し、高倉商事は融資したい人を募るプ

ロモーションを行うことにすればいいのです。

もちろんJ Aにはコミュニケーションを払いますが、あくまで企画は高倉商事です」

「ごめん、基本的なことなんだけどさ」

八坂融が口を挟んだ。

「はい」

「サラリーマンにとって食の保障っていうのは、大きな問題なのかな？」

「そうですね。本当は大きな問題のほうですが、その事に気づいてるサラリーマンは少ないかもしれませんね」

ユリは笑った。

「食べることが出来れば、多少の我慢は人間出来るものなんです。出資者は別にサラリーマンでなくても興味のある人なら誰でもいいのです。」

プロモーションではそこをしっかりとアピールする必要があるでしょう。失業しても食べるのには困りませんかか。

…山村体験などでしたっかりと交流していれば、出資先は第二の実家になるくらいの保障があるんです。このメリットは後になって気づくと思います。…あと、反対に不安材料として日本はこれから食糧難になりますよ、と脅すというか」

「食糧難？」

八坂融は不思議そうな顔をした。

「はい。お手元の資料を見てもらうと分かると思いますが、これから日本は自由貿易協定が進むかどうか微妙なところです。

これが進めば外国の作物が関税もかからずにどんどん入ってきます。政府は食料自給率をあげる、とか口先で言ってますが、どこまで本当か」

ユリは鼻で笑った。

「自由化が進むと、日本の農業はやっていけません。農家がつぶれる、食料自給率が下がる、それは自国の危機です。いつ食べ物が入らなくなるか分からない、という不安が国民に増えるんです」

八坂融は青い顔をした。

「それを逆手にとる、って言うんだろ？」

誠士は笑っていた。

「はい。政府はそんな事をしようとしていきますので、皆さんの力で農家を守りましょう。出資してくれた人は優先的に食料の保証もありますよ、と」

「はは、室生さんってキツイですねえ」

八坂融は茶化したのが、目が笑っていなかった。

咲田麗華は黙ったままだ。

「うーん。なるほど…でも、これが成功すれば、もっと事業は広がりそうだな」

誠士はペンで唇を軽く叩きながらつぶやいた。

「そうなんです。先ほど言いました山村交流が活発化すれば、農村にまたお金が落ちます。農作業体験や食事場所などのプロデュースが上手く出来れば、都会の人はやってくるでしょう。」

高倉社員はこのプロデュースをするか、出来る人を用意すればいいのです。村おこしを成功させた方のリストを作成しました。その方たちに協力してもらおうのも手です」

「 そうだな うん、この感じじゃ、もっと色々アイデアが出てきそうだな。滝田さん、と咲田さん、一応、今の室生さんの企画での予算を算出してくれないか？大体でいい」

「分かりました。モデルケースでいくつか立ててみます。村おこし成功者のリストから協力してくれそうな団体をピックアップしてみます」

滝田薫が答える。

「たのむ。僕らはそれらの資料を検討してから、営業をかけてみる」

「えーと、僕は金融部門の友達にファイナンスの相談をしてみます。それと宣伝費やデザインなんかも」

と、西村雄介。

「私も宣伝のこと、広報部に聞いておきます」
滝田薫。

「八坂くんは、政府の方針や各国の状況を調べておいてくれ」

「はい」

「室生さん、ヒントにしたネットファイナンスの資料をもう少しそ

ろえてください」

「はい」

「じゃあ、室生さんの意見を基本にやっつけていこう。また、アイデアや質問がわいてきたら、皆、出してくれ」

「分かりました」

皆は立ち上がって会議室を後にした。

恋の予感

「よかったですよ。今日の企画」

ワイングラスをあげて西村雄介は乾杯を促した。

「どうもありがとう」

ユリもグラスを手にとって、雄介のグラスと合わせた。

今話題の高級レストレンはなかなか予約が取れないというのに、雄介は慣れた様子でウェイターに注文をした。

「相互扶助って考えが根底にあるのが僕にはよく分かりましたよ。

ドイツの出張がちゃんと生かされてビックリしました」

「採算が取ればいいのですが」

ユリは照れくさかった。今までこんなに認めてもらったことなどなかったからだ。

会議の後、西村雄介はユリに晩御飯を付き合ってもらえないかと声をかけてきた。

27歳になる雄介は、世界を股にかける商社マンとして陽の当たる場所を歩いてきた。若い分だけまっすぐなところがありエナジーに満ちていた。

ユリにはその自信がいつも眩しかった。

「あの、親父に花ありがとうございました」
唐突に雄介は頭を下げた。

「あ、ああ、いえ、そんな…お父さまのこと、ちょっと部長からお聞きしたものですから…」ご迷惑じゃなかったですか」

「いいえ、とんでもない。すごい、嬉しかったです。どうもありがとうございます」

ユリはゆっくりと微笑んだ。

病人の話を聞くと、何かせずにいられない性分が出てしまう。

桃子が病弱なこともあり病人にはことさら気を使ってしまふのだ。

「お父さまのお加減どうですか」

「ああ。あまり変わりません。一時、危篤になったりしていましたが、今は小康状態を取り戻しています」

「そうですか」

その夜は、雄介の海外での仕事の話や冒険談を聞きながら食事はすすんだ。

ユリはなるべく自分の話をしないように聞く体勢をとっていた。しかし、付き合っている人がいるかどうかという質問を何度もされてそれは答えざるを得なかった。

「あの」

帰りのタクシーを探しているとき、雄介は思い余った顔でユリを振り返った。

「はい？」

「あの…よろしければ僕と付き合ってくださいませんか」

ユリは驚いた。赤い顔でじっと見つめる雄介。

「返事はすぐじゃなくっていいんです。…仕事のこともありますし、あの、同じ部署だと何かと色々あるし、えっと…もちろんいい加減な気持ちじゃないです!!! 結婚できたらいいな、とか思うし、えっと…」

じたばたしている雄介を見て、ユリはおかしかった。

『いつもはあんなに自信満々に仕事をしているクセに』

「ふふっ」

「ああ、すみません!!!」

「私」

「西村さんのことは好きです。でも、恋愛感情かっていわれると、それは違う」

「」

「私、今の段階では誰かと付き合つとかどうとか、そんな気持ちにはなれないんです。今は仕事を覚えるので精一杯です。いつか西村さんのように仕事に自信が持てたら、考えられるのかもしれないけど、今は結婚なんて考える余裕はありません」

「今は」と、いうことは、これからは分からないですよね
「やんちゃ坊主のような顔をして雄介はユリを見た。」

「？」

「それに僕のこと、ユリさんは好きだって言ってくれました。僕のこと嫌いじゃないなら希望はありますよね」
「いつの間にか、雄介はユリさんと呼んでいた。」

「よしっ」

雄介はガッツポーズを取ると

「がんばりますっ!」

いきなり道路に出ていくと、車の前に立ちはだかった。

「ええ?!」

『轢かれちゃっつ!?!』

その瞬間、車は雄介のぎりぎり前で止まった。

「あぶないじゃないかつ!」
運転手が怒鳴っている。

「ごめんなさい、ごめんなさい。どーしてもあなたの車に乗りたかったものですから」

頭に手をあてて雄介はへらへらと笑っている。

「ユリさん、ほらっ、どうぞ。乗ってください」

そう言っつて、その車のドアを開けた。

タクシーだった。

雄介は驚いているユリをタクシーに導いた。

タクシーの戸口に手をかけたまま、のぞきこむような体勢で話した。
「僕は死にましえーん”はちょっと古かったですかね。じゃ、お休みなさい。また明日」

そのまま扉を閉めた。

車が走り出す。

ユリが振り返ると、雄介は大きく手をあげ振っていた。

無邪気に笑うその顔に、ユリは自然に顔がほころぶのを感じた。

「って、そんなの計算してるに決まってるじゃないですか!？」

桃子があきれながら口をとがらせた。

「そおかなー?私、あそこまでやれる男って初めてみたけど」

ユリは気まずいのを誤魔化すため、ストローでスムージーを吸いこんでみたがズスコと最後の空気と混じった音しかしない。

桃子の家の近くの、ファーストフード店。

「だから先生はウブ子さんなんです」

「そこまで言う」

「大体先生は…ジュディさんとは、せんど淫らなことしているクセに…男にはころつとダメされて…メチャクチャもいいところです」

「なんで知ってるの!」

「なんで知らないと思うんですか?」

「うー」

ストローを吸うしかないユリだった。ますます濁音が響く。

結婚を申し込んだ男の不誠実な中身を感じ取り、思いを断ち切った

桃子は一段とパワーアップしたようだった。

「もうちょっと時間をかけてみてはどうですか？その西村って人のこと」

「もちろんだよ。だって私は本当は断ったんだから」

「でもちょっと見てみたいです。その西村って人。先生を正面からくどくなんてなかなかです」

少し満足気に笑った桃子を見て、ユリはホっとした。

ユリが高倉家に入って、そろそろ1年がたとうとしていた。

糖蜜の捕縛

ユリの発案した企画が少しずつつきだした。

なかでも西村雄介の人脈の大きさは頼もしい限りで、アイデアが出るたびに関連ある知り合いがいるほどだった。

ユリははじめて仕事で手ごたえを感じ始めていた。

もちろん、失敗や思わぬ事態もあったが今までのような空虚感を感じることは全くなかった。

「ユリ、起きて」

遠くでジュディの声が聞こえた。

「ユリ……」

うつすらと目をあけると、素顔のジュディがベットに座って自分を見下ろしていた。

「まだ、眠い」

そう言っただけでジュディの腕をひっぱるとベットに引き込んだ。

「きやつ」

そのままジュディのガウンを脱がすと、キャミソールのひもをずらす。

「なにするのよ」

「まだ起きないの」

白い素肌に色素の薄い桃色の乳首。

ジュディの乳房はまるやかで、ふわふわとした洋菓子のような形状だった。

東洋人にはないその甘い乳房に触れていると、ユリは童話の世界に入るような錯覚を覚えることがあった。

実際に口に含んでみると、なつかしい味がした。

「あ
」

ジュディは出産してから一年半くらいだったが、まだ母乳が出る。ユリが吸い上げるたびに、にじむようにその母乳は沸いてきた。

「どんどん出てくる」

「止まりかけてたのに… ユリのせいよ」

乳首の周りを舌で丸くなぞってから口を離した。

「私に何か言うことあった？」

「もつ… こんなところで」

中断されたジュディは怒って首を振った。

「ごめん、ごめん」

そのまま手をすべらせてジュディの下半身に指を沈める。

「ああん」

いつも人形のようなジュディが、この時だけは人間の女になったようにユリはぞくぞくする。眉間にしわを寄せるジュディの崩れた表情を見るだけでユリは満足していた。

「ほんと舌でしてあげたいけど、それじゃジユディの顔が見にく
いから」

「私の顔？」

「うん。セックスしてるときのジユディの顔が好き」

「私もユリの顔好きよ」

「ほんと？どんなトコが？」

「全体的に色っぽいトコ。冷たそうでいて 情熱を秘めているその
眼があやしくていい感じ。見つめられると濡れちゃう」

「お人形のようなジユディさんでも濡れるのね」

「私だけじゃないわ。麻耶子もサリーもアジユンも ユリにお熱だ
つたのに。ユリってば自分のことほんと分かってない」

一旦言葉を切ってから、ジユディは口を開いた。

「桃子のこともね」

ユリは何のことか分からなかった。

「桃子？」

顔をあげてジユディを見た。

「桃子って…あの桃子？」

ジユディは笑いながらユリの頬に手をあてた。

「昨日ユリ言ってたでしょ？桃子が私とユリの関係に気づいていて
驚いたって それは、あの子がユリのことをずっと見ていたから

なのよ」

「？」

「あの子だって、この業界にいたのよ。私たちの性癖が分からないわけないわ」

ジユデイはユリにゆっくりとキスをした。

「桃子はユリを追っかけてモデルになった。それって究極の片思い行動じゃない？」

「違うわよ。あの子は姉のマネする妹みたいなものなのよ。この間まで付き合ってる男の人もちゃんとしたんだから……」

「分かってないわねえ」

そう言うとジユデイは、ユリを愛撫しながら抱きしめた。くすぐったそうにユリは笑った。

「ああ、そうだ。さっきニュースでね、ユリの会社のエライ人が捕まった、ってやってたよ。それを教えてあげようと思ったの。乾大臣へ贈賄容疑らしいよ。ユリ、知ってる人？」

「え？」

ユリの表情が変わった。

「誰?!」

「えーと、社長かなあ…高倉って名前がついてたから」

ベットからとび起きるとテレビをつけた。

どのチャンネルも、もうニュースはやっていない。

「高倉百合子って言ってた？」

「うっん。男の人だったよ」

プルルル

ユリの携帯電話が鳴った。

遙からだった。

「はい」

「ユリさん テレビみた？お父さんが…」

遙の震える声がユリに響いた。どうやら捕まったのは与一らしい。

「ユリさん お願い、助けて」

「遙さん、いまどこなの？誠士さんは？」

「誠士さんは会社です。こんな時なのに出ていきました」

「遙さんはどこにいるの？」

「家にいます。外にマスコミの人が来てます わ、私はどうすれ

ばいいの？ユリさん、お願い…うちに来て」

「遙さん、落ち着いて」

「」

「いい？落ち着いて 私は今からそっちに行きますから。詳しいことは私も分からないんです。取りあえず、今からそちらに行きます」

「…はい」

電話を切り上げるとユリは、着替え始めた。

「ごめんジュディ！」

「相変わらず女難だわねえ…」

「違うよ、捕まったのは伯父さんだよ」

「だって電話をしてきたのは、女でしょ？」

ジユデイは笑いながらユリの着替えを手伝う。

「まあ、いいわ。この埋め合わせは、またしてね」

ジユデイは少し残念そうにユリを見送った。

女難

「ああ、ユリさん」

遙はユリを見ると泣き出した。

遙の肩を抱いてやりながら慰めている状態に『やっぱり女難かな』とユリは一瞬考えた。

色々な情報を集めると、与一は自動車関連の輸出について、乾外務大臣に何がしかのワイロを送って便宜をはかってもらおうとしていた、というのだ。

確かに高倉商事の自動車部門は、売り上げが伸びずに苦戦していた。しかし、総取締役の与一が一部門の為にそこまでするかは疑問だった。

お昼のニュースやインターネットで情報を調べてみても、詳しい内容は知る事はできなかった。

「父がまっとうに生きている、とは思わないけど、この話はなんか変よ」

「変？」

インスタントのピザをレンジで温めただけの昼食後に遙は口を開いた。

遙と誠士が住む高級マンション。

ところどころ少女趣味な家具や飾りつけがあり、遙らしい雰囲気があふれていた。

ジユディヤユリの部屋とは全く違った趣きがユリには珍しかった。

「父ひとりの判断かしら？　だって組織ぐるみじゃないと贈賄は成立しないわ」

「そりゃ、そうだけど…組織の代表として伯父さまが捕まったってことなんじゃないの？」

「うーん。ちょっと違う気がする」

「じゃあ、何？」

「ハメられたって気がするの」

「ハメられた？」

「滅多なことは言つな、遙」

その時、誠士が帰ってきた。

音もなく鍵をあけたのだろうか？

あまりにも突然に現れたので、ユリも遙もものすごく驚いてしまった。

「きゃあ」

「あ、びっくりした」

「あ、ごめん」

誠士は気まずくなり、持っていた風呂敷包みを二人に差し出した。

「たぶん、食事してないんじゃないかと思って、貴船屋のお弁当買ってきた」

「わあ、ありがとう」

遙は嬉しそうに包みを受け取った。

「なんだか拍子抜けだな　もっと遙は落ち込んでるのかと思った」
「落ち込んでいても仕方ないでしょ？実はピザも食べたの。ね、ユリさん」

ユリはふふつと笑った。

「この件があったからと言っちゃあ何だけど、新規事業部を独立企業化しようって話が出るんだ」

誠士はコーヒーを飲みながらユリに話した。

「企業化ですか」

「この事件のせいで、今後”高倉”ブランドでは仕事がやりづらくなる。新規参入の部門にとっては致命的だ。だから、新しい会社を設立して名前も新しい会社を作るんだ」

「他の社員たちは納得するでしょうか」

「業務命令とあっちゃ聞かしくないさ。っていうより、あの連中はそんな事、気にすると思う？」

ユリは笑いながら首を振った。

「ばりばり型の人間ばかり。」

「企業化くらいでひるむタイプはいない。」

「心配なのはお義父さんの今後だな」

誠士の言葉に遙は目を潤ませた。

「そうなの。もう会社にはいられないでしょう？今後どうするつも

りかしら?」

「それはゆつくりと考えればいいさ。会社も…お義父さんひとり悪者にして済めばいいけど…」

「それって、逮捕者がもつと出る可能性があるってこと?」

ユリが尋ねようとしたその時、誠士の携帯電話が鳴った。

「遙、大変だ。お義父さんが倒れた」

そして、高倉与一は入院した。

元々、心臓の調子が良くなかったが、今回の件で軽い心筋梗塞のよ
うな症状が出たのだった。

病院には路子夫人が付き添った。

警察の事情聴取は、商事で働いている親族、役員たちに及んだ。
与一の関連部署は、捜査当局が入った。

高倉商事は、動乱に巻き込まれていた。

数日後。

ユリは百合子の部屋に呼び出された。

「ユリ、あなたに言っておきたいことがあります」
百合子はユリに椅子に座るように促した。

「与一があんな風になって、これから高倉商事は大きく変わらなくてはならなくなりました」
その言葉にユリはうなずく。

「これから私は”攻め”に出ます。ユリも覚悟してちょうだい」

「あの 私は何をすれば…」

「筆頭株主です」

「へ？」

「暁生」

百合子の言葉の後に、暁生がドアから書類ケースを持って現れた。

「あなたは、高倉商事の筆頭株主として、これから高倉商事を動かす人間になるのです」

暁生が差し出した書類は、ユリの名前の入った株式証書だった。

そこには見たこともない数字が並んでいた。

「こ、これ?!」

「ユリが高倉商事の筆頭株主である、という証書です。私と暁生はあなたの名義で株式の買い付けを行いました。これはあなたの名前だから出来るのです。」

私や美雪は高倉の人間です。だから株式を買っても自己株とみなされ、そうすると株主総会で意見をする権利はありません。」

だから、あなた室生ユリにお願いしたいのです。この微妙な立場が生かせる唯一の人間なのです」

ユリは百合子が何を言っているのか、さっぱり分からなかった。

「私　何かするんですか？」

「そう。あなたはこれから筆頭株主として、高倉商事に対して意見をするので。その権利は絶大です。役員を選任さえ可能なのです」

ユリは空いた口が閉まらなかった。

百合子は何を言っているのだろうか？

「今の会社は社長のものでも社員のものでもないのです。株主が多くの権利を持っているのです。」

社長がこうしたい、という崇高な意見を持っていても、株主に反対されたらその政策を実行するのは不可能なのです。

そうして、株主という利益だけを追求したモンスターに身動き取れなくされてしまっているのです。

これではいけない。会社側と株主側で思想を一致させ、少しでも前に進めるようにビジョンを持たねばならないのです」

ユリはやっと分かった。

もの言う株主というウルサイ存在は、会社を自分の思うように動かしたい社長には悩みの種なのだ。

「あなたには経営の勉強をしてもらわないといけません。今後、高倉商事をどうひっぱっていくかのビジョンを見つけてもらわないといけませんからです」

「私が？」

「本当は新規事業が軌道にのってからと考えていたのですが…与一の事件で計算どおりにはいなくなってしまうました」

百合子が何を言うのか、ユリは恐ろしかった。

しかし躊躇なく百合子は言い放った。

「ユリ、明日からあなたは系列の経営コンサルタント会社に行ってもらいます」

ユリと誠士

「らからあ、私なんてどーでもいいのよお。おばあさまにとってはあ駒みたいなもの」

ユリは小さな居酒屋で酔っ払っていた。
そうするしかなかった。

「ユリさま、もうそろそろそのくらいにしましょう」
咲田麗華は小さくささやいた。

「せっかく、せっかく、頑張ってきたのに…… やっと、あたしの仕事が見つかったと思ったのに」

「私だってユリさまがいなくなってしまうなんて、とても悲しいです。今度の企画はユリさまが立てられたものですもの」

「ひどい ひどすぎる」

そう語散るとユリはテーブルにうつぶして眠ってしまった。

ユリはふと目を覚ました。

大きな傘の間接照明が、部屋をほのかに照らしていた。
整然としたホテルの一室のようだ。

むかいのベッドを見てぎょっとした。

誠士がいたからだ。

毛布も着ずに服を着たままで、横になって眠っていた。

咲田麗華と飲んでいたところまでしか覚えていない。
まるつきり記憶がなかった。

喉の渴きを感じたので、洗面所にむかい水を飲んだ。

「大丈夫？」

部屋から誠士の声がした。

「あ！」

急いで部屋へ駆け込む。

「あ、あの、私、何か部長に迷惑かけて…」
胸元をぎゅっとなつかんだままユリは誠士に叫んだ。

「ユリさんはすごかったよ」

寝転んだまま誠士は笑って返事をした。

「あんな家に帰るのは嫌だーって」

「」

「もう駒は嫌だ、って。だから僕がここに連れてきた。咲田くんが
一人で困ってたからね」

確かに麗華ひとりでユリを運ぶのは無理だ。

「咲田さんは？」

「僕が帰したよ。…僕にユリさんを預けること、ちょっと心配そう

にしてたけど。親戚だって知ってるから一応は納得したみたい。ま、ホテルに行くとは思っていなかっただろうけど」

麗華にしたら家に送ってもらうつもりだったのだろう。

「どこどこですか？」

「品川」

部屋をぐるっと見渡して納得すると、ユリは黙り込んだ。

「僕は帰ります。ユリさんはゆっくりしてって」

誠士は起き上がると上着をつかんだ。

「もう？」

どう言っでよいか分からずユリはあわてた。

「もう？もう2時だよ」

誠士は笑った。

「だ、だって」

「ユリさん」

誠士は顔を手で被いながら笑った。

「こんな状況で…僕は自信がないよ」

「」

「僕がおかしな気分になる前に追いつくのが正解だよ」

「じゃ、どうして今までそばにいてくれたんですか？」

「そりゃ」

誠士はつばを飲み込んだ。

「知らないホテルに置きっぱなし、てのはあんまりだからさ」

「部長の言うことは矛盾してます」

誠士は少しけだるそうに笑った。

「こんな場面で議論するつもりはないよ、ユリさん」

誠士はユリをかき抱くように右手で引き寄せると唇を重ねた。

驚くユリに、味わうように唇を吸い続ける誠士だった。

誠士の唾液は、甘いような懐かしいような味がした。

ユリは言い知れぬ幸福感で意識が朦朧とした。

「だから言ったのに」

誠士はユリの目のあやしい輝きをみつめながらささやいた。

「もういい？これであぶない事分かったでしょ」

「うそばっか」

今度はユリから誠士にキスをした。

「部長のほづがあぶないのよ」

「ユリ……」

激しいキスに誠士の理性は切れた。

そのままユリのカットソーを下から上へ引き上げた。

手に少しあまる大きさのある胸に誠士は頬を寄せながら、ユリに溺

れていく。

「あ」

「ユリが好きだ　ずっと好きだった」

「本当？」

「初めて会ったときから　地下鉄で見たときから」

「もっと前よ」

その言葉に誠士はどこか痛みを感じた。

「そうだ」

動きの止まった誠士を反転させ、ユリは誠士に迫った。

「あたしたちもっと前に会ってるのよ」

誠士のペニスを掴んだユリはゆっくりと愛撫しだした。
全身をユリの口で溶かされる。

「どこで？」

誠士の吐息は少し乱れていた。

「…さあ」

そのままユリは誠士の上にかがんだ。

「いい？」

「うん…」

誠士は幼い子のようにうなずいた。

誠士を深く沈めながらユリは、今見た顔を知っていると思った。
快感に泣きそうになっている誠士。

『泣かないの！おとこのこでしょ？』

ちがう　泣いてるんじゃない

『大丈夫、あたしがついてるからね』

あたし？

あたし？

あの子は女？

ユリ？！

誠士は絶頂とともに、ユリの別の顔を思い出した。

後朝（きぬぎぬ）

経営コンサルタント会社に出勤することは、今のユリにはホッとすることだった。

誠士と顔を合わせることがないからだ。

朝、眠っている誠士より先にホテルを出た。

どうしてよいか分からなかった。朝になって誠士と話をするのがどうしようもなく怖かった。

べつにセックスしたからってどうこういうこともない。

恐ろしいのは誠士が自分の根底を揺るがすような存在になりそうなことだった。

だって

彼に抱かれていると自分がなくなってしまいそんな満足感に満たされる

そんな恐ろしいこと…

「そういう観点で見れば、東京電気は海外のシェアで遅れを取っていることは明らか。こういうのは海外の経営者をあてがうのがいい」

松永謙二は有名な経済アナリストでもあり、会社も設立している。

業績データや株式データを見ながら、弱点を見つけていく。

その上でさらに経営をどうすればいいか、という検討を次々で行っていった。

筆頭株主として経営の勉強をするように言われているユリにとっては、為になる話ばかりだった。

「日産のカルロス・ゴーンのような感じですか？」
暁生が明るい声で松永の言葉に反応した。

「ああ、そうだ。日本企業的な観念のない、しがらみのない人がいい」

「東京電気なら、どういった人が適任だと思いますか」

ユリはこんな屈託のない暁生を見るのは、高校生の時以来だった。少し前にこの会社に入りこんでいた暁生は、すっかり松永たちになじんでいた。

昼休みになってユリは、昼食を買いに外に出た。

松永の会社は有楽町にあり、少し奥まった筋にあった。

駅前までいくかな

そう思った時、隣に来た車の窓がいきなり開いた。

「ユリさん?!」

西村雄介だった。

「お昼、いっしょに行きませんか？」

「西村さん?どうしたんですか？」

「ちょっと寄ってみたんです」

ユリは駅前の和風居酒屋で西村とランチをすることにした。

今朝、ユリの転属が発表され新規事業部は騒然となった、と雄介は言った。

発案者であるユリがいなくなるなんて誰も思ってもみなかったからだ。

「部長に喰ってかかったんですけど、”業務命令だから仕方ないだろう”て。嫌に落ち着いてるんですよね」

誠土の名前が出てきてユリはどきっとした。

「冷たいですよ　そんな業務命令だからって、黙って聞くかなあ。今回はおれ、部長を見損ないました」

口をとがらせて雄介はしゃべっている。

「ね、ユリさんって何者ですか？」

不意に雄介はくりくりとした目でユリを射た。

「え？」

「だって普通じゃないですよ。秘書課の人に聞いたら、ユリさん秘書課も短期間で転属になったって？」

雄介の情報力にユリは一瞬たじろいだ。

「いく先々で、問題を起こして転属になるんです」

「うわあ、シヨムニの魔性の女みたいですねえ」

上手く誤魔化せたようだ。

「今回は部長とですか？」

「ぶっ」

あまりにも驚いてユリは、吹いてしまった。

「ははは」

吹いたのがおかしかったのか、雄介にはすごくウケた。真意を見抜いたのかどうかも分からなかった。

「でもこれで僕とユリさんは気兼ねなく交際できますよ。違う部署なら仕事に影響しにくいでしょ？」

「いたずらっぽく雄介は笑いかけた。」

「私は…あれがどうなるか心配です」

自分の企画した仕事を思い出して一瞬悲しくなった。

「大丈夫。絶対に僕が軌道にのせますよ。ユリさんには詳しく報告しますから、また会ってくださいね」

そういつて誘われると断れなくなってしまふユリだった。

雄介は上手に断れないようにもっていく。

それは一流の営業マンである能力のひとつだったのかもしれない。雄介にその自覚があるのかないのかはユリには分からなかった。

「彼は上手につかった方がいい」

会社に帰ると、すれ違いざまに暁生が言い放った。

「見てたの？」

「あいつは優秀だ。今後役に立つ」

「止めてよそんな言いかた?! あんたやお婆さまのように私は計算して人と付き合っている訳じゃないわ」

「計算じゃない。上に立つものは人材を冷静にみる必要がある、て言ってるんだ」

「一緒じゃないの」

「室生くん」

マネージャーがユリを呼んだので、暁生との会話はそこで終わった。

確かに、西村雄介を反故にするにはもつたいない。それは確実だ。

しかし、どうやって彼とつきあえばいいのか？
ユリにはそれが分からなかった。

復讐の誠士

街はもうクリスマスの装いだっただ。

去年は桃子を誘ってジユデイのパーティに行ったことをユリは思い出していた。

そんな華やかな都会を抜けて暁生の運転する車は、ユリを乗せ静かに高速走っていた。

遙に指定された場所は長野県にあった。

そこで与一は療養をしている、とのことだ。

与一はユリに話があるとのことだった。

住所をナビゲーションに入れているものの、暁生は少し迷ったようだ。うっそうとした木ばかりが茂る山道に首をひねっている。

「あ、あれかな」

少し先に、切り開かれた工事現場の後のような丘陵が見えた。

区画があるところといい、小さな民家が数件建っているところといい、遙の言っていたシユタイナー・ランドの建設地みたいだ。

「きつとそうよ。行ってみて」

ドットンフェルダーとのイメージのギャップに驚きつつも、事務所らしいプレハブの前に車を停めた。ユリはカラカラと引き戸を開けた。

「すみせん」

「はい？ああ、もしかして高倉さんとこのお知り合い？」

大柄の男が陽気に返事をした。

事務机を数個置いただけの事務所は、まだまだ完成途中という感じだ。

「…はい」

「聞いている、聞いている。えっとね、高倉さんは右の青い屋根の民家だよ」

男は外に出ると、建っている家を指さして教えてくれた。

お礼を言っつてユリは、その民家に向かった。

古民家だった家をきれいに改装したようだ。

木の柵で簡単に仕切られた玄関先には、芝生でないみどりの庭が小さく広がっていた。

どう見ても、昭和30年代の田舎の縁側だ。

こんなところに与一が？

ユリは腑に落ちない気持ちで、民家のガラス戸を叩いた。
ブザーらしきものがないから仕方ない。

「ああ、ユリさん！」

遙が出てきた。

何かすがるような感じがする。

「ここには、いま遙さんと伯父さまたちだけ？」

誠士の不在を確認するためユリは質問した。

「ええ」

少し思いつめたように遙は返事をした。

そんな様子に気づかずユリは、安堵のため息を小さくついた。

暁生とともに家に入る。

ユリは遙に特注品の和菓子を差し出した。

与一の好物と聞いてきたのだ。

「ありがとうユリさん。こんなトコまでよく来てくれたね」
掘りごたつに足を入れて新聞を読んでいる与一は違った人のようだった。

路子夫人がお茶を運んでくる。

食事会でみた時とは別人のような二人だった。

今はどこかの田舎の夫婦みたいだ。

「仕事はどうかね。忙しいかい」

「はい」

商事を追われた与一にどこまで話しているのかユリは分からなかった。

「ここはいいよ。やることは色々あるけど、ゆったりしている。この間は、肥料を作るっていうんで手伝っただけ……面白かったあ」

ニコニコと話している与一は本当に楽しそうだった。

顔色も以前に比べてよくなっているようだ。

「ここを紹介してくれた誠士くんには本当に感謝だな」
「誠士さんが？」

「ああ。ここの運営委員の春日さんと知り合いだったみたいで春日さんは本当にいい人だよ」

「あの大柄の？」

「そうそう。いい男だろ？ ユリさんにお勧めだよ」
嬉しそうに与一は羊羹を口に放りこんだ。

「うん。やっぱり羊羹は松涛だよ」

「あの 伯父さま 今日」

「ああ、そうだった。ごめん、ごめん」
お茶を飲んで与一はユリ以外の人間を遠ざけた。

「ユリさん、お袋は何を企んでる？」
「え？」

「今回の後ガラッと人事が変わったのは知っている。役員も大幅に入れ替えた。…まあ、私に関連の深い者がクビになるのは仕方ないことだ」

「が、あまりにも事が早すぎる。聞けばユリさんは、今、経営コンサルなんかにいるそうだが… それも母の命令なのか」

返事ができずにユリは黙り込んだ。

「以前から私と母は経営方針で揉めていた。彼女が何を考えているのかさっぱり分からない。経営に倫理を持ち込んだりして役員のみんしゅくを買っていたんだ。その役員たちが今回、軒並み用無しにされた、としたら母が疑われても仕方あるまい」

「お婆さまは儲ければ何をどうしてもいい、という経営がお嫌いなんです」

「やっぱりユリさんは何か知っている」

ここからは腹の探り合いになるような気がした。

「私は今回母にハメられたかもしれない、と思っている」

「まさか」

「ふふ…あの人ならしかねない」

自嘲気味に与一は笑った。

「父の影ですべての可能性を否定されてきた人だ。その抑圧が噴出してもおかしくない。…息子の私だとして父の人形だと思えば憎いだろう」

与一はため息をついた。

「だから姉さんとユリさんと呼んだんじゃないかな。…すまないね、こんな事を言うのは嫌なんだが…」

百合子への不信感の植え付けが目的なのか。

「もしお婆さまが犯人なら伯父さまは、どうされるつもりですか？」

「別にどうもしないよ」

与一はお茶を啜った。

「私はある意味感謝している。この状況にね。経営、計画、利潤果てしない戦に煩わされずにすむからね。ユリさんには、ただ気をつける、と言いたいだけだ。母の人形になってしまわないように」

「ご忠告ありがとうございます」

「はは、ユリさんは頑なだねえ」

隠居したとしか思えない与一の言葉は、今のユリには届かなかった。

「気になることがもうひとつあるんだ」

「？」

「誠士と遙がうまくいってないらしい」

「え？」

ユリは湯のみを倒しかけた。

「証拠に遙はここにいて自宅に帰らんし、誠士も私の様子を見るが、遙とはろくに話しもせずに帰ってしまう」

「何かあったんでしょうか」

「さあ…ただ、誠士には離婚してもらっては困るんだ」

「なぜですか？」

「それは誠士が私たちに復讐し終わってないからだ」

「え?!」

ユリは与一の言葉の意味が理解できなかった。

「復讐？」

与一は深くうなずいた。

「これは遙には内緒にして欲しい」

ユリは与一の目をじっと見た。

「誠士の親は昔、長谷川工務店という高倉金属の下請けをしておつてな。小さいながらもいい技術を持っていた。その技術に目をつけた高倉の社員は少しの金を握らせると、そっくりとその技術を盗むように高倉金属のものにしてしまったんだよ」

遠い目をして与一は話しを続けた。

「その技術を使った製品は海外でもたくさん売れた。特許まで高倉の名前で申請しておつたから長谷川工務店にはちつとも利潤が入つてこなかった」

「ひどい」

「そう。ひどい話だ。だが、そんな事例はあの頃山のようにあったんだ。だからといって許される話ではない。長谷川工務店は倒産した。技術の権利をめぐって高倉と争つたため、それまでの仕事を回してもらえなくなつたんだ」

ユリは悲しい気持ちで誠士のことを思った。

「一家は離散した。父親は蒸発し、母は病気になる死んでしまった。後に残つたのは子どもだった誠士と生まれたばかりの妹だけ。親戚に預けられたか施設に引き取られたか」

ある日、遙が結婚したい、と喜んで連れてきたのが誠士だった。結婚するのに身元を調べないなんて思っていないだろうに。誠士はそ

ここで私に勝負をしてきたんだよ」

「勝負？」

「ああ。身元が分かり私たちが安易に結婚に反対したなら、遙と駆け落ちするつもりだったんだろう。それが叶わなければ遙の性格じや自殺でも図りかねん　いずれにしても誠士の作戦勝ちだった」

誠士の冷徹さにユリの顔は青くなった。

「だから私はふたりの結婚に賛成した。遙にさえ何も言わなければ、彼女は幸せになれるんだ。…誠士の復讐はとげられない、という訳さ」

「だって、それじゃ遙さんは…」

「何か問題かね？愛しい男と結婚できる遙は幸せだ。それに、うまくいけば誠士は復讐の目的を忘れてしまっただよ。

子どもが出来たらもうそんな気はおこらなくなってしまっ可能性が高いからね。でも、まだそこまではきておらん。だから、この勝負は今のところイーブンなんだ」

誠士と与一の秘密を知って、ユリは重い気分になった。急に遙が哀れにみえた。

「私、帰ります。今の話は誰にも言いません」

「頼むよ」

帰りかけて不意に気がついた。

「じゃ、今回の贈収賄事件、誠土さんが密告した可能性もあるんですよね」

唇を震わせてユリは与一を振り返った。

与一はにやにやと笑いながら、ユリの言葉にうなずいた。

スノーダイヤモンド

「つかまえたよ」

驚いて目を見張るユリの手をつかんでいる誠士の瞳は燃えていた。

「放してください」

「僕から逃げない？」

哀願するかのような少し悲しい顔をした誠士に、ユリは力を抜いた。

「分かりました」

お昼を買いに出かけたところをつかまったのだ。

異動になってからユリは誠士からの連絡には一切出なかった。

誠士は近くに停めていた車にユリを乗せた。

「どうして電話に出てくれないの？」

誠士はフロントガラスを見たまま聞いた。師走の街はのろのろとしか走れない。

「必要ないからです」

「どうして?!」

「だって私は異動になったのだし、部長とは何もお話することはありません」

頑ななユリの表情に誠士は落胆したようにため息をついた。

「僕はずっとユリさんのことを考えていたのに」
「どうして？」

「決まってるじゃないか、君が好きだからだよ！」

誠士のあまりにも真っ直ぐな視線にユリはびっくりした。

プップー

信号が変わっているのに気づかなかった為、後方車があおった。

しばらく街を走ってから誠士は口を開いた。

「用事がないっていうなら僕は用事をつくるよ。ユリさん、僕の買い物に付き合ってくれ」

「買い物？」

「妹へのクリスマスプレゼントを選んで欲しい」

妹と聞いてユリは与一から聞いた妹のことを思い出した。
両親がいなくなってしまうた誠士には、唯一の肉親だった。

「妹さんはどこにいらっしやるの？」

「ちょっと訳があって、離れて暮らしてるんだ」

誠士の妹に興味はあったが、このまま買い物に付き合つと昼休みは終わってしまう。

無理だと分かりつつもユリは誠士に伺った。

「もう昼休みが終わります。買い物には付き合いますから帰してく

ださい」

「」

「絶対に今日付き合ってくれませんか？」

ユリは小さくうなずいた。

「ありがとう」

誠士は本当に嬉しそうに笑った。

その顔を見るとユリの心はばら色に染まってしまう。
胸いっぱい甘いものが広がった。

仕事が終わると、ふらふらと引き込まれるようにユリは誠士との待ち合わせに向かった。

完全に理性が飛び去っていた。

「どんなものをプレゼントされる予定ですか？」
銀座の百貨店をうろつきながらユリはリサーチした。

「毎年しているとマンネリ化しちゃって。去年はダイヤのついたペンダントをやったんだけど…あんまり高い石だと妹は怒るんだ。」
「こんなのいららない、ムダ使いだ」って。

だから今年は貴金属じゃなくて、セーターとかがいいかな。ほらユリさんっていつもセンスいい服着てるから選んでもらうと助かる」

これはガールフレンドに選んでもらってるんだけど
とも言えず。

「じゃ、妹さんのイメージは？タレントでいうと誰に似てます？」
「うーん、そうだなあ」

誠士は困ったように腕を組んだ。

「シズカちゃんかなあ」

「シズカちゃん？」

「ドラえものの」

ぷっ、

ユリは笑いが止まらなくなった。

誠士とシズカちゃんというミスマッチが面白すぎたのだ。

「そんなにウケるとは思わなかった」

「だって」

「でも、よかった。やっと笑ってくれた」

誠士の笑顔はどこまでも優しかった。

ユリは微笑みながらゆっくりと目を伏せた。

「ちょっと電話しますね。シズカちゃんに似合うセーター、探してみます」

ジュディに電話をしてアーガイルのセーターを二着探してもらうことにした。

「着は桃子のぶんにすることにしたのだ。」

「私の妹にも同じの買うことにしました」

「ユリさんも妹いるんだ」

「はい」

「あれ？」

ユリの妹なら高倉の一族になる。

「そう。本当の妹じゃないんです。でも妹みたいなコがいるの」

「そっか」

いつの間にか、二人は銀座の街を歩いていた。

先ほどから気温がまた下がったようだったが、華やかなイルミネーションのおかげで二人は寒さを感じなかった。いや、二人でいるから寒さを感じなかったのだろう。

ミキモトのジャンボクリスマスツリーの下には天使のオブジェが幻想的に輝いていた。

誠士は少年のような顔をしてユリを次々と色んな場所にいざなう。

帝国ホテルのエントランス。

そこはラッピングのされたプレゼントのようなデコレーションだった。

落ち着いた雰囲気がいい。

そのまま日比谷公園に入る。

多くの人々にぎわっていた。

なんでもTOKYO DREAM FANTASYというイベント
があつて、日本一の巨大なツリーがあるらしい。
大噴水の周りはエコロジックにデコレートされ、次々に変わるイル
ミネーションは映像を見ているようだった。

ラジオ局がタイアップしているので、BGMが流れていた。

「ここは銀座教会の鐘が聴こえてくるのがよかつたんだけど こ
れじゃ無理だね」

人ごみから少し離れた緑の中で、誠士は残念そうに言った。

「でも ほら」

その時、美しいバイオリンの旋律がかすかに聴こえた。
オーロラに染み込むようなビブラート。

音に呼応するように、ゆっくりと白いものが降ってきた。

「雪？」

冷気で澄んだ高い空から、細かい雪が舞い降りてきた。
バイオリンの音が天から呼んだようだった。

吐息が白くかすんだ。

「スノーダイヤモンド」

ユリはくるりと舞って叫んだ。

降りかかる雪が反射して、ユリは幻想的にきらめいた。

誠士は怖くなった。

ユリをつかまえるようにして抱きしめた。

「いけないで」

「どうしたの？」

「ユリが好きだ」

誠士にはユリが消えてしまうような気がした。

スノーダイヤモンドとともに。

ドイツでもユリは月の化身のような美しさだったから。

「僕は遙と別れる」

誠士の腕のなかでユリは息をのんだ。

「仕方ないんだ」

星やバラや祈りが 思い出よりも熱く

心にあふれる時 未来が光になる

ホワイト・アンド・ブルーの歌。

幻想的な詩は、ゆっくりと二人の間に流れた。

I Love You

「どうして遙さんと別れたいの？」

それは素朴な疑問だった。

本当にユリには誠士が遙と別れる理由が分からなかった。

ベッドから見る天井には二人の影がほんのり映った。

「そんなの一言では言えないよ」

しばらく考えてから誠士は答えた。

復讐のひとつか、それとも単純に恋に溺れているだけなのか。

「結婚をしたっていうのは大きな事なのよ。そんな簡単に別れるなんて… 仕事にも影響するかもしれない、誠士さんの場合」

「分かってる けど、今のままじゃだめなんだ」

誠士はユリの頬を愛しそうになぞった。

「今の君と僕じゃ許されない関係だ」

「

「そんなの耐えられない…」

「誠士さんは許されない関係が耐えられないから遙さんと別れたいの？自分がラクになりたいから？」

「違うよ。ユリさんと一緒に笑えないのが嫌なんだよ」

「笑っ？」

「僕の愛してる人はユリさんです、って堂々としたいんだ。色んなものを一緒に見て、いっぱい笑いたいんだ」

「それなら結婚ってことになるじゃない」

憤慨したようにユリは口をとがらせた。

俗っぽい結婚というゴールかスタートだかをユリは嫌悪していた。

結婚は不幸のはじまり。

母・美雪とロクデナシの父を見ていたユリにとって結婚は恐怖の館だった。

「ちょっと違うかな　もちろん結婚できれば最高な形かもしれないけど、そんなものはどうだっていいんだ。僕はきれいな気持ちでユリといられたらそれでいいんだ」

誠士はユリに重なると強く抱きしめた。

「遙さんは？もう愛してないの？」

誠士の結婚の経緯を知っているユリは、誠士の遙への想いを聞きたかった。

「愛してない　遙には悪いけど」

「そんな」

復讐のために遙に近づき、好きな女が出来たらあっさり捨てる。

ユリには誠士がものすごく残酷に見えた。

いや、本当は誠士は高倉の女なら誰でもよくて、誘惑して傷つけることが目的なのかもしれない。

現にユリは複雑な関係に立ってしまった。
関係が公になれば遙は怒り狂うだろう。

「ユリ」
誠士は唇を寄せた。

下から見上げた誠士の表情は、半分まぶたを落とし、ものすごく色
っぽかった。

冷酷にも見えるその顔にユリはぞくぞくとした。

いけない…

頭では分かっていた。でも

誠士の舌、唾液、口腔は気持ちよくて。

後頭部がしびれ、ヴァギナからはぬるぬるとしたものが伝った。

「あ、あたしは 誠士さんのものになるつもりはない」

「こんなになっても？」

「あっ」

指でヴァギナをかき回された。

そのまま、楽しむように誠士の指は色々な動きをする。

男の指は固くて少しゴツゴツしている。その上長いので奥まで刺激
が加わった。

「や ああ」

「いいよ、その顔」

「もっと前面ん」

目を細めながらもユリはねだるように位置を伝えた。

「え？ こ こ？」

中指の角度を変える。

「うん そう」

誠士とのセックスは女性よりも繊細さに欠けるが、圧倒的なパワーがあった。

「ほんとだ。ユリさんは僕のものにはならない。だって、一度も僕を好きだと言ってない」

反応をみながらユリの一点を誠士は探し当てた。仕返しするように繊細に刺激した。

「あ あ あ」

気持ちよすぎてユリは叫んだ。

「もうだめ 早く」

「好きだって言っただけ」

指の動きを止め誠士はいじわるく質問した。

「僕を好きだって」

うつすらと目を開けて見ると、ユリの開いた両足の向こうで笑っている誠士と目が合った。

あまりの恥ずかしい光景にユリの思考は吹き飛んだ。

「好き」

「なに？」

「誠士が好き」

小さな声でつぶやいた。

「ユリ」

誠士は指を抜いた。

「本当に？」

ユリは小さくうなずいた。

本当に誠士のことは好きだった。地下鉄で会ったときから。

「ああ、ユリ」

うっとりとした顔で誠士は続けた。

「もう我慢できない」

ずっと奥まで誠士が入ってきて、やっとユリは安心した。それが本来の正しい形のような気がした。

「今日は最高の日だ ユリ」

誠士はユリとつながったままゆっくりとキスをした。

綺麗な誠士。

無邪気で陰鬱な誠士。

「私もよ。セイ」

セイ？

セイ？

セイくん？

セイくんも確かそう言った。

あの時も幸せな気持ちだった。

『サンキュ、今日は最高の日だ』

『よかったな』

セイくんの為に役にたったことが嬉しくて。

けど、私は何をしたっけ？

『キユウチヨウのおかげ』

セイくんは親指を立ててニンマリ笑った。

だけど私は少し悲しかった。もう会えないかもしれない。

「ユリ…、ユリ…、ユリ」

下腹部から脳髄に向かって突き上げるような快感にユリは考えられなくなった。

深い深い満足感だった。

「セイくん」

あえぐように小さくつぶやくとユリは気を失った。

グリーンリング

「あ、男できたでしょ？」

大きな声でジユディは叫んだ。

「うっ…」

挨拶のキス というよりちゅうした後での出来事だった。

今日はクリスマスプレゼント用のセーターを受け取りにきたのだっ
た。

「ねえ、ねえ、どんな男？いい男？いくつくらい？」

「そんなのいいからっ！それより、ね、今日はいいでしょ？」

ジユディに手を伸ばすとスツと引いた。

143

「うわっ、男の後にあたしとする？ やだー病気もってないよねー」

「…もってない…と思う」

「何よーちゃんとゴムつけた？」

「つけたよ」

「なら、まっ…第一段階OKかな」

ジユディはにっこりと笑った。

ユリはホっとした。

どんなに誠士が好きであっても、ジユディは大切にしたかった。

男と女では全く違ふときめきがあってユリにはどちらも必要だった。

「お願いだから抱かせて」
椅子に座ってジユデイの細い腰を抱いた。

センシユアルなコロンとジユデイの体臭が交じり合って甘く香った。
この香りは女性だけのもの。

ユリはうっとりとした。心が落ち着いた。
誠士との不安定な状況に比べて心が静かになる。
男はジェットコースター。女は漕ぎボートのようだった。

そんなユリの顔を挟むとジユデイは上から口づけた。

「ユリのそういうところ好きよ」
話すジユデイの衣服をユリは滑るように肩から剥がした。

「男に濡れないよう、女と寝てバランスとろうとするところ」
「私はニュートラルでいたいからね」
目をつぶってジユデイの乳房に顔をうずめた。

「私もよ」
ジユデイは小さく笑ってユリの頭を抱いた。

「…心の目を開いて人を愛したいから」
限りなくやさしい声がユリの頭に響いた。

「契約してくれそんな農家がだいたい集まったんですよ」

西村雄介はために報告をくれる。

それは出先からの電話であったり、メールであったり。一刻でも早く知らせたいというライブの気持ちも伝わってきた。

ユリにはそれが本当にありがたかった。

自分の立てた企画は子どものようなものだったからだ。

「それでね、こっちの人集めに対してCMのプレ上映をすることになったんですよ。それ、見にいきませんか」

「プレ上映？」

「はい！表参道のビッグスクリーンです」

S o t h i s i s X m a s
A n d w h a t h a v e y o u d o n e

ジョンは歌った。平和を

F o r r i c h a n d t h e p o o r o n e s
T h e w o r l d i s s o w r o n g

そう世界はまだ間違ってる

A v e r y M e r r y X m a s
A n d a h a p p y N e w Y e a r
L e t ' s h o p e i t ' s a g o o d o n e

Without any fear

あなたの安心はわたしの安心。さあ、みんなで手をつなごう
War Is Overの歌声がそのままバツクに流れている。

グリーンリング

あなたの思いが、みどりに変わります

新芽を出した土を両手でかかえた子どもが微笑んだ。

問い合わせ電話番号が出たまま Happy Xmasという最後の
歡声が聞こえてフェードアウトした。

ユリは茫然とスクリーンを見つめていた。

こんな風になるなんて
胸がいつぱいになった。

「取りあえずシーズン用なんですよ。名前の認知だけのプロモーション
ヨンなんすけどね」

「…すごい」

「これをクリスマスまで1時間ごとに流します。他にも4ヶ所。テ
レビはもう少し少ないけど…」

「テレビも？」

人ごみに流されないように立つのは結構むずかしかった。

雄介はユリの肩を持って、流れから連れ出した。

「ユリさんのイメージを出したつもりなんですけど、どうでした？
ジョン・レノンは合ってませんでしたか？」

「いいえ。とつても素敵でした。だって、War Is Over
なんて 本当に いま私が言いたい思いをジョンが表現してくれ
てて」

涙が出てきた。

そう。

みんなで手をつないで、それには助け合って、戦争は絶対に反対で…

「ユリさん…」

「ごめんなさい… すごく、よかったです 嬉しいです」

こんなにすばらしい企画に参加できなかったことを、心から残念に
思った。

「これ西村さんが作ったんですか？」

「まさか。CMプロデューサーが僕たちの希望を聞いて作ったんで
すよ」

きつと雄介がすごく頑張ってくれたんだろうと思った。

「みんなは？もう見たんですか？」

「ええ。みんなはアルタで。そこで1回目の放送を昼間見たんです
よ。僕はユリさんとデートしたかったから、3度目の上映に呼んだ
んです。」

へへへ、と雄介は笑った。

あきれてユリは笑うしかなかった。

「私も頑張らなくっちゃ」

改めて仕事モードを意識した。

War Is Over 平和を目指すために、経済の安定を。

経済に友愛を。

それに対して私ができることが、少しはあるのだろう。

ユリは明るい気持ちで夜空を見上げた。

違和感

『おかしい』

遙は気づいていた。

今、誠士と離れているのは、子どものことでケンカをしたのが原因だった。

結婚して一年半もたとうかというのに妊娠するきざしがない遙は、誠士に来年から不妊治療に付き合ってくれるように頼んだ。

だけど誠士は、色よい返事をしないのだ。

けど、それは大した問題ではなかった。

遙が気になっているのは誠士の変化だった。
あきらかに遙を避けていた。

『なにかある。なにか』

遙は東京に帰ることに決めた。

「そんなことをしたら人件費がかかりすぎるっ！」
林浩二は机をこぶしで叩いた。

「ええ。ですが社長、この輸送費と光熱費、銀行への返済を見てください。私たちが提示させていただいた案では効率化させて150

万近く減らせます。そうすれば、もっと人材にお金をかけられると思います。どうでしょう」

松永謙二は笑顔を崩さずに説明した。

「ん？…そうだったか　うーん、じゃあ、このままの人件費で毎月150万に徳をすることを選んだほうがいいじゃないか。売り上げがあがる」

「確かに一時的には収入が増えますが、それは賢明ではありません。税金もかかりますし。マンパワーを充実させてこそ、もっと大きな利益を得ることができます。シミュレーションによると…」

ユリが松永謙二について会社訪問するのは、これが初めてだった。いつもは、先輩である樋口という男にマンツーマンを受けていたのだ。

樋口も出来る社員であったが、やはり松永には到底及ばない。知識というよりもオーラが違う。

圧倒的なオーラはカリスマ性を放ち、人、とくに事業主たちをひきつけた。

今回の林浩二が率いるオーナー会社は、顧客のなかでも偏屈で難易度の高い案件だった。

「社員をものみたいに考える人ってまだいるんですね」
ユリは困ったように言った。

「ん。だから私たちは、それを上手に社長たちに教えてあげないと

いけないんです。ここまでやってきた、という自信とプライドを傷つけないように言うのは、なかなか、むずかしいんですよ」

疲れた顔で告げる松永は、少し機嫌が悪そうだった。林のような男を相手にした後では仕方がない。

「室生さん、少し仕事に慣れました？高倉会長の強引さに振り回されて大変でしょ」

気持ちを切り替えるように松永は声色を明るくした。

松永は百合子からじきじきにユリの依頼を受けている。

「いいえ。仕事にいま燃えてますから」

ユリはにやつと笑った。

「それはいい。樋口くんも室生さんの指摘は鋭いって感心してました。あとはデータづくりや方法論を覚えれば完璧ですよ。」

あれ？と思う直感はもうセンスですからね。どんだけ知識があっても分からない人もいるんですが、室生さんにはそれがある」

「そうですか。それだったら嬉しいです」

笑いながら二人は地下鉄へと降りていった。

ユリがこの仕事場にやってきて、1ヶ月ほどたとうとしていた。

「これ、なに？」

遙は誠士の前に、レンガ色のアーガイル柄のセーターを広げた。

「？」

一瞬、誠士はそれが何か分からなかった。だが、すぐに気づいた。

「勝手に開けたのか?!」

怒って遙を見た。

「何なのよ! ユリさんから、誠士さん宛てに届くなんて! おかしいじゃない? これ、明らかに仕事じゃないわよねっ!」

遙の剣幕に誠士は口をひらくことが出来なかった。

「シズカちゃんの手紙を送ります。サイズやデザインに不都合がある場合は、また連絡ください。ユリ。」って、なにこれ?

「返せよ」

同封されていた手紙を読み上げる遙の手から誠士は奪い取った。

「それは」

誠士はセーターを指さしながら、続けた。

「妹のだ。ユリさんに選んでもらったんだ!」

「だから、どうしてユリさんに選んでもらう必要があるのよ!?!」

「おまえは長野に行っていなかったじゃないか?!」

「そんな事聞いてない。どうしてユリさんなのよ?! 毎年、妹さんへのプレゼントは誠士さんと私で選んできたのに!」

遙にとって誠士の行為は裏切りだった。

「だからおまえはいなかったじゃないか？妹は…おまえの選んだのじゃ気に入らないんだ！だからユリさんに選んでもらったんだよ」

私のじゃ気に入らない？

その言葉は遙にぐさりと突き刺さった。

遙自身を否定し、打ちのめすには十分な言葉だった。

目を見開いたまま、遙は茫然とした。

「もう、いい…」

セーターをテーブルの上に置くと、そのまま歩いて寝室へと消えた。

パタン

『おれはなんてバカッ…!?!』

誠士は手を額にあてると、ズルズルと沈み込んだ。

『こんなこと遙に言うつもりじゃなかったのに』
『頭を抱え込むような形で、まるくなるしかなかった。』

『ユリ…』

桃子

「ごめんね、待った？」

いつもファーストフード店。いつもの席に桃子は座っていた。

「ううん。先生、忙しそうね」

「そりゃ、師も走る師走ですから。あ、どこ行く？今日はクリスマスだからどっこも人、多いかなあ」

「ここでいいです。ほら、クリスマス用のチョコミルフィーユもあるし」

「うん、いいね」

甘いものに目のないユリは期間限定のミルフィーユにすぐに陥落された。

「人が多いのってニガテです」

桃子が上着を脱ぎながら居座る体勢をつくる。

「そっだよね。体調悪い？」

「最近はちよっと」

苦笑いをしながら桃子は首を傾けた。

「そっかあ……」

どう言っただいいか分からなくてユリはため息をついた。

桃子は難病といわれる免疫の病気を持っていて、ちよっとやそつとでは治りはしない。

調子のよい時は元気そうにしているが、下り坂になるとみるみる瘦

せていく。

「今度ゆっくり話ししない？治療について」と、その続きを言おうとしてユリは絶句した。

桃子がレンガ色のアーガイル柄のセーターを着ていたのだ。

「そのセーター…」

「ああ、これ？もらったんですけど　へん？」

「ううん」

ジユデイ！これは手作りだから1点ずつオーダーだって言ってたクセにい

出回ってるじゃんよ

「よかったあー　実は兄にもらったんです」

「お兄さん？だって桃子は一人っ子でしょ？上にお兄さんいた？」

「ううん。私、本当は養女なんです。今の山王神社の宮司だった父に小さい頃引き取られたんです」

噛みしめるように言う桃子の様子にも気づかず、ユリは真っ青になった。

まさか

「え？だって…」

「今まで黙っててごめんなさい。…なかなかこういつ事って言いにくくって…」

桃子は下を向きながら話した。

「それに先生はうちの兄の親戚みたいなんです。高倉誠士って知ってます？私、先生が行った家が高倉っていうの忘れてて…」

ユリは頭が真っ白になった。

桃子が誠士の妹？

桃子が誠士の

いもつと

「先生？」

ガタン！

ユリは立ちあがった。

「ごめん…桃子…今日は…帰る」

「え？」

そのままユリは自動ドアを抜けると、外へ出て行ってしまった。

「あ、待って先生、荷物」

急いで追いかかけようとして、桃子はユリの手提げ袋をひっくり返してしまった。

「え？」

破けた内袋からのぞく中味をみて桃子は驚いた。

着ているセーターと同じものが飛び出てきたからだ。

ユリは頭を整理したかった。

与一が言っていた、誠士の妹。

確か生まれたばかりで、一家離散して

『後に残ったのは子どもだった誠士と生まれたばかりの妹だけ。親戚に預けられたか施設に引き取られたか』

『誠士の復讐はまだ終わつとらん』

でも、桃子はずっと桃子だよ

小学生の頃は、宿題も終わらないうちに「せんせい遊ぼ」と笑う無邪気な少女だった。

宮司のおじさんも、本当に優しいお父さんで。

モデルの化粧をし終えた桃子は、驚くような美しさだった。

「私もモデルになります」

そう言つて微笑んだあの16歳のころ。

「私が死んだら先生に力をあげるね」

あれはひどい肺炎にかかった時。

茶化して言ってたわりに、どこか真剣な表情をしていた。

桃子はそう長く生きられないかもしれない、そう医者に言われて

「ばか…死ぬわけないでしょ」

枕元で泣きながら叱った二十歳のころ。

そうよ。いつでも桃子は私の傍らにいたんだもの。

桃子が誠土さんの妹だなんて、おかしい…

きつと何かの間違い

「どこ？どこにいるの？」

携帯電話に向かってユリは叫んだ。

「ユリ」

誠土の声はどこか哀願を帯びていた。

「どこにいるの？」

ユリはそれだけを繰り返した。

「新宿のサウス・バー」

ブッ！

ユリは何も返事をせずに切った。

誠士に会わなければ。

ユリはタクシーを拾った。

妹よ

サウス・バーは誠士の行きつけだ。
ユリも何度か行っていた。

間接照明の美しいジャズのかかった店内。
テーブルが3卓ほどとカウンター席が8ツほどの小さなバーだった。
入り口から3席ほど奥の椅子に誠士は腰かけていた。

「麗しいきわが姫、ようこそ」
ユリを見つけると誠士はグラスをあげた。なんだか憔悴したような顔だった。

「私にも同じものを」
気を落ち着けるためにユリはマスターにオーダーをした。

気品のある60歳まえほどのマスターは穏やかにうなずいた。

ウイスキーの水割りが出てくるとユリは一気に飲んだ。

「何かあった？」
ユリの様子をみて誠士は怪訝そうに尋ねた。

「いもうと……」
「え？」

「誠士さんの、妹は」
「妹？ 僕の？」

ユリは真っ青な顔でうなずいた。

「桃子に何かあった？」

ユリの様子に驚いて誠士は立ち上がった。

「違う、違うの。桃子は大丈夫」

誠士をいさめるようにユリは誠士の両腕を持った。

一瞬の沈黙。

「桃子を知ってるの？ユリさん？」

その言葉にユリは小さくうなずいた。

「なんだ。そうなんだ」

安心したのか誠士は再び腰を下ろした。

「私 さっきまで知らなくて 桃子は一人っ子だって思ってたの

に、あのセーター着てきたの」

「じゃあユリさんの妹みたいなの」

涙の溜まった目でユリは誠士をじっとみると強くうなずいた。

「そうだったんだ」

グラスに入った残りを誠士も飲み干した。

「なんて偶然なんだ」

何も言えずにふたりは黙りこんだ。

「僕と桃子が別れたのは、桃子が生まれてすぐの頃だった。親の事業が失敗してね、僕は福祉施設に引き取られたんだけど、赤ん坊の桃子はそこではみることが出来なかったんだ。だから、一旦母方の

親戚に預けられたんだ」

それは与一から聞いた内容の続きだった。ユリが知りたかったと思っていた話だった。

「僕はずっと桃子のことが気になっていたんだ。桃子が預けられた伯父さんちも最初は預かるのに難色があったから。何度も寮母さんに『桃子もこの子にして』って頼んだ。けど、大人がつくった“きまりごと”は、子どもの僕がどうこう言ったくらいじゃビクともしない壁だった」

七歳の少年の悲しい戦いは、ユリの心にも響いた。

「いちど伯父さんちの桃子に会いにいった事があったんだ。どうしても気になったから。…そしたら養女に出したって言うんだよ」「誠士は泣きそうな顔をしていた。

「それはいつごろ？」

「小学3年のとき。桃子の1歳の誕生日だから会わせてもらえるところだったんだけど」

「里親は教えてもらえたの？」

「ああ。それは教えてもらえたけど　でも、養女となると、もう僕とはいっしょに暮らせないってことだから。よその子になってしまっ、ってことだから…」

そのときハッキリと分かったんだ。僕の家族は無くなったんだ、って」

深い深い悲しみが誠士の表情に表れていた。

両親を無くし、そしてまた家族を失った少年。

2度にわたる喪失は、誠士を深い孤独に放りだした。

「そういった事柄が大人の話し合いだけで決まっていたんだ。僕はまるつきり蚊帳の外。なんなんだ、って思ったね」

半ばヤケのように笑いながら誠士はマスターにおかわりをした。ついでにユリのぶんも尋ねてくれる。ユリはカクテルにした。少し落ち着いてきていた。

「桃子は体が弱かったからお金がかかる子だった。だけど山王神社のおかみさんと神主さんはホントよくみてくれた。

それはよかった。すごく感謝してる。神主さんは僕にも養子にくれるように何度も言ってくれたんだ。『誠士くんも、うちへくれば桃子といっしょに暮らせるよ』って。でも、出来なかった。

僕まで養子にいたら長谷川の家は本当になくなってしまう。もし父が帰ってきたとき僕まで養子にいたら困ることになる、って本気で考えていたんだ。…もつとも父は帰ってなんてこなかったけどね。そんなオヤジを待ってるなんてお笑いだよ」

そんなことない

ユリはそう思ったが口にしなかった。言葉はときに陳腐になる。黙っているほうが気持ちは伝わる。

「そんな訳で…僕はときどき山王神社をたずねて桃子の様子をみる、

桃子は山王神社の子という自覚しかないから僕のことを理解できない、てのがずいぶん続いた。桃子が自覚したのは、ずいぶん大きくなってからだつたよ」

兄の悲しみを知らない妹…

それは幸福なのか不幸なのか

ユリには分からなかった。

悲しみはやがて高倉への復讐となったのだろうか。

そして、それは誠士の人生の指針まで変えてしまったのだろうか。

「ユリさんは？」

「え？」

体をユリに向けて頬杖をついた誠士はいやに色っぽかった。

「桃子とは？」

「わ、わたしは山王神社のご近所さんだっただけ。桃子は近所の子
って感じかなあ」

少しどきどきしながらユリはカクテルを啜った。

「…なんか　へんだなあ」

「なにが？」

「血相変えて飛び込んできたわりにその答えは…しっくりこない」
誠士は核心をついてくる。

「あ…もしかして“せんせい”じゃない？桃子がよく言ってた？」

「何言ってたの?!」

「ほらっ、やっぱり。せんせいはカッコよくてね、せんせいはモテルでね、せんせいは頭がよくってね、せんせいはすごくモテてね」「なに、そんな事言っただの？」

「『ほんとはすごく優しいせんせいが私は大好きなの』」

その言葉を聞いたとたんユリは口を被って泣き出した。

「あ、あ、ごめんユリさん。泣かないで。僕なにか悪いこと言った……」
首を振りながら否定するが、ユリは泣くのを止められなかった。

「ううん、違うの。あたし。桃子はずっと私だけの妹だと思ってたの。誰よりも大事な妹だったの……誠士さんの桃子なのに、ごめんね」

「いいんだよ。いいお姉さんがいて桃子は幸せだ。ありがとう
ユリさん。大事にしてくれたんだね」

誠士は優しくユリの肩を抱いた。

そのままの姿勢でユリは泣き続けた。そうしていたかった。

しかし男のひとことでそれは終わりを告げた。

「会長がお亡くなりになりました」

ふたりが振り向くと暁生が無表情でそこに立っていた。

波紋

冷たいみぞれまじりの雪が降るクリスマスも過ぎた十二月だった。

それはユリが今まで見たこともないような豪華で盛大な喪式だった。高倉財閥の会長だった与太郎の影響は計り知れないものだったのだらう。

いちども言葉をかわすことなくなつた祖父はどこか他人のようで、イベント化した葬式はその思いに拍車をかけた。

喪主は母の美雪がつとめた。

百合子の命令だった。

与一は刑事事件をおこしていたので公で喪主にするには憚られたのと、美雪のお披露目も兼ねていたようだった。

人々はひそひそと噂をしあつた。

「次の跡継ぎは、娘か？」

「与一社長の復帰はむずかしいのか？けど確か娘婿がいただらう？」

みんな自分の進退を見極めようしていた。
どこについたら得なのか？

その思惑はユリの存在にもふりかかった。

親族の中にいたユリにも当然目が向けられたのである。
ここに至ってユリの身元が白日になったのだ。

「およびですか？」
葬式の終わった夜、ユリは百合子の部屋をたずねた。

「ユリ、西村雄介と結婚する気はないかしら？」
唐突に百合子は言った。

「え？」

「ほら、西村くんっていい子そうじゃない。優秀だし」

ユリは茫然と、つつ立ったまま聞いた。

「何をまた突然に…いきなり何を言うんですか。そんな結婚だなんて 第一、西村さんに確かめもしないで…」

「そんなもの断るわけないじゃないの」

それはそうだ。

かねてから雄介はユリが好きだったのだし、仕事の好きな雄介にとつて高倉の一員になるメリットは計り知れない。

けれど与太郎の死んだ今日昨日でそんな話が出てくるのがユリには納得いかなかった。

「お爺さまが亡くなったばかりで、そんなお話しお受けできません。考えられません」

「あの人死んだから言うの」

百合子は低い声でハッキリと言った。

「これから社内は次期後継者をめぐって争いが始まるでしょう。私
が生きていればそれなりに私になびいている連中も先は分かりませ
ん。いつ与一を担ぎ出してくるかしれない」

「…ということとは、やはりお母さんに？」

次期後継者は美雪に、と百合子は算段しているのか。

「いいえ。私はユリに継いでもらいたい」

「そんなんっ」

ユリはあまりの出来事に心臓が止まりそうだった。

「ああ、ここに座って」

ふらふらとなったユリを百合子はソファに促した。

座るところか体を縦にできなかった。

そのままソファに横になったユリに百合子は優しく話しかけた。

「ごめんね、ユリちゃん…」

泣きそうな顔をしている百合子を見たのはユリは初めてだった。

ユリの手を握りしめながら百合子は続けた。

「私のエゴね。…私が出来なかったから、あなたにやってもらおう
なんて…もし、あなたが望むなら…逢のように好きな男と結婚で
もして家庭を持つのだっていいの。私はあなたが幸せになるなら
それが一番いいのよ」

百合子の皺の刻まれた頬を涙が伝った。

驚いてユリは口を開いた。

「わたしには 何が幸せか分かりません でも結婚はいやなんです
母は父と結婚してとっても不幸でした。いつもケンカをしてい
る両親を見ていた私も不幸でした。∴それは、うちだけが特別じゃ
なくって、私の周りの家庭は大なり小なり結婚生活は、あきらめた
結果のようだったんです」

百合子は大きくうなずいた。

「分かるわ。私もそうだった。けど、いいこともあったのよ。子ど
もがいた。∴それはとっても嬉しいことだったの」

「産んだ子どもが私のような思いをするなら、子どもを持つことが
いいことだなんて思えません」

ユリは泣きながら小さな声で反論した。

百合子はユリ傷の深さを知った。

「ごめんなさいユリちゃん あなたを救えなかった私たちを許して」

「お婆さま」

百合子はハンカチを出してユリに手渡した。

「結婚と後継者の話は忘れてちょうだい。∴美雪に頑張ってもらっ
たわ。ほんとはあの子がもっと頑張らないとダメなのよ」

「お母さん、出来るかしら？」

やらなくていい、と言われると、気になってくるユリだった。

「あのね 大きな組織ってひとりでなんて動かせないのよ。だからいっぱい手伝ってくれる味方を作るの。それがトップの仕事なのよ。ユリちゃんはゼーんぶひとりでやるうとしてない?」

凶星だった。

「そんなの出来っこないでしょ」
百合子はおかしそうに笑った。

「もしかして 西村さんも、その手伝ってくれる味方に入れるため?」
「うなずきながら百合子は答えた。

「結婚相手は最大の味方。手伝いというより、もうひとりの自分。…ユリちゃんが今までみてきたような家庭ではなくって、目的にいっしょに向かっていける心強いパートナー… お婆ちゃんはユリちゃんにそれが欲しかったの」

目的にいっしょに向かっていけるパートナー?

ユリははじめて結婚の新しい形を知った気がした。

「さ、もう今日は休んで。疲れたでしょう。起きられる?」

「はい」

ユリはゆっくりと起き上がった。

少し頭が重かったが、足取りはしっかりしていた。

「おやすみなさい」

広い廊下に出ると窓から煌々と月が差し込んでいた。
みぞれは上がったようだ。

十三夜ほどの月。

しん、と静まりかえった庭は、見るだけで冷気が漂ってくる。

ぶるつと一回震えるとユリは自分の部屋に向かって小走りに駆けていった。

比較

『私もせめて着物にすればよかった…』

遙は着ていたモスキーノのフェミニン型のドレスを顧みて悲しくな
った。

よりによってユリと同じ水色系だったのが余計みじめにさせた。ド
レスは少し緑が入っていたのでくすんでみえたのだ。

目の前のユリは鮮やかな水色の地色が美しい加賀友禅の振袖を着て、
結婚式に華やかさを添えていた。

それは大きな会場に合っていたし見目のよいユリは更にオーラが加
算されて人々の目をひいていた。

年が明けて、今日は桑名農水大臣の息子の結婚披露宴だった。

高倉一家は喪中ということになっていたので、会社扱いで呼ばれた
席だった。

円卓に誠士、遙、ユリ、そして西村雄介。他に大型農家を手広くや
っている金村という社長たち8人がメンバー。

グリーンリングとしては農水大臣は重要な人物だったので喪中など
とは言ってられないのが本音だ。しかし、桑名大臣としては高倉
財閥を呼びたい…なので、なんとも微妙な顔ぶれとなったのだ。

「自由貿易協定を結んだメキシコの問題を聞きましたか？」
金村が雄介に話しをふってくる。

「ええ。安い米が入ってくるんで農家が大きな抵抗をしているっていうのですか」

「はい。日本も同じような感じですよ…こっちは抵抗たって大きくは出来ません。桑名さんとの兼ね合いもどうやったらいいか…」

顔を困ったようにさすりながら金村は挨拶に回っている桑名をちらっと見た。

大臣の機嫌を損ねずやっていきたい、というのが。食料自給率が30%台になっているのにまだ怒る気はないようだ。

「しかし高倉商事さんは画期的なことを始めましたね。わたしらビツクリしましたよ」

「おかげさまで大きな反響をいただいています。発案者は彼女なんですよ」

そういつて雄介はユリを紹介した。

「おお、これはまた…こんな若くて美しい婦人が発案者とは…」

近江米華の金村と申します」

「室生ユリと申します」

名前のとおり百合の花のように微笑み、ユリはおじぎをした。

今日は髪もアップにして女性らしい雰囲気か漂っていた。

最初ユリが現れたとき、雄介は大仰に誉めちぎり、誠土は口に出さないまでも眩しそうにユリを眺めた。

その様子を見て遙はどんと自分に自信をなくしていった。

『やっぱり誠土さんはユリさんのこと…』

でも、それは仕方のないことのような気がした。目の前で繰り広げられる専門的な会話をこなし仕事もできるユリに、遙のかなうところなんてどこにもない。

お婆さまの期待だってユリさんにしか向いていない

そう

彼女はあのユリさんなのだから。

モデルのサイン会で大勢の女の子たちに囲まれ輝いていたユリを思い出していた。

「いやー すごいですなあ」

金村たちや周りの人間がユリを誉めるたびに遙はどんどんと疎外されていく気がした。

『なにも聴こえない… 聞きたくない…』

遙は自分がどこか遠くになっていく感じがしていた。

「僕ちよっと困ってるんです」

西村雄介は披露宴のあと、ユリと入ったホテルの喫茶室でそう切り出した。

誠士と遙は先に帰っていったのでふたりだった。

「なにがですか？」

「だってユリさんが高倉一族だって知らなかったから…」

「じゃあ、今までの話はなかったことにしたほうがいいですか」

「いやっ、それは困りますっ」

「いっぱい困ることがあるんですねえ」

ユリは笑ってから抹茶の入った碗を口に運んだ。

そして八ッ橋を楊子で上手に刺して食べた。その様子に雄介の緊張はゆるんだ。

ユリは着物しぐさも慣れているのか自然で優雅だった。

着物モデルもやっていたので衣装のまま食べたり飲んだりもやってきたからだ。

「もちろん、僕は自分の意思を撤回するなんてことはしません。…

けど、高倉財閥のお嬢さま、となると…なんていうか…」

「なんていうか？」

「気合が違います」

「ははははっ」

思わずユリはいつものように笑ってしまった。

その様子に雄介は一瞬たじろいたようだったが、早口でまくしたてた。

「そう、気合がいるんですよ。僕んちは普通のサラリーマンですし

ユリさんより年下だし、カッコよくないし…

とにかく、ユリさんって人だけでもすごいのに、そのうえ高倉って家までみえたら、僕なんて付き合う相手としても分不相応って言葉が頭に浮かびますよ」

一気に言ってから雄介はコーヒーを流し込んだ。

「とにかく、とにかく… こんな僕でもまだ望みがあるんなら何か言いたげに言葉を搜している雄介をユリはじっと待った。」

「頑張ります」

『いいぞ！』

ユリは単純にそう思った。そして、ふと気になって質問した。

「西村さんは結婚するなら、相手に何を一番に求めますか」

その質問に少々驚いたようだったが雄介はしばらく考え込んだ。

「うーん… いっぱい話し合いが出来ることでしょうか」

「話し合い？」

「はい。人間って話さないと分からないんです。でも、日本の男って“言わなくても分かってってくれる”って思って妻と話さない人多いんですよね。」

女の人も男性の話の聞くつてより、一方的に話している人が多い。そうやって上手いかなくなった先輩たくさん見てきたんです」

ふんふん、とユリはうなずきながら聞いた。

「でも海外のうまくいつているカップルは、男性も女性も自分が外でしてきた仕事のぐちも家庭の悩みも、お互いが話してきているんです。そりゃあ上手くいかない時もあります。」

けど、そこはどこかで帳尻を合わせてるんです。手遅れにならないように。」

本当に嬉しそうに雄介は話した。きつとどこかの夫婦を思いうかべているのだろう。

「手遅れ？」

「ほら、どっちかの気持ちがあきらめてしまうタイミングってあるでしょう？そこまで行かないうちに、外で食事したり プレゼントしたり 友達のパーティに行ったり そんな些細な努力をしてるんじゃないかなあ… ハッキリと分からないけど。」

そんな海外ドラマのような話は、少しユリにはピンとこなかった。雄介は本気でそんなことが出来ると思っているのだろうか？

「同じ目標を持って共に努力していく、っていうのはどう思います？」

ユリは質問を変えた。

「同じ目標 ですか ユリさんの目標って何ですか？」

「えっ」

ユリは詰まった。

「そ、そうですね 上手く説明できないですけど、あの シュタイナーっていうか ガルトナーさんたちのような思想を持って世

の中に働きかけていきたい、っていつか」

「それっ！いいですよー」

その言葉は雄介の目を輝かせた。

「夫婦でどうこうしなきゃ、ていう決まりごとやイベントより、根っこに人に対して優しさがあればいいかな、って思います」

ユリの言葉に雄介は少し考えて

「リスペクトですね」

そう言った。

「それと…愛」

ものすごく口にしづらかったがユリは発言した。

雄介は一瞬哀しそうな顔をしてから目をふせて微笑んだ。

「そうですね」

エスペランサ・望徳

1ヶ月ほどたったある日、遙は思いがけないものを見た。

桃子がユリといるところだった。

親しそうに話している二人から、遙は咄嗟に身を隠した。

そこは病院のロビーだった。

気分が落ち込みがちで、だるく不眠が続いている遙は、総合病院の神経科に通うようになっていた。医者は漢方だの安定剤だの睡眠剤だのをくれるだけで状態は好転しなかった。

『どうして桃子さんがユリさんと？』

それは全く思いもよらない光景だった。

「あの先生じゃダメ。やっぱり東都大学の石見先生にみてもらお、ね」

機嫌をとるようにユリは桃子をのぞきこんだ。

「新しいトコって疲れるから嫌だな……」

「だって腎臓がどんどん悪くなってるの放っておけないでしょう。私も付いてってあげるから行き……ねっ」

その言葉は嬉しかったが、桃子はすぐに断った。

「ダメです。先生はそれじゃなくても忙しいのに。ひとりで行けま

す

「こつちの方が大切なの」

強い口調でユリはきっぱりと言った。

桃子は感激した。

「うわ〜ジュディさんに自慢しよつと」

「あー」

最近ほつたらかしにしていたので、ユリはジュディの事を言われるがニガテだった。

「あのね、チエックしてきたお店あるんです。先生と是非行きたい
つて思つて」

「疲れてないの？」

「大丈夫、大丈夫。今日はよく薬が効いてますから」

満面の笑顔でユリの腕をひっぱっている桃子だった。

遙は調べることにした。

ユリと桃子のことを。

誠士とユリのことはハッキリとさせるのが怖かったが、桃子とのことならショックは大きくないと思った。

そして数日後。

桃子の前に一台の車が停まった。

グリーンシルバーのアウトディA4から顔を出したのは遙だった。

「お義姉さん」

「やっぱり桃子さん。どお、乗っていかない？」

言われて桃子は素直に遙の車に乗り込んだ。

「もし予定がないのなら、これから誠士さんをいつしよに驚かさな
い？」

「驚かす？」

「誠士さん、こんど高倉商事の専務も兼任することになりそうなの。
そのお祝いをするの」

「専務？エライんですか？」

「そりやエライわ。だって社長の次くらいの肩書きですもの」

「そんなにエライ人になるんですか」

正確には大勢いる専務のなかの、更に実権がない名前だけの専務だ
つたが、そんなこと桃子には分かるはずもない。誠士はあくまでグ
リーンリングの代表が主だった。

「だからね、ちょっとでいいからこれから顔出してくれないかしら
？ほらっ、その 에스ぺランサ・ホテルで私と落ち合うことにして
いるの。そこに桃子さんもいたら絶対に誠士さん喜ぶと思うわ」

「私なんかいてお邪魔じゃないんですか」

「そんなわけないじゃない！絶対に喜ぶわ」

遙は絶対を繰り返した。

普段会えない兄に何か自分でしてあげられることがあるなら、こんな嬉しいことはない。

桃子はもらってばかりの誠士の愛情に少しでもお返しをしたかった。車はエスペランサ・ホテルの駐車場にすべるように入ってしまった。

「わああ」

ジュニア・スイートに用意されたウェルカムセットは華やかで甘いお菓子やフルーツ、一口サンドなどだった。

「これは私たちのお菓子だから、いっしょに食べましょ」
「いいんですか？」

「ええ。誠士さんのぶんは別に用意してあるから大丈夫。座って」
紫色のベルベットが張られた豪華な椅子は、見ただけでもうっとりとした。

「コートは…入り口にクローゼットがなかったかしら？」

桃子がコートを脱いで、下に着ていたのはあのアーガイルのレンガ色のセーターだった。

密かな怒りを実感した遙はその姿を見て決意を決めた。

『あなたも私をバカにしているのね。私のプレゼントは気に入らないのにユリさんの選んだのは身につけるんだ』

桃子は促されてベルベットの椅子に座った。

遙はシャンペンまで勧めてきて、1杯だけ、という約束で桃子は口にした。
繊細なシャンペンは美味しかったが、そのうち桃子はよく分からなくなってきた。

そう

周りがぼやと歪むのである。

「あれ、私なんかへん…」

「桃子さん？」

何度も瞬きをするが、どうしてもまぶたを上げておくことが出来ない。

そのまま桃子は倒れようとした。

急いで立ち上がると遙は桃子の状態を支えた。

「桃子さん」

意識を失った桃子を確かめながら、遙は時間をおいてからもついで声をかけた。

「桃子さん」

桃子は返事をしなかった。

そのまま寝息をさせながら睫が青い影をつくるだけだった。

「いえ…うちには来てませんが」
ユリが山王神社の桃子の父から電話を受けたのは、次の日の夜だった。

昨日から桃子が連絡もせずには帰らない、というものだった。
もう少し知り合いにあたってみる、という返事を聞いてから電話は一旦切れた。

ユリはおかしな胸騒ぎがした。

『ももこっ!』

山王神社に向かった。

暁生の車のなかでユリの携帯電話が鳴った。着信は遙からだった。

「はい?!」

「ユリさん、ごきげんよう」

「遙さん?! 何かしら、私ちよつと今急いでいるの」
「そう、それは残念。実は桃子さんがこちらにいらっしやるんだけど」

「ええ?! 桃子は遙さんといえるの?」

「そう」

はああ

ユリは安堵の息をついた。

「安心するのはまだ早いわ。ユリさんの返事によっては、桃子さん、もう帰れないかもしれないの」

「なんですって?..!」

ユリは仰天した。

一瞬にして誠士との関係を思いかえした。

「どづいつこと?桃子をどづするつもり?どづに居るの?」

「どづしよつかしら?」

笑うように遙は答えた。

「桃子は誠士さんの妹でしょ?あなたの義妹でもあるのよ」

「ええ。でもユリさんのほうが桃子さんと親密でしょ?」

誠士とのことじゃないのか?

いったい遙の意図は何なのか?

「何がしたいの?」

「そおねえ ユリさんにはまず仕事を辞めてもらおうかしら。それから高倉の家から出ていってもらえないかしら」

ユリは遙の真意を測りかねた。

誠士との関係の清算なのか、目の前のやっかいもの払いか…

どっちにしる返事は決まっていた。

「それが条件?…いいわよ…それだけ?」

一瞬、遙が息を呑む気配がした。

そして長い沈黙がおりた。

何かをためらっていたようだった。

「ちがう」

「え？」

「ちがうの」

小さな声が聞こえたかと思うと遙は泣きだした。

驚いてユリも何も言えなくなった。

「あたし もうダメなの」

泣きながら遙は話し出した。

「誠士さんにも見捨てられてるし 仕事もしてないし パパは
犯罪者だし、お婆さまも私がうつとおしそうだし そのうえ桃子さ
んまで ユリさん、ユリさんって。もう、私どうしていいか分か
ないのよ」

ユリは遙の言いたい根本が少し理解できてきた。
単純に誠士との事だけではなさそうである。

しゃくりあげながらも遙は止めなかった。

「あたしは 邪魔者なの ユリさんが こなければ私は幸せだ
つたのに みんなあなたが私の幸せをとったのよっ」

責任転嫁

遙はどこかでそれが分かっていた。

ユリを単純に憎めたらどんなにラクだったろう。

憧れた女性じゃなかったら、もっと普通の女性なら、無価値感は軽かったかもしれない。

「そうかもしれない」
ぽつりとユリは言った。

「私のせいで 遙さんはツライ思いをしてるのかも」
ユリには自覚があった。遙にひどい事をしている。

誠士とのことは明らかにユリが原因なのだから。

「ごめんなさい…何でも遙さんの言うとおりにする。でも、これだけ聞いて。あなたが言ったセリフ、そのまんま私のセリフだったの」
高倉に来る前まで。

29歳なのに仕事クビになってばかりで、キャリアもなくなって、結婚もしてなくて、お金もなくなって。

痴漢にあうわ、病気の母親はいるわ、父親は家庭内暴力のあげく失踪だわ　とにかく世間でいう私の価値なんてゼロだった」

遙にユリの過去は心外な話だった。

「でもね、それって私がダメだからそんな状態なわけじゃなかったの。だって私は変わってないのに、高倉に来て環境が変わっただけで、どんどんとステータスだけ上がっていったの。それって何？

自分の価値を周りの状況で判断していると変になるってこと？…そうだと思う。世間の評価や他人の感情に左右されないものが核にい

るんだと思った。私はそれを少しだけどみつけたの。

幸せって状態じゃないかな。何かが揃ってるから幸せなんて、そんなもんじゃなくって。

あーこの人といられて嬉しいな、とかおいしいもの食べられてラッキーとか、どんどんと移り変わっていく一瞬一瞬が幸せ。だから次の瞬間は分からない。でも私たちは今しか生きられないんだから。

自分さえ自分を好きでいれたら、誇りを持っていられたら、それで十分なんじゃないの？まあ、それがむずかしいんだけど

だから私は、私のこと、ひとりでも好きだって言ってくれるひとがいたら、もうそれでスゴク嬉しい。十分生きていける。私以外にも私のこと好きでいてくれる人がいるなんて、なんてラッキーなんだ、ってね」

ああ、この人は…

そうやって好いてくれる人を大事に思っ、その瞬間を楽しんで…だから人を惹きつけてきたんだ

遙はユリのバツクボーンを少し理解した。

「遙さんだって、私に優しくしてくれたじゃない。右も左も分からない私に、高倉の家のこと親切に教えてくれたじゃない。私のためにドイツでワインいっぱい用意してくれたじゃない。私、忘れないよ」

ユリの言葉は遙の自尊心を救った。

ただ涙を流すだけだった。

「エスペランサ・ホテル ジュニア・スイート1003号室」

そのまま電話は切れた。

横禍

誠士はどうしてよい分からなかった。

ユリとの関係はいつこうに進展せず、クリスマスの前から肌を重ねていない。

狂おしいほどの思いは欲望なのか恋なのかもよく分からなかった。

西村雄介がユリにアプローチしているのも困りものだった。

独身で仕事の出来る雄介をユリの相手に、と算段している百合子の噂も聞こえていた。

あの日サウス・バーに曉生が現れたことを考えると、百合子にふたりの関係がバレている、と考えていいだろう。誠士はユリとの関係をことさら秘密にする気持ちもなかったが、今は背負っているものが多すぎたので当面は静かにしておきたかった。

最近では雄介の自分をみる目が変わってきているのがハッキリ分かった。

貪欲なまでの仕事への意欲は、誠士との差を埋めたいがためのエナジーとしか思えなかった。

仕事では気が張っていた誠士だったが、家に帰ると酒量が増えていった。

昨日、今日と遙がないので久しぶりに伸び伸びとしていた。今日は日曜だしゆっくりしよう…

遙は体調が悪いといって毎日寝てばかりで誠士の顔さえ見ようとし

ない。だが、負い目のある誠士は遙に何も言うことは出来なかった。そんな状況だったので、昨夜はめずらしく長野へ行くと言って遙が家に帰らなかつた状況にホツとした、というのが誠士の本音だった。

『あれ？留守電入ってる』

昨夜は携帯電話の電源から切って休んでいたのだ。

「夜分申し訳ありません。山王神社の八神です。そちらに桃子がお邪魔していませんでしょうか。もしいるのでしたら家に連絡を入れるよう申し伝えていただけませんかでしょうか。よろしくお願いします」

ピー

午後10時48分

機械的なアナウンスが流れて録音は途切れた。

『桃子が帰っていない？』

急いで山王神社に電話をした。

「ああ、誠士くん。桃子はお友達の家にいたんだよ。学生時代の友達に久しぶりに会ったらしくってね、話が盛り上がってひどく酔っ払って眠っちゃったらしいんだ。連絡もせず困ったもんだ」

神主で桃子の養父である八神は苦笑しながら説明した。

「そんなに飲めないから普段はそんなにならないんだけどねえ…
幼馴染がよくしてくれてね。迎えにいつてもらったんだ」

それがすぐにユリのことだと誠士には分かった。

「桃子は大丈夫なんですか」

「念のため病院に行く、て。私も心配だから向かいますって言ったんだけど、病院を教えてもらえなかったんだよ」

「え？」

「いや“また連絡します”って言われたんだ。ゴタゴタしてたんだろっ…そんなややこしいこと頼まれたら色んなこと出来ないよ」

どうやら八神はユリを相当信頼しているようだ。

「わかりました。桃子の居所が分かっていたらいいです。……あの、どうもすみません」

「いやいや、誠士くんがあやまることじゃないよ。また、連絡が入ったら誠士くんにも電話するよ」

「お願いします」

誠士は電話を切ったあと、すぐにユリの携帯に電話をかけてみたが通じなかった。

何かあったのだ。

イライラしながらも何か方法がないか考えてみる。

そして思い出したように暁生の携帯電話にコールした。

「はい」

「相良くん？今、どこにいる？」

しばらく考えるような沈黙があった。

「どうかしましたか」

「ユリさんはどこにいるのかって聞いてるんだ?!」
興奮して誠士はどなった。

「お答えできません」

そばいたら掴みかかっているだろう。そんな気持ちを収めながら誠士は低い声で聞いた。

「桃子は無事なのか」

「はい。念のため2、3日入院して様子を見るそうです。詳しいことは、また連絡します」

「どこの病院なんだ？」

叫んだが、そのまま電話は切れた。

「くそっ！」

顔をゆがめて携帯電話を睨みつけた。

気がたつてしばらくソファの回りをウロウロしてみた。

そして、無駄だと分かりつつ何度もユリの携帯電話にコールしてみた。

いずれも出ることはなかった。

「胃洗浄と点滴で睡眠薬のほうは外に出ていってくれると思います
が、もともとの病気があるんで、そっちにどう影響するか分かんない

いんですよ」

処置を終えた若い医者はぶっきらぼうに説明した。睡眠薬の多量摂取という症状は、自殺企図だと誤解されているのかもしれない。

忙しい救命センターで自殺未遂は迷惑な存在の何ものでもなかった。

「今日は病棟に送って様子をみましょう」

「あつ」

このままの説明で終わられたのじゃ納得いかない。

「どんな症状が出るかもしれないんですか」

「あらゆることが考えられます。全身の免疫トラブルを持っているんで、ショックを起こす可能性があります」

この場合のショックという言葉の意味がよく分からなかった。

エリート道しか知らないような医師は、専門用語を理解できない一般人たちのことなど知る由もなかった。

それ以上聞いても無駄だと判断したユリは、桃子を病棟に移す心づもりをするしかなかった。

そんなユリの横で遙は、真っ青な顔で立ちつくしていた。

自分のやったことの重大さを知り愕然としていた。

そして、桃子の様子がただただ心配だった。

「遙さん」

ユリは声をかけた。

「遙さん、今日はもう帰ったほうがいいわ。あなたも倒れてしまう」
「だって」

「桃子も一応は落ち着いたみたいだから」

本当に落ち着いたのかどうかは遙には分からなかった。

「大丈夫。私が付いてるから… 何かあったらまた電話する」

遙はぶるぶると首を振った。

「いや そんなことはできない」

「このままいたら遙さんが桃子にやったことが、皆に分かってしま
うのよ」

「いい」

「だめ」

こんどはユリが首を振った。

「そんなこと桃子も私も望んでない 大丈夫。桃子はこんなこと
初めてじゃないの。…こうなると長丁場よ。キモ据えてかかって」

その言葉に遙は少し冷静さを取り戻した。ユリの目を見つめる。
ユリは優しく微笑むと静かにうなずいた。

誰にも言わないように口止めをして、ユリは遙を帰した。

『さあ、これからどうすればいい』

自失の別離

「ももこっ!?!」

息を切らして荒々しく扉を開けたのは誠士だった。

ベッドに横たわる桃子は点滴をされ、酸素マスクをかけ黄色く浮腫むくんだ表情をしていた。

よく見ると尿バツクがベッドの脇にかけてある。

あまりに姿に、誠士には何かなんだか分からなくなった。

「どういう事だ?」

「腎臓の機能が落ちているんで、不要物がなかなか排泄されないの。しばらく点滴に尿を排泄する薬を混ぜて外に出すんですって」

計算より早い誠士の登場に、とまどいながらもユリは説明した。

「何があった」

「」

「いったい 遙は何をしたんだ? 君たちに何があったんだ?!」
「どうやら遙は帰ってから誠士に話してしまったようだ。」

「静かにして」

冷静にユリは言い放った。

「外に出ましよう」

ユリは百合子にこの一件を報告していた。ひとりで抱えるには問題が大きすぎたし、いい方法が思い浮かばなかった。どうせ暁生に知られている以上、百合子にバレルのは時間の問題だ。

それならば権力も縁故も財力もある百合子に、早くゆだねるほうがいい。

その指針は間違っていなかった。

百合子は顔のきく大手病院の院長に自ら連絡をとって水面下の手配をしたのだ。

ドクターズカーでその病院に桃子を搬送したあと特別病棟へ入れた。院長自らが診察をし、手厚い看護体勢が整えられたのである。優しい初老の医師は穏やかで、安心させる口調でユリたちに接し治療法を説明した。

先ほどの救急センターとは雲泥の扱いであった。

「私のせいなの」

日曜日の誰もいない外来の待合に、ユリたちは腰を下ろした。

「遙さんは…：いっばいつらいことがあったの。遙さんを追い込んだのは私なのよ」

「だからって、どうして桃子に？君と僕とのことだったら、桃子は関係ないじゃないか」

「…そうじゃないのよ」

意味が分かりかねて誠士はユリを見つめた。

「複雑な事情が絡み合ってるの　遙さん　私と誠士さんのことをハッキリと一言も言わなかった。ただ、誠士さんに見捨てられてるとは言っただけど」

「見捨てられている？」

「ええ」

ユリはつらそうに息を吐いた。

「本当は私と誠士さんのこと、分かっているのかもしれないけど言わなかったわ。一番の大きな原因は…もちろんその事だと思う。でも、それに輪をかけて自信を失うようなことが次々と起こったのよ」

「自信を失うこと？」

「例えば　私と比較して世間に認められてない、とか、お婆さまの期待が私にばかり向いている、とか、ああ、与一伯父さまの逮捕も…」

誠士は茶色の目を大きく見開いた。

「遙さん、自分に価値がない、ってすっかりと思い込んでしまったんだわ。…それで…桃子のことは…何かの拍子で知ったんでしよう。私と桃子が親しくしているってこと」

「それが、よく分からない」

「だって、私を懲らしめてやるう、って思ったら、私の大事なものをめちやくちやにしてやるう、って思わない？　それにもし…誠士

さんにも怒っているんだっただけ……桃子はちょうどいい存在だもの」「
誠士は息をのんだ。初めて自分の罪の大きさを実感した。
そして遙の憎しみと痛みを理解したのだった。

「桃子をどうこう、って思いはなかったと思う。ただ 自分を取り戻すためには、どうしても私をひきずり下ろさなければならなかった。そうしないと……きつと、生きていけないから」

ふたりはじつとしたまま、しばらく動かなかった。

「遙さんが心配だわ」

誠士は返事をしなかった。

「もう、終わりにしましょう。私たち」

誠士はその言葉に石になった。

明晰なコンピューターの頭は、そうしろ、という解答を示していたのだが、心の方が全く理解出来ないでいた。

「それしか ないのか」

茫然とうなだれる誠士だった。

「そうよ。……お願いだから遙さんを大事にしてあげて。絶対に遙さんを責めたりなんかしちゃだめ。あなたと私のせいなんだから。だから優しくしてあげるの」

それまで自分のせいだと言っていたユリも、遙を責めないようにする為、誠士にも罪をかぶせた。ユリは立ち上がった。

そして足早にその場から立ち去った。

『これでいい。これでいいの。私は…もうこんな思いをしたくない
… 桃子にもしものことがあったら 私は 』

ユリは心のどこかが重くなるのを感じていた。そう、感情に鍵をか
けることでショックを防いだのだ。

次々と起こる事態に気持ちがついていけず、頭で考えたことだけを
行動に移していくしかなかった。

「すみません、こんなお手数をかけてしまつて…」
桃子の養父、八神光史郎は申し訳なさそうに何度も頭を下げた。

「いいえ…私こそ、連絡が遅れてすみません。気が動転していたも
のですから」
ユリはウソをついた。

連絡が遅れたのは、時間を稼ぎたかつただけだ。

「さつき、ちよつと意識を取り戻したんですけど また眠つてしま
つたんです」

「そうですか。…ほんとに…こんなになるんだつたら私が迎えに行
けばよかつた。全く、いい年した娘が急性アルコール中毒なんて…
自分の体も考えないで、ほんとに」

主治医がうまく言いつくろつてくれたようだ。

こういつた融通がきくのは、百合子の顔のおかげである。院長からじきじきに指名を受けた若い主治医には、外部にくれぐれも本当のことを漏らさないように言いつけられていた。

「本当に先生には、よくしていただいて。こないいお部屋高いんじゃないんですか」

「ええ。でも、あの…桃子さんのお兄さんが、よくして欲しいって言われたそうですよ… お金は気にしなくていいって…」

とっさに誠士の名前をかたった。

「誠士くんが？…誠士くんはここに来たんですか？」

「はい…でも、先ほど帰られました」

「連絡していただいたのですか？」

「いえ」

「おかしいな…どこで聞いたんだろう」

「さあ」

腑に落ちない顔をしながらも八神は、あまり深く追求してこなかった。そして、八神は今夜病院に泊まることになった。

ユリも泊まりたかったが、さすがにこれ以上桃子にかかわるのは不自然だった。

寒椿

桃子の意識が戻ったのは、ほどなくしてからだった。

もともとの持病が悪化していたため、その治療も兼ねて2週間ほどは入院することになった。

ユリが訪ねた日、病院の生垣では寒椿が寒空に下で凜と咲いていた。

「先生が載った雑誌…見ました」

相変わらず少し浮腫んだ顔をして点滴につながっていた桃子だったが、ユリの顔を見ると嬉しそうに微笑んだ。

「えー どちらから聞いたの」

「ジュディさんがこの間持ってきてくれたんです。ジュディさん怒ってた。写真が悪いつて」

桑名農水大臣のパーティに出席してから、ユリはたびたび雑誌などのインタビューを受けるようになっていた。話題の企業ウーマンとして取り上げられていたが、見栄えのよいユリはどちらかというフォトジェニック的存在だった。

「そうなの。あれからジュディに散々文句言われてるの。衣装が悪いだの、メイクがヘンだの、カメラマンが下手だの… 確かに、ジャパンエコノミーの写真は最悪だった」

「ほんと… 何でこのアングル？もっと笑っているトコとかならよかったのに。話そうと口を開いた瞬間の写真を使うかなあ」

「でしょっつ？」

そういつて笑うと、ユリは買ってきた高級チョコレートを差し出した。

「どお？これは食べてもいいかな？」

「大丈夫です…今日は白血球除去療法を受けたし」

マカダミアナッツの入ったチョコを桃子は口にほおりこんだ。

「うーん、おいしい」

「え？白血球？」

「透析みたいにい、血液を取り出してからフィルターで濾すんです。そうすると、悪い免疫物質が少なくなるんです」

「それって大変？」

「うーん、針刺すまでがちょっと怖いかな。でも、その後じっとしてるほうがツライ。透析と違って一時間ですむからラクでしょ、って看護師さんたちは言うんだけど…ラクなんかじゃないのに」

桃子は口を尖らせた。

「でもまあ、そのおかげかちょっとマシのような気がします」

2日目3日目のチョコを桃子は立て続けに食べた。

その様子を見てユリは少し胸をなでおろした。

桃子の状態がどんどん悪くなっていかないかとても心配だったのだ。

「あの」

しばらく話をした後で、桃子はポツリと尋ねた。

「先生って お兄ちゃんと知り合いですよね」

突然の内容にユリは息を呑んだ。

「前にセーターをもらった時、先生は“同じセーターを用意してたんでビックリしたんだ”って言いましたけど　ほんとは何か理由があるんでしょう」

生きてあった花を手入れしていたユリは手を止めて、振り返り桃子を見た。

しばらく目があつた。

そして、もういちど手元に視線を戻した。

「うん。……知ってるよ……　だって、従妹の結婚相手だから」
「遙お義姉さん？」

「うん」

そして、2、3秒後

「そう」と桃子は答えた。

それ以上、桃子はもう何もたずねなかった。

「雪、降りそう」

窓の外を眺めてそうつぶやいただけだった。

愛に基づく心

「こつやって土を耕していると…」

不意に誠士の記憶にドイツでの風景が思い出された。

そう、あの時ユリは嬉しそうに畑の作物をのぞきこんでいた。

『うわあ、大地ってスゴいなあ』

夏の陽射しを浴びたユリの顔は太陽の子供のようで、誠士はその顔が好きだった。

ひとつユリの思い出を思い出すと次々と出てくる。

「どうしたんだ、誠士」

春日裕太は大きな声をあげた

「…え？」

誠士は鍬を持つ手を止めた。
どうやら泣いていたらしい。

「いや、何でもない…」

急いで顔をぬぐったが裕太にごまかしは通じなかった。

「おまえなあ」

下を向いて首を振った。

「何でもない訳ないだろう」裕太はため息をついた。

「いいから話してみる」

しばらくだまっていた誠士だったが、決心して話しをした。

「そっか…」
バラック小屋のストーブを囲みながらジワリと点る火を二人はみつめた。

少し風が出てきたようだ。裕太は誠士に酒を注いだ。

「そんないい女だったか？」

「ああ」

「どこがよかった」

「ん…… ホンモノだけ追い求めてるところかな…とにかく俗物に興味なんかねーんだよ。どうして？どうして？って必死になって真理と方法を探がしてる。あの あがいたようなトコが いいんだ」

「哲学的だな」

「いや、スポ根的だよ。けど、そのぶん説得力があってもものすごく魅力的だけど」

「おまえらしいな」

裕太はそう言ってフツと笑うと湯のみの酒をあおった。

「そんな小難しい女は 大変だろう？ 女は普通に俗っぽいのがカワイイんだよ。峰不二子は究極の俗物だから魅力的なんだぜ。お金が大好きで、贅沢が好きで、エッチで だろ？」

「だいたいおまえはモテるから、今回の女がめずらしかっただけなんじゃないの」

「違うよ。ユリさんはセックスもいいんだよ。あれは心が自由だからじゃないかな。…だから困るんだ」
少し赤くなつた顔で誠士は言った。

「ひゅ〜！ どんな感じよ」

「ん よく分からない。だって、まだ 途中なんだ」

「まだ？」

誠士はうなずきながら答えた。

「そう。だってまだぜんぜんし足りてない」

「ふっ！おまえ、セックスが欲求不満だけじゃねーの！そこらで女ひっかけるでも風俗でも行くでもしたらダメなのかよ？奥さんもいるのに」

「だめだ。おれはユリさんとだけしたいんだ」

誠士は力を込めて言った。

「じゃあ…」

不敵な笑みを口元に浮かべて裕太は続けた。「とり戻すっきゃねーな」

「取り戻す？」

「ああ。男の下半身をナメんなよってトコ見せてやれ。いや、舐めて欲しいんだけどホントは」

「ははは」

裕太と話していると気持ちが晴れてくる。

誠士は長野にやってきてよかったと思つた。

「おまえのやりたかった事は何か考えてみる。とりあえずユリさんとやらの事を考えるな…それより彼女と共鳴したものがおまえにあったハズなんだ。それを明らかにするんだ」

「共鳴？」

「ああ。生き方や思想的なものじゃないかな… その哲学的な感じは」

誠士はだまりこんで考えた。

「とにかくシンプルにするんだ。奥さんには悪くてもおまえの気持ちやなすべきことを優先しろ。じゃないと皆が迷惑する」

「もし それをして人が死ぬようなことがあつたら？」

裕太はじつと誠士の目をみた。

「ああ」

静かに裕太は答えた。

「おまえが直接その人を死なすようなことはダメだけど、結果的にそうなってしまうのなら、それは仕方のないことだ。」

この世に生きていて人を傷つけるのは、ある程度は仕方のないことだ。それを恐れるより、どんな結果になっても受け止められる心構えでいることが大事なんじゃないのか」

「受け止める か」

不意に図書館で本を一心不乱に読んでいるユリの姿が目につかんだ。

“楽しいボイコットの方法って知ってた？大企業の製品に対する海

外のポイコットポスターってすごいショッキング！ほら、ここに書いてある”

“海外では利益を株主じゃなくって社会問題なんかに再投資する企業が話題ですって”

そうだ… ユリはこの世界を少しでも変化させたくて

“でもやっぱり愛が必要なんじゃないかなあ… 宗教は自分の神さまだけに自分をささげるけど、本当の神さまって感じるものじゃないかなあ。目に見えるような二次元的な神さまなんておかしいよ”

“努力しないからダメなんだ、とか前世の行いが悪いから悪い境遇だとか、そういつて見下す人は何も分かっていない。本当は厳しい環境じゃ、その人は耐えられない器だから、恵まれた環境にいるんだって考えないのかしら？”

そう。いつもユリはこの世界の真理を確かめようとしていた。

“だから私は自分の心には正直でいたい。人を傷つけるかもしれない、つらい立場に陥るかもしれない。けど、後で後悔するよりは納得できる。”

心売り渡して資本主義の原理や長いものに巻かれるのは我慢が出来る。愛に基づかない行為はしないのが絶対に正しいよ。たとえばこの世で認められなくってもね”

そう言っていたユリ。

そんなユリが自分との別れを決めたのはどうしてか。

桃子の小さな顔が思い浮かんだ。

変調 1

「本当にそんな予算が認められたのか？」
驚いて誠士は西村雄介の顔を啞然と見た。

「ええ。社長の企画と、女性部の企画をタイアップさせてもった
々的にするらしいですよ」
「しかし…」

あまりに大きな金額が動くのが誠士はまだ信じられなかった。

「本当ですよ。これは会長じきじきのお達しですから」
「会長の？」

百合子からそんな通達が降りたのを、なぜ雄介は知っているのだろ
う。

百合子はやはり雄介をユリの花婿候補としてみているのだろうか、
そう思うとやりきれなかった。

「忙しくなりますよ。恐ろしいことに女性部はこのドラマの主役を
すずかわたくみ
涼川拓己にするなんて本気で検討してるんです」

涼川拓己は超アイドルグループのメンバーであり、単独でも活動し
ている美しい青年だった。最近は海外の作品にも出演したり国際派
アクターの声も高い。

「あんな人気者10年先までスケジュールがいっぱいなんじゃない
か」
「ですよねえ」

ふたりは笑った。

あの日、裕太に言われたことを誠士は自分なりに考え行動していた。彼女と共鳴したものがおまえにあったはずなんだ。それを明らかにするんだ

それは仕事で表すしかないと思った。
今自分が出る。今自分が出来ること。したいこと。

大々的に社会的企業の認知を広め、多くの人を引き入れること。皆が起こせる具体的方法をPRすること。

この2点をマスの力を使って目一杯宣伝するつもりだった。そのために誠士は、これで会社を辞めてもいい、と本気で考えていた。

その覚悟はハンパではなかった。

それらの企画を発表した折、西村雄介からこの話がおりにきたのである。

「ごめんなさい 本当にごめんなさい！許してください」
そう言ったまま、遙は床に手をついてうなだれてしまった。

「やめて！お義姉さん ほんとに」
困って桃子はベッドから手を伸ばした。

何度も病院に来ては、なかなか入れず帰っていく毎日の遙だったが、

今日こそは覚悟を決めて病室までやってきたのだった。
戸口で迷っていた遙の姿をみつけた桃子が、嬉しそうに声をかけた
後の出来事だった。

「ごめんなさい、ごめんなさい」
遙は泣きながら繰り返すばかりである。

「お義姉さん ほんともう、大丈夫ですから。そんな風にされたら困ります」
ぎこちなく起きあがると、桃子は遙の手を取って土下座をやめさせた。

「私が悪いの 私が 桃子さんに、すいみ」
「ちがうんです！」

桃子はさえぎった。

「私はもともと免疫の病気を持っていて、これは、お義姉さんがどうこうとか全く関係ないんです。そろそろ入院して治療しなきゃならないような状態だったんです。」

なのにこんなによくしていただいて。お部屋も特別室だし、お兄ちゃんとお義姉さんがお金を出してくれるから、私すごく助かってるんですよ。本当にありがとうございます」

くしゃくしゃの顔のまま遙は桃子を見上げた。

「ももこさん」

桃子はにっこり笑うと大きく首を縦にふってうなずいた。

しかし2週間がたっても桃子は退院できなかった。

自己免疫の炎症反応がまだひどかったのと、ステロイドを多い目に使っていたので感染が心配されたからだだった。腎臓の状態も悪かった。

遙がほぼ毎日ついて看病していた。

状態が悪くなっていた桃子だったので、誰かつきそいが必要だった。

男手の八神に若い女性である桃子の看病はむずかしかったし、仕事を持っているユリや誠士は密につきそえない。罪悪感からだとしても遙の行為は助かっていた。

桃子の深刻な状況に、ユリの神経は参りそうになっていた。

下手に医者「…の可能性もあります」という言葉を聞くもんじゃないな、と後悔もしていた。医者というのは、ほんの1%の確率でも最悪の事態を患者の家族に告げる。そうやって予防線を張るんだらう。

「ちょっとでいいから食べて。ほら、ユリの好きなきのこのリゾットだよ」

ジュディは心配そうに声をかけた。

「うん…」
スプーンを口に運ぶが胸につかえてすぐに食べられなくなってしま
う。

「だめだよ ジュディ ごめん」
食べられないのが悪いと思う気持ちと、桃子のことがつらいのとで、ユリは下を向いて泣き出した。

「いいの、いいのよ 無理して食べなくても」
ジュディはユリの頭を優しく抱くと、涙をふいてやった。

「もう休みましょう。ね、疲れてるのよ。今夜はずっと私がついていてあげる。好きなだけ甘えていいから だいたいユリは頑張りすぎなのよ」

そうやってジュディはユリの髪にふわりと口づけた。

バスタブに湯をはってプチグレンの香りがするバブルバスを入れた。甘酸っぱい柑橘系の香りが部屋まで漂うと、ジュディは寝転んでいるユリを起こし手をひいて浴槽にいざなった。

「今日は何もしなくていいから。私が洗ってあげるからね。ユリはじーっとしてて」

「うん」

そのまま服を脱がされ、浴室の泡湯にジュディとともにあった。いい香りがしてユリは少し気分がよくなってきた。

背中から抱きすくめるようにして湯につかっていたジュディは、スポンジに泡を立てるとユリの体をやさしく洗いだした。

「やっぱりパンパンだわ」

「えっ？」

「ここよー」

ジユディはぬめぬめとしたユリの乳房をつかんだ。
そしてマツサージをするように下から上へとくるくる回した。

「ほんとだ。胸張ってる　排卵期かな」

「そうなの？でも、雑誌の写真のスーツ、みんな胸んトコしわ寄ってたわよ。あれってユリの胸のサイズが大きくなって服が小さいからじゃないの？」

フレタホルテ
高級既製服は合わないんだから、もうそろそろオートクチュール高級注文服にしたら？あたしオーダーしてあげるわよ」

そんな面倒なこと今は考えたくなかった。

大体オートクチュールは仕事で着るものであって、自分が普段から身につけるものという概念はなかった。

「うん　また今度ね　今は考えるのしんどい」
「ああ、ごめんね。でも、いい張り具合、ふふ」

そう言ってジユディは少し興奮したようにユリの乳房を撫でまわした。

ジユディのマシユマロのような乳房と違ってユリの胸はゴムマリのようだった。

形状だけでなく性状も違うのだから、個人差とは面白いものだ。

確かに、なんだか胸が最近きつい。女の体ってよく変わるものだ。誠士に抱かれてから、確かに体が変わった気がした。

より女らしく、胸が膨らみヒップは丸みをおびて

不思議：

楽しそうにジユディはユリの全身を洗った。
最後にシャワーをかけたとき、ぬるぬるとした泡たちは全身を舐めるように這うと、名残り惜しそうに落ちていった。

変調 2

三月になった。

この次期は年度末なので会社はどこも忙しく、ユリはコンサルタン
ト会社に加えて、株主総会の準備に入るようにも言われていた。

「桃子の様子がおかしいって？」

「なんていうか… 簡単なことでも分からない分らないって泣い
たり、お金の心配ばかりしたりするの」

病院のエレベータ口までユリをむかえに来ていた遙が不安そうに早
口で話した。

「お金？」

「特別室はお金がかかるから大部屋に変えてくれ、って。主治医に
そう伝えたら“治療上個室が必要だと判断するから。その場合は差
額のベット料金はかかりませんから”って説得してくれたの。もし
たら一応は安心したみたい」

「じゃ今は他の個室に移ったの?!」

「ええ」

遙が困ったようにうなずいた。

「他にも持っている貴金属は全部売ってお金にかえて、とか、貯金
はいくらあったかしたら、とかそんなことばかり」

「どうして、そんなことを？」

「分からない　お金は心配しなくっても大丈夫、誠士さんがちゃんと桃子さんのことはみてくれるから、って言うんだけどダメなのこの間なんて看護師さんに“ちゃんとして、って言ったでしょ！”で大声でどなったの。薬のことが分からないから、整理を頼んだのに忘れていた看護師にキレたのよ」

信じられなかった、あんなしつかりとした優しい桃子が。とにかく会うしかなかった。
ナースステーションから近い場所に桃子のネームプレートが入った個室があった。

桃子はベッドに横になったままぼーっとしていた。無表情ともいえる。

ステロイドの副作用で顔が腫れ、喜怒哀楽も測れなかった。

「ももこお？どお？」
なるべく普通に声をかけてみた。

「せんせえ?!」
不意に嬉しそうな顔をして起き上がった。

「仕事は大丈夫？最近雑誌にのってないけどお仕事なくなったの？」

「ううん。今はモデルじゃないから、毎月のるわけじゃないよ」

「そっか…　じゃあ今月はお給料減っちゃうね。先生」
「？」

「大丈夫？生活していける？」
おたふくのように腫れた顔で、おびえるようにたずねる桃子は別人のようだった。

「うん」

小さく何度もうなずきながらユリは気を取り直すように返事をした。

「大丈夫。あのねー 6月に株主総会を主催するんだけど、その用意をしてる私には特別手当がつくみたい。」

「すごいよー、大株主なんて人たちに会う機会なんてないからさ、私
どきどきしちゃって…もつとも私が筆頭株主なんだけど。けど親族
だってバレちゃったからね」

話をしているうちに桃子の表情はどんどん歪んでいった。

「どうした？…桃子？」

「あたし ダメだ 分からない」

桃子は頭を両手でごんごんと叩いた。

「バカになっちゃったんだ！もつと出来たのに！先生の話も分
つてたのに！」

そのまま両手をグウのまま顔を被うと泣き出した。

「もうダメだ… 先生の話まで分からないなんて、生きてても意味
がない！」

「ももこっ！」

たまらなくなつてユリは桃子を抱きしめた。

「そんなことないっ！生きてて意味がないなんてない！　いまは調子が悪いだけ。大丈夫、絶対によくなくなるから！」

あ　あたしの言ったことなんて分からなくていいから！ヘンなむずかしいことばっか言っでごめん。分からなくって当然だよ。だから大丈夫、大丈夫……」

ユリと桃子は抱き合っ泣いた。
そんなふたりを見て、遙も涙をながすだけだった。

「脳神経にも自己免疫がダメージを与えているのかもしれない」
主治医と院長はカンファレンスルームで遙とユリに説明した。

「脳に？」

ユリは真っ青になった。

脳にダメージを受けたら、もうおしまいではないか？

「ステロイドの副作用かもしれないし、ハッキリとは分からないんです」

「分からない、分からない、って、先生たちがそんなんなら、私たちはどうすればいいんですか！」

ユリはキレた。

「この病気は難病で治療法が確立してませんから千人いれば千通りの病状があつて……」

「だから、どうするんですかっ?!このまま桃子はどうなってしまう

うんですかつ！」

医者のうちくも病気の講義も聞きたくなかった。知りたいのは桃子のことだけだ。

「とりあえず、ステロイドの量を減らして様子をみます。それで意識状態がよくなればステロイドの副作用だと考えて量を減らしていきます」

「それでよくならなかつたら?!」

「ステロイドの大量投与をします」

今でもかなりの量を投与しているのに、まだ増やすつもりなのか？
いったい何をするつもりなのか？！
ユリは叫びだしそうだった。

まんじりともしない夜だった。

固いつきそいベッドは不安定で寝心地が悪く、横になった者を寝かせないようにする悪意さえ感じられる質感だった。ユリは苦しくて何度も寝返りをうった。

そんなユリを尻目に桃子はベッドですやすやと眠っていた。
そして何時か分からなくなった頃のことだった。

「ツクヨミ……」

そう桃子がつぶやいた気がした。

しばらくして何も聞こえないので、寝言だったのかと思った。また聞こえた。

「ツクヨミ」

「つくよみ？」

ユリは聞きかえした。

「月が…明るい」

「ほんとだ」

白いカーテンを通して満月の光が病室にさしていた。ユリはカーテンを開けてみた。

西向きの窓から異常に明るい満月が顔を覗かせた。

「うつわーすごいお月さま。満月だ」

「きれいですね」

「うん」

しばらく何も言えず、ふたりは月を見ていた。あまりにもまぶしくて月自体が光源でないことが信じられなかった。

「…先生はツクヨミ、みたいですね」

「つくよみ、ってあのアマテラスの弟の？」

「はい。妖しい貴公子？それとも月経を司るセクシユアルな女神？…豊穡の女神を殺した激しさ、曆（こよみ）をあやつるインテリジェンス…」

無表情だった桃子の口にわずかに微笑が宿った気がした。

「うちの神社はアマテラスの弟として月読命つきよのみことをご神体として祀っています」

「うん。昔、おじさんが教えてくれた。イザナギから生まれた、アマテラス、ツクヨミ、そしてスサノオの三きょうだい」

なつかしそうにユリは目を細めた。

「アマテラスもスサノオもエピソードがきっちりあって有名ですけど、ツクヨミって夜を統べる神くらいしか文献にもないんです…ナゾの神さまだと思いませんか？実は性別もはっきりとしてないんですよ」

「そうなの？」

「はい」

そう言うと桃子はまぶたをとじた。

そのまま眠ってしまったのかと思った。しかし、また口を開いた。

「月読命の“月読”とは“月を読む”つまり“月を数える”ことからきていたと思います。

だから月読命は農業で大切な暦と関係あるということで、農業の神様としても祀られていました。…先生、農業の仕事やってるんですよ？」

理路整然と語る桃子にユリは驚いていた。

どこに異常があるのか、昏間のことのほづが夢だったのかと錯覚しそうだった。

「最初は農業関連の仕事をしてたけど　今は違う部署に転属させられてしまったの。本当はいたかったんだけどね…そっちの仕事は今はお兄さんがしてるよ」

「そっか…　でもお兄ちゃんはアマテラスだよ。けど神話とは反対にあのアマテラスはツクヨミに焦がれているけど」

桃子はふたりの想いを、手品のように白い空間に取り出してみせた。ユリの胸の奥が静かにざわめきたった。

「　違うよ」

冴え冴えとした月光のようにユリは答えた。照らされた彼女は驚くほど美しかった。

「やっぱり　ツクヨミにとってアマテラスはまぶしすぎる」
ユリは瞳を閉じた。

「暖かくってキラキラしてて…」

「ううん。私にとったら先生のほうが美しいんです。今日の月のように輝いた存在です。太陽は眩しすぎて見れないけど、お月さまの輝きは見れる。」

それって大事…ジャパン・エコノミーに出て、いずれは大きな経営者になる…そんな人が私の先生。ふふ、嬉しいな」

桃子は目をつぶったまま微笑んだ。

「だから…アマテラスのほうもほうっておけないんです」

「でも、アマテラスとツクヨミは対照なの。どんなに頑張っても昼と夜、相容れない世界のふたりは絶対に一緒になれない」

「その世界を超えて」

桃子は哀願するように言った。

「…私はスサノオ。アマテラスもツクヨミも手をやくほど」鼻で桃子は笑った。

確かに、桃子にはユリも誠土も昔から振り回されている。

「もう少ししたら高天原たかまがはらに行つてまたダダをこねるの。もういちど二人に会いたいから」

「？」

意味が分かりかねた。

しかし桃子はそれ以上は何もしゃべらなかつた。

そして深い眠りに落ちた。

変調3

誠士には信じられなかった。

あの涼川拓己がオファーを請け負ってくれたのだ。

ハリウッドへの出演があるという噂を聞いていたので可能性はない
と思っていた。

誠士たちは2番候補のタレントを思い描いて企画を進めていたのだ。
ファン気分であげたオファー計画など、今までの商社ならバカにし
てマトモに取り合ってはくれなかっただろう。そう、「可能性はな
い」という一言でだ。しかし、女性部の突撃力は、その常識を覆し
た。

誠士は脱帽した。

「本当にわたしでいいんでしょうか。ここは女性部にまかせたほう
がよいですか」
不安気味に誠士は美雪に伺った。

「社長の企画じゃないですか。この企画の趣旨を社長ほど話せる人
はいないんですよ！今日は勝負なんですからきっちり仕切ってくだ
さい」

横から咲田麗華が喝をいれた。

涼川拓己の事務所、オフィス・カサンドラのロビーに誠士、雄介、
美雪、麗華の四人が代表として訪れていた。

グリーンリングと高倉商事女性部との合同プロジェクト。美雪と麗

華は女性部の代表。

今日は涼川拓己と事務所の社長との顔あわせだった。

「うっわー社長、僕、緊張してきましたよ。本当に涼川拓己に会えるんですかね」

西村雄介が興奮気味に体をゆすった。

『そんなこと言っなよ！おれまで緊張するじゃないか』

「お待たせしました。どうぞこちらへ」

受付で対応してくれた女性がやってきて四人を奥へ案内した。狭い廊下をぬけて応接ルームへと促された。

ブルブル…

部屋へ入る直前に誠士の携帯電話が鳴った。

「あ、先にいつててください」

ユリからだった。

「はい」

「誠士さん！？すぐ来て！桃子が急変したの」

「え?!」

「呼吸困難になって さっき人工呼吸器をつけたのよ。痙攣けいれんもしてて、なんだか出血とかも とにかく早く来て!」

「け、けど 仕事が」

今がプロジェクトの一番の大勝負だった。

今日の面談が成功するか失敗するかで、誠士の夢も左右されるのだ。

「何いつてるの?! ももこが死にそうなのよ! 仕事なんてやってる場合じゃないでしょっ」

「早く…早くきてよっ!!!」
ユリの悲鳴のようだった。

「わ、わかった」
誠士は電話を切った。

決意をして踵かかとを返したそこに、じっと誠士をみつめている女性がいる。

「どうされました?」

湖面のように静かでそれでいて炎の情熱を秘めた視線に、誠士は一瞬慟哭を忘れた。

生と死を超えた別次元のオーラが、誠士の心を冷やしていくようだった。

「あ あの わたくしグリーンリングの高倉と申します」
美しいその女性の目から視線をそらすことができなかった。

「わたくしはオフィス・カサンドラの大棟おおむねです」
「こ、今回はわが社の申し出を検討いただけるとのことです。お礼を申し上げます」

頭を下げながら『この人が事務所の社長? 女性だったのか』。誠士は驚いていた。

ドル箱スターを鮮やかに使い、海千山千の芸能界で、今最も成功しているのが若く美しい女性だという事実だ。

「よろしいの？」

「はい？」

「何か急用があったんじゃないんですか」

誠士は驚いて大棟社長の顔をじつと見つめた。その瞬間だった。

「すみません、遅くなりました」

後ろの廊下から聞き覚えのある声がして、見覚えのある顔が現れた。

涼川拓己だった。

テレビ画面で、映画で、雑誌で、看板で　そう、何度も見た顔。日常的に接してる魅力的なその造作は馴染み深く、とても初対面とは思えなかった。

しかし目の前にある、美しい顔、優雅な肢体、涼しげな声、そして引き込まれそうなオーラは、妙に現実感がなく……　誠士はよく分からなくなってきた。

ただ拓己が登場してハッキリしたことがある。

『もっひきかえせない』ということだ。

「取りあえず　中に入って」

大棟社長は拓己を応接室に促した。

同時に誠士の足は勝手に応接室に向かっていた。

パタン

三人が入ったあと、静かにドアは閉まった。

桃子が息をひきとったのは午前11時まえだった。

臨終に立ち合ったのはユリ、遙、八神だった。あまりにも突然の出来事に三人は何が起こったのか全く理解が出来なかった。

八神は職員に言われるまま死後の事務手続きを行い、ユリは部屋の後片付けと葬式の準備をし、遙はぼうと桃子の遺体に付き添っていた。

深夜はしっかりとした口調だった桃子が、起きぬけに「息が出来ない」と苦しそうに首をかきむしったのが最後の言葉だった。

みるみる色が悪くなり気管に管が通されたが意識は戻らず、そのうち痙攣を起こした。一時間ほどすると皮膚がどす黒くなり、医師たちは「DICだ」と大あわてしたが、治療する間もなく血圧が低下して心臓が停止したのだ。

自己免疫の攪乱かくらん

最後には自分の赤血球や止血機能までも攻撃したのだ、と医師は言った。

出血が止まらないのに、血液凝固する、という相反する状態で死んだ桃子。体は紫色の肌をしていたが顔だけは綺麗な色だったのが不思議だった。

「菜の花畠に、入り日薄れ…」

ユリが何かをつぶやいた。

霊安室に横たわる桃子は眠っているようだ。

「見わたす山の端、霞ふかし」

そのつぶやきが、朧月夜を歌っているのだと分かるのに逢は時間が
かかった。

うつろな瞳で口ずさむユリ。

「春風そよぶく、空を見れば
夕月かかりて、におい淡し」

春の香りが漂う3月。

生命が芽吹く季節に去っていった桃子に、誰もが違和感を感じずに
いられなかった。

「里わの火影も、森の色も
田中の小路を、たどる人も

蛙のなくねも、かねの音も
さながら霞める、朧月夜」

どんなに月が光っていても

今日からみる月は朧月なんだろう。

涙で…霞んでいるだろうから。

来訪者

浅間山の緑が濃くなり空とのコントラストがはっきりとしてきた6月。

軽井沢駅は本格的な観光シーズンを向かえ、多くの人でごったがえしていた。

ユリは改札を出てくる人を注意深くチェックしていた。

少し大きめのポストンバックを抱えて、ベージュのスーツを着た咲田麗華を見つけたとき、ユリは苦笑いをしてしまった。

リゾート地にまでスーツを着てくる麗華が、あまりにも「らしかった」からだ。

観光気分のカップルや奥様方のきゃあきゃあいう声の中、場違いな麗華は不安そうに改札を出てきたが、ユリの顔を見かけるとホッとしたように駆けてきた。

「お久しぶりです！ユリさま、なんだか変わられましたね。すぐに分かりませんでした」

「咲田さんはすぐに分かりましたよ」

麗華のバックをサッと奪い取ると「こっちはです、どうぞ」と先導した。

チェックのワンピースを着て大きな帽子をかぶったユリ。髪も伸びて肩に届いていた。

軽井沢のイメージにはぴったりだったが、動作は紳士だったのでギヤップが大きかった。

「ワンピースよく似合ってますね。かわいいです」

「ありがとうございます。宿のマダムが好きなんです、こういつの相変わらず女性にモテる、麗華は胸のうちで小さくあきれた。

しかし意に沿わない服であっても着こなしてしまうユリは、さすがだと思った。

リゾートワンピースを着てもユリの立ち姿、着こなしは美しかった。そして…色っぽい。

小さな軽自動車に麗華と荷物を詰め込むとユリは楽しそうに窓をあけて走り出した。

今はとてもいい季節である。

ユリは会社を辞めた。

桃子の葬式や諸々の行事が終わると東京を離れ、この軽井沢にやってきたのだ。

誠士や遙のそばにいるのが苦しかった。

臨終に立ち会わなかった誠士への確執、桃子の死への引き金をひいた遙、そしてその遙を追い詰めた自分… また、社会に挑み闘うような仕事 すべてが苦しかった。

暖かい所に行きたかった。

だが、長期定住となると田舎は馴染むのにそれなりの苦労がある。

そうご近所やお付き合いといった努力だ。

暖かい場所で候補にあがったのは、そういった土着の場所しかなかった。

心疲れていたユリには、人と接する努力をする元気はなかった。

その点、軽井沢は別荘地であり観光地だ。

よそ者であつても気がラク、心を慰められる芸術館やイベントも充実していたし、人々も文化と経済を上手にまわしている気風があつた。

ユリがやってきた4月はまだ雪がところどころ残つた寒い日だった。

「もうスキーは出来ませんけど、これからは桜やしやくなげがとっても美しい季節ですよ。いい時期に来られました」

宿の夫人は、^{マダム}にここにこしながらユリを迎えてくれた。

旧軽井沢に高倉の別荘があつたのだが、ユリは北嬢恋にある夫婦が経営するペンションを選んだ。

別荘でひとりは寂しすぎるし、旧軽井沢にある気取つたホテルや旅館はニガテだったからだ。オーナーの人柄が自分と合えばペンションのほうが暖かいような気がしたのだ。

そしてユリの選択は正しかった。

付かず離れずで見守ってくれたオーナー夫妻。

素材を生かした素朴な料理、美しい植物を身近に配する生活はユリにとって心慰められる時間となつていた。

恐らく、母の美雪や祖母の百合子がオーナーにユリの世話を頼んでくれていたのだろう。そんな肉親の愛情もユリには嬉しかった。

ひとしきり軽井沢を満喫すると、ユリは少しずつペンションの手伝いやハーブ園の世話をするようになっていた。それは心のリハビリになっていた。

「ここまで来ると人も少ないですね」

国道を走る車窓から周りを見渡しながら麗華は叫んだ。風が音を流してしまうからだ。

「はい。駅周辺はもうごったがえしてますんで、つくづくこっちに
してよかったな、って思います」

サングラスをしているユリだったが、わんぱく少年のような顔をしているのが麗華にも分かった。

「きつと咲田さんもゆっくり出来ると思います」

そういうとユリはアクセルを更に踏み込んだ。

山からおりてくる風が、ふたりの髪を大胆にとかした。

麗華の滞在一日目はペンションの周りをぐるりと散歩するくらいで、ほとんど外へ出なかった。ハーブガーデンでお茶を飲んだり、ペンションのピアノを弾いたりして過ごしていた。ユリがそうしたからだ。

二日目になると、植物園や美術館をさらりと廻った後、NPOの事務所に案内された。

軽井沢の自然環境を守る活動や勉強会をしているグループだった。ユリはその勉強会に顔を出しているようだった。

麗華はグリーンリングの仕事からもあり、とても興味を惹かれた。

ここ軽井沢は、ハイソサエティの避暑地から観光ひいては定住という、ブランド化に成功した稀有な町。

そして市民意識が高いという事実。この意識の高さの秘密を是非知りたいと麗華は思うようになっていた。

「ふふ」

少し遅いアフタヌーンティを前にしながら麗華は笑った。

町中から離れている予約制のカフェは、人であふれかえることもなく丁度よい客足だった。

「どうしたんですか？」

「だって、ユリさまらしいんですもの」

アッサムを口に運んでから麗華はカップを置いた。

「軽井沢を選ばれたのは無意識からかもしれませんが、やっぱりしたいことを基準に選ばれたんですね」

「したいこと？」

「気持ちよく文化的に生活できる場所」

その言葉にユリはしばらく返事ができなかった。

「ストレスが少なそうかなって思って」

「それなら市民活動のNPOに顔だしたりしませんよ」

「そりゃ、最初はぼけーつとしてました。けど、都会人って長いことぼけつとする能力がないんです」

「ええ」

麗華は笑いながら答えた。

「幸いここはコミュニケーションがしつかりしてますからマダムに付き添って習い事とか山歩きとか、することが結構あったんです。観光地ですからお客さんもイベントに参加する気風があつて私のようなそ者も入りやすかつたんです」

「おしゃれですしね」

「はいいい それ、大事です」

尻上がりのイントネーションで答えたユリに、ふたりは顔を見合わせて微笑みあつた。

「ここでも問題はいろいろとありますが、レベルとしては高いんと思つんです。それって…どうしてだろうな、って」

「だから市民団体に？」

「まあ、そんなトコです」

ユリは照れくさそうに笑つた。

「高倉でやる仕事みたいに、社会活動一直線、ただけじゃ、ちょっと疲れちゃう。ここはそれなりに俗に息抜きしやすい環境が整っています。」

エステもあるおしゃれなカフェやハープ、よき昭和レトロな建物と並木道。何より時間がゆっくりしてます。ま、仕事してないから

ですけど」

スコーンにジャムをつけてユリは口に放り込んだ。

「あ、おいし…」

「うーん、なんか大事なヒントかも　グリーンリングの山村交流をもっと魅力的にするためにユリさまの言われたこと、なんか大事な気がする」

「うまくいつてないんですか？」

「うーん…　コーディネーター自体がまだ分かってないですから。土地土地の特徴に合わせるのはいいのですが、もっと根本的なニーズというか人の心理というか、そういうのが出来ていない気がするんですね」

「うーん」

ユリも考えこんでしまった。

ここ2ヶ月ほど軽井沢で生活してみて、色々と思うことがあった。気づいたこともあった。

それは都会では決して気づかないようなことだった。

「あの」

麗華は言いにくそうに口を開いた。

「ユリさまに今更こんなことを申し上げるのは何なんですけど…今、すごいプロジェクトが高倉で動いてるんです」

共鳴する魂

「今、すごいプロジェクトが高倉で動いてるんです
大衆の媒体^{マス}を使って人々を動かすっていう企画なんです」

「マスを使って人々を動かす？」
真剣な目をして麗華はうなずいた。

「第一弾としてドラマを作るんですけど、その中で社会のためになる仕事をしている人、会社や団体を登場させてドラマに織り込んでいきます。」

“このドラマはフィクションであり実在の人物や団体とは関係ありません” っていうのを “ドラマはフィクションですが、一部は実在の人物であり団体です” ってことなんです」

ユリは目を丸くした。

「と、いうことは社会的価値のあるものにスポットを当てるということ？」

「そうです。そしてそこを援助するには “ここに寄付してください” とか “活動に参加したい人はこうしてください” ってテロップを毎回番組で流します」

「ええ?! すごい」

ユリの中で何かが溶けていくのを感じた。
そう。いつもイライラしていた固い何か…

「ピックアップする団体も大変なんです。認知だけでいい、ってト
コもありますし」

「でもドラマなんですよね？」

「ええ」

麗華は熱い視線でユリを見つめた。

「このドラマの主演、涼川拓己に内定しています」

「うそっ！」

「本当です。……涼川拓己に決まるのに大変な苦勞がありました。
けど高倉社長がものすごく頑張ってくれたんです」

誠土の名前が不意に出てきてユリは動揺した。
今まで封印していた熱いものがこみ上げてきた。

「この企画の発案は高倉誠土社長です。商事のみながぶっ飛ぶよ
うな企画をなぜ彼が出したのか分かりません。けど、その頃女性部
で出されていた“グッド・ニュースコンテンツ”に偶然にも重なる
ところがあったのです」

聞いているだけでユリの胸はドキドキしてきた。

「グッド・ニュースコンテンツ？」

「女性部が企画していたプランで、いいニュースだけを集めてCS
放送と新聞を作ったらどうか、って話でした。新聞自体を作るの
ではなく、既存の新聞に折り込みで入れるか紙面を買うという形で、
でしたが」

「でも、それじゃどこで儲けるんですか？」

「いずれも高倉商事一社の提供でいくつもりでした。採算度外視です。今回、百合子会長の大博打おおはくちです。…社会の流れをいつきにエコーギーや社会的企業に傾かせる、その時、いち早くその分野のリーダーとなっていること。そこで利益を得る、ということでした」

「そんな上手いくいくかしら？」

「CSや新聞じゃ弱かったでしょうけど… 誠土社長の企画まで、でっかけりや分かりません。案外イケるかもかもしれません。ドラマだけじゃないんです。第二、第三と攻撃をしかけます」

「う　　なんかドキドキしてきた」

「でしよう？」

得意げに麗華は笑うと、サンドイッチをつまんだ。

「だから、ね、ユリさま、帰ってきてくれませんか」

「え？」

カップを持ったままだった、ユリの動きが止まった。

「この企画、本当はユリさまのものじゃないんですか？」

「いえ！違います」

「私はユリさまが誠土社長に、どこかで話されたものじゃないか、
って思っていました」

「違います」

ユリは青ざめながら首を振った。

「そんなこと ぜんぜん知りません。だって私、びっくりしましたもの。今、咲田さんから聞くまでぜんぜん知りませんでした」

「そうですか」

西日が少しずつ山に落ちていこうとしていた。店内も人影がまばらとなってきた。

「帰ってきてください」

麗華は哀願するように声に力をこめた。

「この企画、ユリさまがいないと成功しないと思います」
「どうしてですか？」

「このプロジェクトこそユリさまですもの」
ゆがんだ表情でユリは麗華を見た。

ユリは誠士を感じた。

桃子の最期を犠牲にしても成就させたかったプロジェクトは自分とつながるエッセンスなのだろうか。
ユリは混乱していた。

「よく分からないけど… 無理だと思います」
「え？」

「今の私には無理です」

口を開きかけた麗華だったが、ユリのつらそうな顔を見ると何も言えなくなった。

その時麗華はハッキリと知ったのだった。

ユリが誠士のことを深く愛していることを。

夢の形骸

『会いたい会いたい会いたい会いたい』

誠士はベッドの中でもがいていた。

ユリはあまりにも遠かった。

目の前から消えた今、ユリの存在は幻影のような気がした。

…キスをして…そのまま唇でユリの顔をなぞる…

髪に手を入れると指の隙間からはつややかな糸が流れ…甘い香りが漂った。

なつかしい、母の胸でかいだあの甘い匂い。

腰から背中に向かっての女性独特の曲線をなぞるだけでもうっとりした。

とりわけユリの曲線は美しく、誠士の手はその造詣を何度も辿った。

『せいじ…』

左の乳房に右手を置くと半開きになったユリの瞳をみつめ口づけをした。

『?!』

その瞬間、悲しみがなだれこんできた。

『ももこ…!』

ユリの悲痛な叫びだった。

胸がふさがるような苦しい悲しみだった。

「うっ…」

目をあけた誠士に見えるのは、涙でぼやけた天井だけだった。

本当に抱き合って泣けたらどんなに慰められるだろう。
なのに誠士はひとりだった。

遙も去った今、どこまでもひとりだった。

もう桃子はいない…

そして ユリも…

桃子が連れて行ってしまったのだ。
棺の中で桃と百合の花に埋もれて眠る桃子は、信じられないくらいに美しかった。

誠士は、後になって分かった。

百合の花はユリの心だったのだと。

「大丈夫ですか？夏バテ？」

麗華が心配そうに誠士を覗き込んだ。

9月も下旬になるというのに東京は残暑が厳しかった。

それに輪をかけて誠士は仕事にのめりこんでいた。

そうすることで何も考えずにすむようにしたかった。

ドラマの撮影が始まり誠士たちはロケに随伴するようになっていた。監督や撮影隊、俳優に口を出すことなどなかったが、最初のうちは出来るだけ顔を出しておこうと思っていた。

今回のドラマは半ドキュメントでもあり、実在の団体とのコーディネートもグリーンリングが担っていたからだ。

「高倉さん、もう今日は帰っていいですよ。ピースホステルの皆さんには、ちゃんとお願ひしますから。大丈夫ですよ」

涼川拓己が小声で誠士に声をかけてきた。

撮影に気をとられて、誰もが見ていない時を選んで近づいてきたのだ。

誠士は舌を巻いた。

『この人はすべてを見ている！？』

ドラマ製作関係者でもない一企業のサラリーマン経営者の体調まで視界にしている拓己は、只者ではないと思った。

「で、でも」

「大丈夫ですって。ぼくも社長の趣旨は理解してますから。これもアメリカでボランティア活動をやってたんですよ」

口端をあげていたずらっぽく笑った。

そんな拓己に見つめられて心奪われない人間はいないだろう。

誠士は胸の鼓動を悟られないように頭をさげた。

「すみません。じゃ、お言葉に甘えて 失礼させてもらいます」

麗華に声をかけると誠士は現場を後にした。背中に涼川拓己の視線を感じた。

こわかった…

彼の強いオーラは誠士の心に麻薬のように染み渡った。甘美な誘惑だった。

『どうしたんだ、おれは』

そして同時に思い出したものがあつた。

オフィス・カサンドラの大棟社長のオーラ。

なぜコケテツシュな拓己からあの妖しい大棟社長を思い出したんだろう。

冷たく冴えた瞳の奥に宿る、熱い炎

凍らされながら燃やされるような快感を感じる　あの瞳

そう、どこかユリと似ている…

「なんだって！？与一社長が？」

12月も半ば。

年末も近づき一息をつく頃だった。

八坂融が誠士の携帯電話にかけてきたのは意外なニュースだった。

「百合子会長が体調を崩されて大分たったことで復帰はないと判断

したのでしょう。柿本専務ら反勢力が与一社長を担ぎ出したんです。今までは与一社長も乗り気じゃなかったらしいので安心していただけですが、今回はどうも違うみたいで」

「復帰されるつもりなのか?!」

「はい。そのつもりらしいとの、話がぼくのところに入ってきました」

誠士はしばらく黙った。

「分かった。ぼくの方でも情報を集めてみる。…また連絡する」
そう言って電話を切った。

蘭・ジュディ・

高倉商事の実質のトップ 百合子は体調を崩して公に姿を見せなくなっていた。

その間、誠士や美雪が牽引するべきだったが、力は弱かった。

誠士はグリーンリングとのかけもちで商事の経営まで手が廻らなかつたし、遙と離婚した立場上大きな顔も出来ない。

美雪はキャリアがなさすぎた。実績がないということは会社の内部外部からは評価されないのだ。

いま商事には強いリーダーが求められていた。皆が不安を感じていた時期に与一を求める声が大きくなってきたことは自然のなりゆきだった。

誠士は与一が復帰することには異論はない。商事をしっかりと率いてくれる人物を欲していたのは、自分も同じだった。

ただ、自分のやっている冒険的なプロジェクトが認められる可能性が低い、という事実。

これは明らかだった。反勢力は誠士たちのプロジェクトを快く思っていない。

せっかく…

せっかくここまでやってきたのに

誠士は電話をとった。

「はい。父親の死の謎を追いながら、たくさんの人に会っていきま
す。大企業の犯罪をベースに人間心理に迫ったドラマです」

お昼のバラエティ番組に番組宣伝のため涼川拓己が出演していた。

「今回は実際に活躍されている会社や人も出てきますんで、今まで
のドラマとは全く違ったつくりになっています。そのトコも見て
欲しいと思います」

大々的に宣伝がされてもう1ヶ月になる。テレビでの予告編、雑誌
の広告、電車の吊り、そして、数日前からは銀座三越などに巨大な
ポスターが掲げられた。

「こんなにドラマに力入れるなんて久々ね。おもしろそうだね」
突然軽井沢にやってきたジューディは熱心に番組宣伝を見入っていた。

「うん」
ソファに腰をかけ一緒にテレビを見ていたユリは他のことを考えて
いた。

グリーンリングはこれからが大変だろう。

番組で宣伝された団体をその後コーディネートしていくのは至難の
業だ。社員は増やしてもらえたのだろうか、誠士は働きすぎていな
いだろうか

「何考えてるの？」

「ジュディのこと」

「うそつき」

ぶい、と立ち上がるとジュディはクローゼットに向かった。

「どこ行くの？」

「…そと…」

不機嫌な顔でジュディは服を着替えだした。

「こんなに雪降ってるのに？危ないよ。零下だよ、外はジュディの手が止まった。

「…だつて」

「え？」

「さつきからユリはあたしがいてもどうでもいいみたいだし」

スリップのまままで止まっているジュディの肩は、見ていると薄ら寒かった。

「…なんで？そんなことないよ」

ユリはなるべく優しく答えた。

「じゃあ、なんでいつも私に何も言ってくれないのよ。軽井沢に行くことも決まってるから、好きな男のことで何があったかも言わない、桃子のことだつてまだ忘れてない、私のことなんて思い出す隙間もないのよ」

「ジュディ」

ためていたものを一気に放出したのか、ジュディは泣きながらユリを睨みつけていた。

「ごめん」

ジュディの目をじっと見たまま答えたユリは哀しい顔をしていた。

「ごめんね、ジュディ」

立ち上がると、脱いだケープをジュディにかけてやった。

「私も どうしていいか分からないの でも、ジュディのことを忘れてた訳じゃないのよ」

泣きそうな声でそう言つとジュディをのぞきこんだ。

「ユリっ」

ジュディはユリにしがみついた。

ケープが肩から落ちた。

「あたし やっぱユリがいないとダメなの。あなたが好きなの」

「私もよ。 ジュディがいたから 桃子が死んだ時も耐えられたのよ。すぐに来てくれたよね。 本当に嬉しかった。あなたがいないかったら、きっと私は ダメになってた。…ありがとね」

「ユリィィ」

むせび泣くジュディの栗色の髪を、ユリは何度も梳きながら強く抱きしめた。

この可憐で美しい女性を心から愛しく思った。

ジユデイの頬に手をあてると涙をぬぐった。
そして、やさしく唇を重ねた。

ジユデイの唇の弾力に酔いしれるとユリはふいに眠気を感じた。

窓の外は吹雪。

けど、ジユデイと抱き合っている閉ざされた空間は静かで…暖かい…

クリーム色の空間で眠っているジユデイは絵本で読んだ王女のように思えた。

一万日目の真実

季節はめぐる。

信州地方のミズナラやカエデの葉は青々と生い茂り、セミ、キジバト、リス、などが活発に動き回る基地となっていた。
七月。

シユタイナー・ランドは小さいながらも小学校の校舎と、レストラ
ン、宿泊施設が出来、徐々に形づくられていた。徐々に参加する人
も増えつつあり活気をおびてきていた。

誠士は荷物をほどく手を休めて、森から吹いてくる風にあたりなが
ら目を閉じた。

「おい、はかどってるか？」

どかどかと裕太の足音がした。

「ああ。そんなにないからもうちよつとで終わる」

「ちよつと休憩にきた」

外で土木作業に追われていた裕太は汗をかいた作業着のまま、アル
マイトのやかんとせんべいを差し出した。

ふたりはフローリングの床に座って、冷えた麦茶を飲んだ。

誠士は新しくできた宿泊所に住むことになった。

モニターも兼ねていたが1LDKの間取り。

「しかし、与一さんたちが出て行って、入れ替わりのようにおまえ

が来たのが…なんとも」

「すまん、裕太」

「おれは大歓迎だけどさ」

その先をどういつて分からないようだった。

「君が逢とあんな風になっていなければ、私はここまで出てくることもなかったんだ」

与一は悲しそうにため息をついた。

呼ばれた社長室はかつて百合子がいたときと全く雰囲気が変わっていた。

渋い革のソファに機能的なデスクが無駄なく配置されていた。

三月、与一が高倉商事の代表取締役に仮就任した。女性部や百合子派の役員たちは美雪を取締役に推していたが、こういった人事工作については柿本専務たちの方が数段うわ手だった。

グリーンリングの仕事は実質宙に浮いてしまったのだ。

突然の企画中止、予算の大幅カット。

ドラマの放映はされたが、その後の永続プロジェクトはすべて反故にされた。

反響が大きかったため、コーディネイトの現場は騒然としていた。そんな時期だった。

「僕個人へのうらみからこの会社に戻ってこられた、と？」

「」

与一はゆっくりとソファに腰を下ろした。

「勝負を思い出したのだ」

「勝負？」

「君はこの高倉一族に勝負を挑んでいた。長谷川誠士として」

誠士は息を呑んだ。

与一の向かいに腰を下ろした。

「遙と結婚し商事の一部となって活躍する　いずれは娘婿として商事のトップとして君臨する。それが君の復讐かと思っていたよ」

与一は目を伏せて笑った。

「けど、違った　君の復讐はそんなものじゃなかったんだ」

誠士は与一をじっと見た。

「君が手に入れたかったのはありきたりの地位や権力なんかじゃない。遙をぼろぼろにして私たち一家を傷つけること、そして商事をつぶしてしまうことだった」

「違います」

誠士は反論した。

「遙を傷つけたことは私の責任です。それは間違っています。ですが、意図してやったんじゃないんです」

「信じられん」

「本当です」

誠士は深い奈落を感じた。

どう言っても与一には永遠に理解できない、という深い溝だった。

「じゃあ、どうして遙はあんな風になってしまったんだ?! え? 仕事のほうだってそうだ!

採算の取れないプロジェクトを必死に進めているなんて正気の沙汰とは思えん! 商事をつぶすつもりか? …おふくろは出し抜けても私はそうはいかんからな」

誠士はもう何も言うことが出来なかった。

長谷川誠士の復讐など、とうに達成できなくなっていた。

大学を卒業して高倉商事に入り遙と結婚するまでは、確かに復讐心が原動力となっていた。それは厳しい少年期を生きていく熱いエナジーとして必要だった。

確かにあの頃までは与一が言うとおりだった。

与一を贈賄容疑者として密告したときまでは、娘婿として高倉のトップをとるつもりだった。

ユリが現れて誠士存在は危うくなった。

優秀な孫娘。与太郎の血をひくユリは自分よりも後継者として近い存在だ。この先ユリが結婚でもしてその相手が優秀であれば、ますますややこしくなる。

ユリには仕事を失敗させ商事から手をひかせること、実権を握っている与一を一日でも早く追い落とすこと。

うまくいくはずだった

なのに

愛してしまった

ユリ

誠士の復讐など吹っ飛ぶような、大きなものを持っていたユリ。いつもどこかで感じていた懐かしさと眩しさ

「あれ？なんか落ちてる」

裕太は床に落ちていた、花形に切られた水色の画用紙を拾った。アルバムから落ちたのだろう。

画用紙に貼られた写真には、学年の違う小学生が5、6人写っている。

写真の台紙となっている画用紙には“せいくんさようなら”“元気でね”などと子どもの文字が入っていた。

「るすばん学級の写真だ」

「るすばん学級？」

「あおぞら園に行くまえにちょっと入ってたんだ。前の施設にいた頃さ」

誠士は施設を2回変わっていた。

「るすばん学級って学校だろ？放課後、低学年のかぎっ子をあずかってくれた」

「うん。前の施設は人数が多かったから、るすばん学級にいれられたんだ。おかしがもらえるし、友達とも遊べるし、結構嬉しかった」

「へー、この真ん中に立ってるのがおまえだろ？今みるとかわいいよ」

「小学4年生だったけど、チビだったからなあ…」

照れくさそうに昔の自分を見つめていた誠士の目がふと止まった。

「これ…?!」

誠士の横に立っている背の高い少女。

少し悲しそうに笑う女児は

『せいくん、あたしらのこと忘れんなよ』

そういった少女は、るすばん学級のしつかり級長。ユリだった。

ヒーロー少女

「せいくんどうしよう！？」 級長がゴリ男たちのグループに入りかけたの」

同年の初音はつねが泣きそうな顔で運動場に駆けて来た。

「ウソだろ？」

「ううん。ゲーセンの前で仲良さそうにしてた」

るすばん学級のこどもたちは初音を取り囲みながら大騒ぎになった。下級生の面倒見もよい、しっかり級長のユリが不良と言われているゴリ男たちのグループに入るなど考えられなかった。ゴリ男は6年生で体が大きく我が物顔で振舞う少年だった。

るすばん学級の生徒たちはよくゴリ男たちにいじめられた。放課後の運動場で遊んでいると、ゴリ男たちはわざと学級の生徒たちの近くに来て、遊びの邪魔をするのだ。

ユリはよく口で言い返していたが、ゴリ男たちには効き目がなかった。

一番ゴリ男たちのことに憤慨していたのはユリだった。

「おれ、様子みてる」

「あ、せいくん待って」

誠士は初音の言っていたセンター街へ向かって走った。

ゲームセンターは小学生が入ってはいけない場所だ。入り口から中をのぞきこむが薄暗くてよく見えない。

「本当にここにいたのか？」

「うん、さっきゴリ男たちと入っていった」

バタバタバタ……

突然、誠士たちの後ろを何人かの小学生が駆けていった。

「万引き!？」

「誰かそのコたちを捕まえて！」

逃げていく後ろ姿は、カツパメシ。おカツパ頭のゴリ男の腰ぎんちやく少年だ。

どうやらゴリ男たちが何かをしたらしい。

ふいに誠士は腕を掴まれた。

「早く来い！」

ユリだった。

「こんなトコいたらおまえらも捕まるぞ！」

剣幕に押されて誠士と初音はユリに着いて走り出した。

「そのコたちを捕まえて！」

後ろからは追う大人の声は、誠士たちに向かっていく。

『ヤバい!？』

ユリはカツパメシらとは違う人の多い通りに紛れ込んだ。必死に追う誠士と初音だった。

カラの小さな3人は大人たちに紛れて何とか逃げおおせることが出来たようだ。

公園に入ってからやっと足を止めることが出来た。

「なんだよ万引きって」

体を折って、はあはあと息をしながら誠士はユリに尋ねた。

誠士の問いに答えず、水のみ場で喉を潤すとユリは2人に強い口調で言った。

「おまえら帰れ」

「なんでゴリ男たちとなんかツルんだよ。あいつら ヤベーだろ。万引き？マジかよ？」

ユリは誠士を見つめたまま口を開かなかった。

「ね、級長、帰ろう。あんなコたちと一緒にいたら級長も不良になっちゃうよ」

初音はユリの手をとった。

一瞬ユリは動揺したようだったが、初音の手を振り払った。

「ごめん…でも、もうあたしのことは放っておいてくれ。…おまえらも、もうこっちきちゃダメだ」

「何言ってるんだよ!？」

「とにかく帰れ!」

そう言うユリは水のみ場から走り去った。

残された誠士と初音は、何とも言えない悔しさと悲しさを味わった。信頼していた友の ユリ はじめての裏切り。

本当は自分が勝手に思い描いていた夢が崩れ去っただけなのだが、幼いふたりにはユリの行動は「裏切り」としか受け取れなかった。

そしてユリはるすばん学級には現れなくなり、ゴリ男たちとツルンでいる噂だけが聞こえるようになった。誠士らはユりに憤慨するばかりだったが、どうしてよいか分からなかった。

急展開をしたのは、それから半年たった秋風吹く頃だった。

「そついえばゴリ男たち来なくなったね…」

1、2年生たちに簡単ドッジボールを教えていた初音が口を開いた。

「本当だ。そついえばぜんぜん来ないよな」

「…なんか他に悪いことしてるからかなあ」

よく考えてみるとユリがゴリ男たちとつるんだ頃から来なくなったようである。

誠士は何かひっかかるものを感じた。

ボタン、ボタン！

校門の前で1台の車が止まると、中から2名の男性が出てきた。

小学校には縁のない厳ついオーラを放つ存在の人間たちだった。

校長と教頭が急いで校舎から出てくると、何度も頭を下げているのが見えた。

誠士と初音は目を合わせた。

下級生たちを校舎に入れ、おやつを食べるように促すと急いで校長室に走っていった。

「では郷原幾男（ごうげんいくお）はしばらく欠席ということでしょうか？」
うなるような声で尋ねる校長の声が聞こえた。

「母親は麻薬使用で現行犯逮捕、父親も使用教唆にとわれていますから… 保護者もいないわけです」

「じゃあ郷原くんはどこに…」
「病院で検査をしてから、保護施設でしばらく預かることになりました」

「どうやら男たちは刑事のようだ。」

ゴリ男、郷原幾男は何か犯罪を犯したのだろうか。誠土と初音は校長室の外で息を殺して聞き耳をたてた。

「問題はどのくらいの数の少年たちが関わっていたか、ということ。大体の情報は掴んでいます… この学校の生徒は… 今分かっているところで5人ほどです」

「う、5人ですか…」

教頭が今にも倒れそうな様子でつぶやいた。

「と、原田正之（はらいたまのゆき）、室生ユリ、この5人です」

刑事が5人の生徒のデータを読み上げた。

誠土と初音は驚いて心臓が止まりそうだった。
凍ったままの表情でふたりはみつめあった。

「ただ、原田と室生は通報者なんですよ」

「え?!」

「この2人が警察に連絡してきたんです。実際には室生ユリがかけてきて、原田正之は横にいただけみたいです。えらくしっかりとした内容でしてね、こっちの麻薬捜査官が持ってた情報と照らし合わせて踏み込んだ、って訳です」

「で、では、この2人は」
校長は犯罪者が減ることに一瞬の希望を持ったようだ。

「さあ…仲間うちの話では、麻薬売買や使用の現場にはいたけど使っていたかは分からないと。室生ユリは『やってない』と言っていますが、これから血液検査をして調べます」

「いずれにしても小学生が麻薬の売買に関わっていた、というだけで大事件なんですよ。それも親がらみですからね」
年配風の刑事の声だった。

夕暮れの帰り道。

誠士と初音は口がきけなくなっていた。

あまりにも問題が大きく、犯罪という恐ろしい世界に踏み入れたユリが遠くに行ってしまったように感じていたのだ。

「あたし考えたんだけど」
初音が口を開いた。

「級長はまちやくんを助けたかったんじゃないかなあ」

まちやくんとは、原田正之のあだ名である。るすばん学級出身の男

子生徒だった。

誠士がくる前、初音やユリたちは1つ年上の正之をまちゃくん、と呼んで慕っていた。

5年生になつてゐるすばん学級を卒業した正之は、いつの頃からかゴリ男たちのグループに入るようになり不穏な世界の住人になりつつあった。ユリたちはその事を気にしていた。

「そんなこと わかんねーよ」

「だって、級長はすんごく怒つてたもん。ゴリ男たちに すんごく怒つてたもん だから絶対まちゃくんを取り返しにいったんだよ」

支離滅裂な初音の言葉だったが、誠士にはなぜか納得がいった。

しかし、だとしたら…なんと無茶苦茶なのか、けど、なんとカッコイイのか

ユリがるすばん学級に帰ってきたのは、それからすぐのことだった。

裏窓

「こちらの予算は人件費を大幅にカットして五千万ほどの経費を削減しました。これでフィリピン工場設立が少しラクになります」

反射するめがねの奥の表情を麗華は図りかねた。

帰ってきたユリはなぜかめがねをするようになっていた。

「よく五千万も減らせたね」

驚くように与一が書類に目を落とした。

「はい」

それ以上は何も言わないユリだった。

無表情のまま社長室を後にしたユリを麗華は心配そうに見つめた。

ユリが会社に復帰したのは誠士が会社を辞めたのとほぼ入れ替わりだった。

突然の帰京を喜んだ麗華たちだったが、帰ってきたユリは別人になっていた。

伸びた髪をきちんと結わえ、ダーク色のスーツに身をつつんだユリは、与一付けの秘書となり冷徹に麗華や女性部を切り崩した。秘書といっても総取締役の秘書である。権限は役員より絶大であった。

グリーンリングの予算は縮小されるまで縮小されていたのでそのままだったが、女性部は有無を言わず解散させられた。

そのうえ業績の悪い部門は総点検にあい、課長以上の管理職は給与を大幅カット、もしくはリストラといった冷徹な改革が行われた。

反対に業績が見込める部門は大胆に予算をとり利益を大きく伸ばすようにあらゆる援護を行った。人員整理と業績回復、こうなると株価も上昇する。

こういった一連の動きが影の専務でもあるユリの采配だという噂なのである。

もはやユリは商事のどの人物よりも恐れられていた。

「ちょっと待ってください」

麗華はユリに与えられた個人ルームにまで着いてきた。

「この間の役員会議で…柿本専務が解任に追い込まれたのはユリさまのせいなんですか」

その言葉にちらりとユリは反応した。

「 どうしてですか」

「そついつ噂が流れています」

「 そうですか」

そのままユリはデスクのパソコンに向かった。

「ユリさま。いったいどうされたのです。このままではユリさまに対する不穏分子が出てきてしまいます」

「 どういう不穏分子ですか」

麗華は言葉に詰まった。

ユリのしていることは間違っていない。会社を建て直し業績をあげる、という行動には文句のつけようがない。

ただ、あまりにも極端に走りすぎているため、切り捨てられた部署 - 女性部や第三次産業部門では非難と怨嗟の声が上がっていた。それがユリに向かっている、ということに麗華は恐れを感じていた。

ユリは本気でそんなことをやるような人間ではない。きっと何か考えがあるのだ。

そう信じているからこそ麗華には心配でならなかった。

「いい加減、本当のことを話してください」

麗華の言葉には答えずユリはパソコンを打ち続けた。

「じゃなきゃ、私をここから解放してください。こんなユリさまが見たくて秘書課に戻ってきたわけじゃありません。もうグリーンリングに返してください!」

麗華はこらえきれずに声をあげた。

ユリはパソコンの手を止めて麗華をゆっくりと見上げた。

澄んだ瞳は驚くほど落ち着いていた。

「咲田さんの企画と計画書は完璧です。私ひとりだったらここまでやってこられませんでした」

「ユリさまは目のつけどころが斬新ですから…規模拡大の企画を立てるのはやりがいがありました。けど!そんなことやってどうなるっていうんですか? 目先の利潤に目がくらんでいる…目の前にニンジンつけて走っているウマみたいなこと」

クスリ、とユリが笑った。

「さすが咲田さん。そこまで分かっているんですけど、これ以上も
う口を挟まないでくださいよ。秘書課もやめないでくださいね」

ユリはニッコリと笑うと、会議があるといつてそのまま出ていつて
しまった。麗華にはユリの意味するところが全く分からなかった。

暗い廃工場の中で初音は自分を呼ぶかすかな声を聴いた。

…はつね…

うずくまっていた体勢から頭をあげた。

はつねー

今度ははつきりと聞こえた。

「きゅうちよおー」

泣きながらあらん限りの声で答えた。

「きゅうちよおー、きゅうちよおー」

何度も絶叫する。閉じこめられた暗くて広い空間。

入り口の鉄の扉をどんと叩きながらユリの名前を初音は叫んだ。

初音は今日、ゴリ男たちにつかまった。

ユリと正之への復讐に燃えたゴリ男は下校途中の初音を捕まえると、
車の廃工場に閉じ込めたのだった。

「はっねっ!」「そこにいるのか?」
扉の前まできたのはユリと誠士だった。

ふたりは鉄の扉を一生懸命開けようとしたがビクともしない。

「どっか他に入るトコないか?」

「ぐるっと見たけど裏手もだめ。…あそこから入れたらな」

そういつて誠士が見上げたのは、壁の上のほうについている壊れかけた窓だった。

「何か登るもの」「そういつてユリがあたりを見渡したが何もなかった。

「せいくん、肩車してくれない?」

誠士はユリに考えていることがすぐに分かった。

「ダメだよ… そんなの危なすぎる。さっきに大人を呼んだほうが
いいよ」

「ん そうだね」

「おれ、電話してくるからっ。そのまま置いてよっ」

そういつて現場を離れた誠士だったが、不安だった。ユリが何かやりそうな性格なのを知っていたからだ。

案の定、ユリは棒切れを見つけると、それで窓をつつき出した。
窓までは何とか届くギリギリの長さだったから、振動で窓ごと潰れるかガラスが壊れたら手がかけられると思ったのだ。

と

ゆっくりと窓わくが落ちてきた。
窓わくごと外れたのだ。

『やった』

だが、それは自分めがけてふわりと接近してきた。

「あ」

ユリは頭を抱えてうずくまった。

ガッシャーン！！！！

地面に落ちた窓は派手な音をたてて砕け散った。

咄嗟に避けたものの跳ね返ったいくつかの破片はユリを容赦なく攻撃してくるハズだった。

「つつ……」

だが声をあげたのは、ユリに覆いかぶさった誠士だった。

「せいくんっ！？」

誠士の背中、腕、脚……一部の窓わくが直接誠士を襲っていた。
当らなかつたものも地面から跳ね返ったガラスの破片も誠士を細かく深く傷つけていた。

「きゆうちよお、せいくん！何があつたの！」
ただならぬ雰囲気初音がパニックを起こした。

「だ、大丈夫だ」
顔をしかめながらも初音に答えたのは誠士だった。ユリはあまりのことにまだ茫然としていた。

「ケガない？」

少し自慢気な顔をして誠士はユリを見た。

「あ、あたしは大丈夫。それよりせいくん?!」
我に返ったユリは誠士の体を確かめようとした。

「ちょっと当たたかなあ…」

誠士が一番大きい右足首の破片を抜いた。傷口からはどくどくと赤い血が流れ出た。

ユリはTシャツを破くと、誠士の傷口をきつく縛った。

「…ごめん」

「いや、級長だったらもっと上手く避けられたかもしれないけど
おれ、嫌だったから」

「え？」

『級長が傷つくの』

そう言おうとしたが誠士には恥ずかしくて言えなかった。

「ううん…」

「ほんと、ごめん。せいくんそのままでいろ、って言ったのに。
…見えない細かい破片が刺さってないか心配」

「大丈夫だよ。それより電話、まだ探せてないんだ。悪いけど初音
とここで待っていていい？」

「うん。あたし電話してくるっ！」

そう言って走っていくユリ。

誠士は満足だった。

体は傷ついてもユリを守れたことがとても嬉しかった。

どんなに体が傷ついても心は満足することがあるんだ、と誠士はこのとき知った。

桜月夜

月の美しい夜だった。

料亭「東山」のしだれ桜は小ぶりながら、京都の円山公園と同系と
いうことからもみごとな枝ぶりで、満開の花びらを幻想的に支えて
いた。

東京でこれほど見事な桜を庭に配した家屋はそうあるまい。

これを5間だけの客室から堪能できる人々とは、特別な存在である
ことだけは間違いない。この時期の予約は何年先になってもなかな
か空くことはないだろう。

誠士は縁側に立ち尽くして、桜の上に輝く月を見つめていた。

ぼうと光る月から、なにかいいようのない異界の生き物が今にも降
りてきそうな気がした。

それは庭の桜に降り立ち、美しい精となって現れるに違いない。

すう、という音がした。

振り返ると妖しい桜の精が立っていた。

額から頬にかけて立ち上がる黒髪は白い顔になまめかしくかかり、
暗い紅をひいた唇は三日月型につりあがる。

異形の女神は同じく臍^{へそ}長けた青年を恋人のように伴っている。
人なつっこそうな瞳に精緻な造詣の青年は深紫の着流しを着ていた。

「お待たせしました」
大棟広海だった。

「ああ、綺麗ですね。ちょうど満開だ」
涼川拓己は庭の桜を見て無邪気に笑った。

「あまりに美しいんで見とれていました」
誠士はふたりのオーラに酔うまいと言葉を發した。

「ここだけは何とか変わらなくていいです。忙しい身なん
でなかなか花見にも行けないですから。こうやって毎年この桜を
見るのを楽しみにしてるんです」

銀色の鱗のような鮫小紋さめいもんに同系色の嵯峨錦さかにしきの帯を締めた広海が誠士
の横に並んで庭を見つめた。

黒の印象の広海が白い銀を、白の印象である拓己がぬばたまの紫を。
ふたりの逆コーディネートコーディネートの妙に誠士はくらくらきた。あまりにも
粋である。

「おふたりともとても綺麗ですね。…なんだか僕ひとりでお見受け
するのがもつたいたくないくらいです」

広海はうつすらと微笑んだ。
誠士は自分の言った言葉が恥ずかしくなった。

粋の極みであるこの二人には、身を飾りこの空間の一部となること
が大事なのだ。他人に自分を見せるのではなく、自分たちの為にお
しゃれをする楽しさ。

「今年は高倉さんが違った色を加えてくださっただんで桜も喜んでますわ」

「いや、僕じゃおふたりと桜の競演美を汚してしまいます」
少しくたびれた背広を振り返って誠士は苦笑した。

「高倉さんって自分のこと分かってないんですねえ」
含んだような笑顔で拓己は言った。

実際に三人は美しかった。

膳を運んできた仲居たちが、思わずほうとため息をついたくらいだ。
もし誠士だけが浮いていたらそのため息はなかったはずである。

芸能人も多く利用するこの料亭では、低俗なおせじや邪推は決して口にしない。

だが心のうちでは涼川拓己たちが連れてきた誠士を特別な客として
値踏みしているのは確かだった。

歌舞伎役者か？はたまた映画の共演者か？

見栄えのよさから誠士はそのあたりの者として扱われていた。

「ここに来て3人ほど出資者が抜けまして、その穴を埋める人を探
してるんですが、なかなか見つからないんです。どなたかいい人い
ませんか」

宴も進んだ頃に誠士は本題を切り出した。

シユタイナーランドの大口出資者が数名脱落したのである。その為
東京に出てきていたのだが、まだひとりしか穴埋めが出来ていない
のだ。

「シユタイナーランドは大口、少人数制という精鋭でいきたいんで

すよね」

広海が首をかしげるようにして誠士を見た。

「はい。グリーンリングのやっているような小口、大人数では動きが取りづらいですので。まだシュミレーションのようなもので、多くを巻き込みたくないんです」

「意識の高さっていう問題もありますよね」
拓己が徳利をあげて誠士に促す。

恐縮しながら誠士は杯を差し出した。
なんとという色つぼさだろう、酔いが少しまわった誠士には拓己は果てしなく危険な存在に思えた。

「はい。抜けた出資者はその理解が浅かったのかもかもしれません。
“こんなに完成するのに時間がかかるなら投資は出来ない”と言われてまして。こんど新しく出資をしてくださることになった砂川さんは、高い理想がおりになったので…」

「ああ。あの方でしたら大丈夫でしょう。七十を過ぎてまで人の顔色なんて見てやってられない、好きな事をするって。ビジョンもしつかりされていますね」

広海は嬉しそうに微笑んだ。

「はい」

「となると、砂川さんのようなビジョンをお持ちの方、または社会貢献をしたいと思っっているひとかどの人物か…」

広海はアゴに手をかけて考えた。

そのしぐさがあまりにも男性的で現代的だったので、外見とのギャップに誠士は笑いだしそうになった。ユリを思い出す。

「IT関連の代表や外国人社長でも、志が高い人ならいいんじゃないの？」

少し甘えたように拓己が広海に提案した。

「いいわね。拓己、そっちでいい人いない？」

拓己は3人の人物を候補としてあげた。

「私のほうは有閑夫人が何人か　後はメセナ関係の社長は当ってみてもいいと思うの」

「設立時にそっち関係の方にあたったんです」

「そっか…」

しばらく考えこむようにしていた広海だったが不意に目がきょろりと動いた。

「あ、この人に相談してみて」

そう言っただけから名刺を取り出した。

「まだ若いけど顔がとっても広いのよ。本人は広告コーディネイターだけど信用商売をしているの。ほら、広告って出資すりゃどこでもコマースャルしてくれるけど、本当にその会社がいいかどうかなんて分からないでしょ。」

けど、その人は提供元をかなり調べてからお墨付きをするの。まあ、ランク分けというか…　そうすることによって提供先に安心感をもたらす。ちよつと前、信販会社のCMをTV局がガンガンながしたけど、結局あこぎな商売をしていてその信販会社は摘発された。

そうなるかと流していたTV局だってバツが悪いわけよ。出資してくれたから流しました、って言っても体裁が悪いわけ」

「そうなってくると一定の基準がほしいですよね」
誠士はうなずいた。

「ええ。そういう意味で彼は上手く信用を商売にしている。家柄がもともといいから情報も入ってくるのよ。お兄さんは議員で、弟は漁師っていう面白い家庭なのよ」

「へー」

やはり大棟社長に相談してみてもよかった、と誠士は思った。少し東京を離れているとなかなか情報が入ってこないのは確かだった。

「それはそうと、高倉さんはグリーンリングに帰ってこないんですか。僕たちフォースのメンバーもだいたい慣れてきたんですよ」

涼川拓己はフォースという四人組みのメンバーでもある。メンバーそれぞれが社会的企業のPRを続行している。

「はい。ブログで見せてもらっています。ソンミンさんの山村交流体験記はいいですねえ」

「あれ、反響がすごくて！今度は地元の直売所めぐりをするって言っていました。毎回応募してくる共同体験者を絞るのに苦労する、って。そうそう、反響を知った芸能人からも声がかかっているんです」

「声？」

「ええ。富士山麓に畑を持つてる…さん、とか、岩手県でスローライフを実践している…さん、とかが声をかけてきてくれて、僕たちも何か協力したい、フォースみたいな仕事をしたいって。輪は大きくなってきたですよ」

拓己の発言に満足そうな表情の広海だった。

地道ながらも確実に輪は広がっている。グリーンリングも予算を抑えられてどうなるかと思っていたが、何とか続行できているようだ。火はかすかでも点り続けている。

広海が縁側のガラス戸を空けた。

同時に待ち構えていたように、桜の花びらが舞い込む。

急に明かりが落ちた。

拓己が電気を消したのだ。

月は朧おぼろに桜はあでやかに。

風が広海の髪と袖をゆすぶった。桜に香りはほとんどないはずなのに、黒髪の間をすり抜けた風からは甘く陶酔とした桜香が漂った。そして少し後ろに立つ永遠の恋人にも花片は降り注ぐ。拓己の白い頬頬に肩に…

あまりに美しい光景に誠士はこれは夢かもしれないと思った。だが夢でもこんなに美しい光景を見ることは出来るだろうか。

三人は何も言わずに、ただ降り続く白い花片を見ていた。

虚像の波

誠士はグリーンリング主催のソンミン自家販売イベントに手伝いという形で参加をした。

人気アイドルが行う行事にマスコミが多数押しかけ、ファンたちも巻き込み大行事になっていた。

誠士は主にマスコミの誘導を行った。

「どうもお疲れさまでした」

午後3時も過ぎるころには、西村雄介が仮こしらえの事務所でお茶を淹れてくれた。短時間で販売終了となるので、そんなに時間がかからないのが救いだった。

「毎回こんな感じなの？もっと手伝う人いられないの？」

今やグリーンリングの長となった雄介だったが、相変わらず腰が低く自らお茶を淹れている。

「ええ。予算がきついんでこれで精一杯なんすよ。ソンミンが来る時だけはボランティアで高倉から数人来てもらうんですが」
「予算ってどれくらいなんだ」

誠士のその言葉に雄介は一瞬しまったという顔したが、その後バツが悪そうに口ごもった。

「　　くらい、かな」

ぼそつと言った言葉だったが誠士は聞き逃さなかった。

「なんだって?!うそだろ?」

「
」
暗い目をしてうなだれる雄介に、誠士はうそではないことを知った。

「なんだってそんな事になったんだ。百合子会長じきじきのグリーンリングだったじゃないか？そんな予算じゃとてもやっていけない

よ、与一会長のせいか？」

「まあ…そんなところです」

雄介の歯切れの悪さに、別の意味を感じ取った。

「他になにかあるのか？」

しばらく下を向いていた雄介だったが、重苦しい口を開いた。

「ユリさん　なんです」

「え？」

「社長が高倉を去られてから、すぐにユリさんが帰ってこられたのは知ってますよね」

「ああ」

ユリが高倉に帰ったと聞いて、誠士は少し安心していたのだった。

「帰ってきてからのユリさんはすっかりと変わってしまったました。与一会長の秘書として与一会長の手足となって権限を振るうようになっただけでした」

「与一会長の？　それってあっち側の人間に寝返ったってことか？」

「ええ。寝返ったどころか…誰よりも熱心に業務改革を断行していききました。女性部は解散、リストラはえげつなく行われましたし、

売り上げの悪い部門は縮小して、採算が見込める海外の投資はかなり大胆に行われました。そのかいあって高倉は空前の利益。重役連中や鼻息の荒い若手はユリさまさまで……」

誠士には信じられなかった。あのユリが？

「ユリさんは何か考えてるんじゃないのか？」

「僕たちも最初はそう思いましたよ。けど、最近はユリさんを筆頭にしたり取り巻きのさばって、僕たちは肩身の狭い思いをさせられています。…高倉は、すっかり変わってしまいました」

ユリに惹かれていた雄介は、ショックという言葉しかないようだった。

「さ、咲田くんは？今どこにいるんだ？」

「秘書課でユリさんの手足となって働いています。端からみると取り巻きの筆頭みたいに見えます。彼女としては何とかユリさんの本音を聞きだそうとしているって言うて言っていました、上手くいってないようですよ」

自嘲気味に雄介は笑った

誠士はもつと情報が欲しかった。

情報通の雄介だったがユリのこととはつらいのか、積極的に情報を持つとうとしていない様子が伺えた。雄介からそれ以上ユリのことを引き出すのは酷だ、と誠士はあきらめその場を去った。

「大変だ！今度シユタイナーランドの講師に来てもらうことになっ

てたグロツケン教授が断ってきたんだ」

誠士がホテルに帰ると、春日裕太があわてて電話してきた。

グロツケン教授は日本におけるシユタイナー教育の第一人者である。シユタイナーランドの設立には当然教育という部分もあるが、その教育部門を請け負うと快い返事をしてくれたのである。

それがどうして?!

「あつちの知人に確認したところ、どうもほかに強力なオファーがあつたらしい」

「他のオファー?」

「“トリニティかれっじ”っていう専門学校法人んだけど、母体を調べてみると、高倉商事だったんだ」

「なんだって?!」

「なあ、調べてくれないか。おまえなら何か分かるんじゃないか」
「わかった」

急いで誠士は電話を切った。

何か 何かが起こっている。

胸騒ぎを感じながら誠士は身をベッドに投げ出した。

闇の記録

百合子は太陽のエネルギーを吸い込むように、目をつぶったまま顔をあげた。

ユリは庭に向かって放たれているサンルームのデッキに百合子の車椅子を押しすすめた。

「いい天気で気持ちいいわ。ユリちゃんが言ったように緑の効果は大切ね」

「でしょう？このお庭もちょっとずつ形になってきました」

軽井沢から帰ってきてからユリは自宅にガーデニングのための洋風の庭とそれに連なるサンルームをこしらえた。玄関に面した和風の庭は庭職人の手が入って趣きがあったのだが、裏庭にあった作りつけの洋風ガーデンは、既製の手入れがおざなりにされていた。

ハーブを中心に、季節の花を手前に配し、丈の大きなオリーブや月桂樹をバックに…今回はガーデナーに依頼をして、ユリたちは手伝いをさせてもらうことにした。

美雪や麗華や元・女性部も呼んで土を触る作業は、ユリとの確執緩和に大きな効果をもたらしたのだ。

「そろそろ…かしらね」

ミントの葉を浮かべたアイスのアップルティを手渡したユリに百合子は微笑んだ。

「出る杭は打たれるけど、出すぎた杭は打たれない、てお婆さまは言われました」

「もうユリちゃんをどうこういう人はそんなにいないでしょ」
「ふふ、そうですね」

ユリの口をつけたグラスの氷がカランとなった。

百合子はユリを徹底的に突出させることで、邪魔をする人々から手をひかせる作戦をとっていた。今回は旧態でも分かりやすい形を取らせる為に成果主義をバリバリに貫かせたのだ。

若い女性が突出すると、男性だけでなく女性からも足をひっぱられる。しかし、あまりにも特殊な立場になると『あの人だったらしょうがない』という心持ちになぜか人間はなるのである。それを狙っていたのだ。

「つらかったでしょう?」

「それは確かである。」

自分の意思と真逆の行動を取るストレスは耐えようもないものだった。

ユリはジュディともうまくいかなくなっていた。その穴埋めをするかのように自宅に戻ってはガーデンングにのめりこむようになった。縁に囲まれている間だけは、心が癒されていたから。

「ユリちゃん…」

「はい?」

「あなたにカオスの切り札を教えておくわ」

「カオス?」

不穏な言葉にユリは胸が騒いだ。

「それは高倉商事の跡継ぎにだけ渡す秘密の切り札なの」

百合子は内線で暁生を呼んだ。暁生はいつかのようにアタッシューケースを持ってサンルーム現れた。

ケースには昔の日記帳のような黒いノートが数十冊と、ディスクが数枚入っていた。

「このディスク1〜4まではここにあるノートをまとめたものが入れてあります。5枚目以降のディスクには紙媒体がないので、記録はこのディスクのみとなります」

内容が分からないのでユリには何とも答えようがなかった。

「ノートを見て」

そう言われて一番上にあつたノートを手にとって中味を確かめた。

それは高倉商事が関わつた犯罪とも思える、裏の歴史の数々だった。国や外国との闇取引、国民の健康を害し欺き、環境を破壊してでも利益を追求しているとも言える行為、司法の抜け道と買収、ゾツとするような現実をひたかくしにした企業の実態だった。公になるとスキャンダル必至の事柄が埋め尽くされていたのである。

「お婆さま……」

ざっと見ただけで察知したユリは青ざめていた。

「わかった？ 私たちはこういつたことをやってきたの。…恐ろしいことよ。私はそれを嶋崎さんから渡された時は、ショックで何日もまともに生活が出来なかつたわ」

「…嶋崎さん？」

暁生の父である、運転手だった嶋崎の顔を思い浮かべた。
ユリの言葉に百合子は大きくうなずいた。

「高倉家と嶋崎家は代々光と影の間柄なの。高倉の当主はね、嶋崎家が認めた人物じゃないとなれないのよ。この記録は、高倉の当主が持つんだけど、管理は嶋崎の当主がすることになっているの」

「じゃあ、今は暁生が？」

ユリは暗い目をしている暁生をみつめた。

「ええ」

「そんな　じゃあ、権限は嶋崎家が持っているってこと？」

「それが微妙なところなの。記録の管理は嶋崎だけど嶋崎にその記録をどうこうする権利はないのよ。…ややこしいでしょう？」

困った様子の百合子に暁生が補足をした。

「私たちは記録の保管はしますが、この記録に記入したり、活用したり、破棄したりは出来ません。ましてや悪用は固く禁じられます。高倉の当主だけが記録を使うことが出来るのです」

「でも、その当主を選ぶのは嶋崎家でしょう？」

「はい。でも、嶋崎の当主を選ぶのも高倉の当主なのです」

「ややこしいわね」

「つまり先代の高倉の当主、今回は百合子さまとしましょう。その百合子さまが私を指名したら、私は次の高倉の当主を指名するので。今なら与一さまか美雪さまかユリさまか、ということになります」

「そんなのあんたの一存で決めて、世間が納得するかしら」
「それは相応の根回しが必要です」

今回の百合子の計画を思い出してユリは納得するように首をすくめた。

完全に脱帽である。

「このカオスの記録： あなたに渡していいかしら？」
百合子は苦しそうな息を吐き出した。

「…暁生は？納得しているの？」
ユリは焦点の合わない目でつぶやいた。

「私はそのために今日までつかえてきました」

冷たい湖のような声だった。しかしその声にはマグマの情熱が湖面の底に秘められていた。ユリには届かない情熱が…

「ユリちゃん、あなたの負担になるなら断っていいのよ」
「…少し、考えさせてください」

ユリは持っていたノートをアタツシケースに戻した。

「この記録、もう少し見せてもらっていいですか」
「もちろん。…もしユリちゃんが公にしたかったら してもいいわ」

そんなことをしたら高倉は破滅である。

しかし、現当主である百合子がそれをユリの許可したのであれば暁生には何も言えないのだ。もちろん暁生がユリに対して反対をする

理由はなかったが。

そう、高倉の当主となることは、国家的規模のスキヤンダルを公表して破滅する自由もある、ということだった。あまりにも重い記録は百合子の言うとおり混沌という名のカオスだった。闇と無秩序がぱっくりと口をあけてユリを待ち構えているようだった。

アタッシユケースをユリの部屋に運んでおくように暁生に言いつけた後、百合子はぽつりと言った。

「ユリ、誠士さん連れ戻しなさい」

デイエス・イレ・怒りの日

「どうしよっかな」

ユリは瞳子と顔を見合わせてクスリと笑った。
クラブで踊っていたふたりに男が声をかけてきたのだ。

後輩モデルの瞳子はハイネックなのにシースルー（中にビスチエ）、スカートはロング丈なのに深いスリット入りというチラ見せがニクイ。

ユリは、ところどころの布が切り離されたアーミーファッション。パンツ姿だったが、やはりその布も太ももあたりで一旦切り離され、小さなベルトによって下のズボン部分はつながれていた。

その姿は単に露出した娘たちよりセクシーで、ダンスの動きにあわせて時々見える肌の白さに皆の眼が吸いつけられていた。

「一緒に飲みませんか？」

「どうやら、お坊ちゃんたちのようだ。」

ユリたちのような迫力のある女に臆せず声をかけるなど育ちがよい証拠である。

その証拠にクラブの皆はチラチラ見て声をかけたそうにはしていたが実際に行動出来ないでいた。

「ふふふ」

「どうするのおねえさま？」

「ごめんあの子と先約があるの」

そういつてユリがアゴをしゃくった先に、腰まで届く長いストレートな髪をしたネコのような目をした少女がいた。

「え?!」

そのまま少女の隣に滑り込むとユリは顔を近づけて少女に微笑んだ。

「ねっ」

驚いた少女は恥ずかしそうに嬉しそうにうなずいた。

「またあ」

瞳子はあきれたようにため息をついた。

「瞳子もきてよ」

「はいはい」

淡い紫と桃色で配色された室内は少々ゴスロリチックだったが、オリエンタルな家具のおかげで趣味は悪くなかった。ユリのオーダーで数箇所に配された、紫のバラ、カーネーションたちがさらに幻想的な雰囲気をもし出していた。

大抵の少女たちはこの部屋でマジックにかかる。ユリと瞳子のお気に入りなのファッションホテルだった。

「おねえさんたち女王さまなの?」

少女は少しイジワルそうに尋ねた。SMクラブの女王さまのことなのか。

「そうよ」

笑いをかみ殺しながらユリは答えた。

「おねえさんたちすぐくカッコいい 私奴隷になりたい、って思ってたの」

「どれい？ ふふ、じゃあ、私たちの言うとおりになってもらわなくちゃね」

その言葉に少し緊張したのか少女は固くなった。

「大丈夫、何もしないから。そこ、座って」

ピンクのサテン地で作られたソファは大きな花びらのようだった。

おずおずと腰を下ろした少女をじっと見ていたユリは首をかしげた。

「やっぱり、着替えて」

その言葉に瞳子が反応するとクローゼットを開けた。

「こっち来て」

少女は黒い地にレースがたくさん入ったチュニックを着ていた。

「おねえさまはねえ、黒い服が嫌いなものよ。だから、これ着てみて
それは白いブラウスと紺地の胸当て付きスカートだった。
セクシーの対極にある、おろす前の学生服のようだ。」

「こ、これ着るんですか？」

少女が意外そうな声を出した。

「…だよねえ？」これには瞳子も不満があるらしく少女に同意する。
「子猫ちゃんも嫌だって、おねえさま」

「じゃあ、そつからどれでもいいの選んでよ」

「はい」

瞳子は肩をすぼめた。

『清楚系を求めるのは桃子がないせいかしらね』

そうやって人形のように白いワンピースに少女を着替えさせてから、置物のように花のソファに座らせるのである。

ワインを与えてただ座らせる。

BGMに小さくモータールのミサ曲レクイエムをかけた。

ユリと瞳子はベッドの上で寄り添いながら少女に質問をする。

「ミクちゃんっていうんだ。きょうだいいる？」

「うん。おにいちゃんがひとり。でも、私はおねえさんが欲しかったの」

「どして？」

「だって、うちのお兄ちゃんなんてデカくてガサツでクサくてエロくて、もう、サイテー。私は綺麗な人が好きなの。おねえさんたちみたいな綺麗な人が好き」

「あら、私だってガサツでエロいわよ。ほら」

ユリは笑つと瞳子の腕を持ち上げて脇の下をナメた。瞳子がもだえて身をねじった。

そのまま首すじに唇と這わせ肌を吸い上げる。

ミサ曲の不安をあおるような混声が空間に満ちる。

第二楽章キリエから三楽章セクエンツィアは妖しく盛り上がる。

「男の子はキライ？」

ミクは小さくうなずいた。

「男の子はバカか不誠実かうそつき」

ミクの失望がユリには手にとるように分かった。

そう、私もそうだった。

男は自己本位で臆病で 女の夢を理解しない。とても信用できそうもない存在である。

そしてそんな男の世界にのっかっている女…会社の部下たち…にも、ユリは辟易していた。

それに比べてミクはかわいい。自分に素直に生きている。

繰り返す Dies ディエス・イレ iraeのフレーズ

『怒りの日！その日こそ、世界が灰燼に帰す予言が満たされる』

「ユリ、誠士さんを連れ戻しなさい」

百合子の言葉が、ユリに怒りをよみがえらせる。

心を売り渡してまでやってきた結晶を、逃げた誠士に今更渡せなどと

わたしを何だと思っているのか！？

やはり最後は男に頼れ、と？

かすかにお香がたかかれていた。

「な なんだか夢みたい」

音と香りに酔ったミクは茫然としている。

瞳子を味わいながら、ユリは少女ミクから目を離さない。

ビスチエの紐をゆっくりと解く。なまめかしい瞳子の乳房が現れると、ユリは微笑みサイドテーブルにあった大ぶりのトルコ石のネックレスを瞳子の首にかけた。

「ん つめたい」

その凝ったつくりのネックレスは瞳子をゴージャスな女に変えた。ユリは長めの連を広げて丸い数珠状の玉を、乳房の下から乳首を刺激するようにくるくると上下させた。

優雅にも見える上下の動きに、瞳子の先ははつきりとした形をとりだしていた。吐息が熱くなる。ミクは、その固くなった果実のような乳首から目が離せなくなっていた。口が半開きである。

ユリが瞳子の乳首の先をペロリと舐めた。たまらない、というように瞳子は目をぎゅっと閉じる。そのまま何度も乳首を味わうユリ。「ミクちゃんもしたい?」

潤んだ目をしてミクはうなずいた。

「ふふ、でもダメ… どれいさんはね、我慢しなきゃ」
ユリはミクに近づくと舌を出させた。

「瞳子のおっぱいの先を味わった舌よ」
そのままミクの舌先にユリは舌先つけると、何度も刺激をし愛撫した。

「お ねえ さま」

泣きそうな顔をしてミクが哀願する。もうヴァギナがぬるぬるだった。

「曲が“讚美のいけにえ”に変わったわ。さあ…瞳子を神にささげるのよ」

ユリはミクに囁いた。

「ささげる？」

「そう。瞳子にこのスカートをはかせて、そのベッドに寝かせる
といいわ」

ユリがミクに手渡した布は白いオーガンジー。カーテンのようになったボリユームのあるスカートだった。

アイドルの秘密

誠士はシイタイナーランドの東京事務所を立ち上げることになった。トリニティ・かれっじの件で情報の遅れが致命的になることが分かったからだ。

雑居ビルの6階だったがなんとか銀座に事務所を設けることが出来たのは、賛同者たちに裕福層が多かったおかげである。ビルのオーナーと縁ある賛同者が協力してくれたのだ。

そんな誠士の様子を心配してくれていた涼川拓己が改装もそここの雑居ビルに現れたのは、梅雨の雨がよく降る6月のことだった。

「ひとりできたんですか?!」

「ええ。裏通りで車を降りたんで、そこからタタッと。今日は雨なので気づかれにくいし」

誠士は驚いてあいた口がふさがらなかった。

だいたい超アイドルが安っぽい雑居ビルの一室にいること自体、奇妙だった。

縦に流水紋の入ったシンプル和柄Tシャツにジーンズといったカジユアルなスタイルは、拓己のやわらかな清潔感をより引き立てていた。近くで見ると、首から襟、腕にかけての素肌がいつそう浮き立つようにまぶしくて誠士は少しどきどきした。

「手伝いますよ。何から片付ければいいですか」

「え、拓己くんが？」

「そのつもりで来たんですよ」
忌憚なく笑う拓己に茫然とする誠士だった。

事務所の片付けが、ひと段落ついたのは夜7時半も過ぎたころだった。
た。

雨は強く降り続いていた。

誠士は拓己に事務所からほど近い居酒屋に連れていかれた。そこは拓己の行きつけのひとつらしく、いい具合に半個室となった席がしつらえてあった。

「グロツケン教授をひきぬくのに、高倉商事はかなりエゲツナイやり方をしたらしいですね」

1本目の銚子が空になった頃に拓己はトリニティ・かれっじの件を切り出した。

奪われた第一人者。
そしてその後の混乱。

何度面会を試みても会ってもらえなかった、今件トップのユリのことを思い出すと誠士の心は痛んだ。本当に変わってしまったのか？

「ただ…グロツケン教授には“そんな所だからこそ私はいくのだ”と言われたんです」

「そんなところ、って…高倉が用意したトリニティかれっじのこと？」

「ええ。“君たちのことは私はもう安心していい。私の後輩を紹介するからよろしく頼む”とおっしゃって。グロツケン教授は無理解なところからこそ思想の教育が必要だ、と」

「それで高倉の学校を選ばれたのですか？」

「はい」

うーん、と感慨深く首を曲げた拓己は、やがて手酌で杯を次いだ。

「さすが ですね」

「はい。その一言で僕たちがどれだけ救われたか 僕たちは負けたんじゃない、教授に裏切られたわけじゃない。 だから、これからも頑張れます」

その言葉を聞いて拓己はにっこりと笑った。
ひまわりのような笑顔だった。

「じゃあ、僕も頑張らないといけませんね。 ……ねえ、高倉さん」

「はい？」

「これからはプロデューサーする人物が絶対に必要なんですよ。今のままじゃダメだって気づき始めて活動しだした人が色んな方面で出てきています。」

教育、食、経済 個々の活動はすばらしいのですが、今はまだ点の活動です。それをつないでいく必要があるんです。

総合プロデューサーのような。結局はみんなつながっているんですから。僕は高倉さんがやってくたださればなってるんです。

僕と母もそれをして、って思っていますが、なかなか“各方面の仕事”で動けなくて」

酔いのまわった勢いで熱く語った拓己の言葉に誠士はフツと我に返った。

「母？」

その言葉に拓己は一瞬シマッタ！という顔をしたが

「ああ、口がすべっちゃったな…これはちょっとした秘密なんです
が」

拓己は誠士に顔を近づけた。

センシユアルな香りと拓己の吐息が誠士の鼻腔をくすぐり陶醉とさせた。

「僕は大棟社長の息子なんです」

「?!」

拓己の魔力に酔っていた誠士だったが急に目が覚めた。

「え？ あ、あのっ」

美しく妖しい女社長の姿が瞼にうかぶ。

「そっ。 くすくす “あの”」

「で、でも、彼女まだ30代でしょ？どうみても え？ 君の？」

「ふふ、まさかそんな若い訳ないじゃないですか。仮にも僕の母親ですよ。まあ、僕を産んだのが17の時なんで普通より若い母親なのは確かですが」

「信じられないな」

誠士はア然としたまま答えた。
てつきり拓己と大棟広海は恋人同士だと思っていたからだ。

確かに広海は拓己より年上なのは分かっていたが、美しすぎる恋人たちという絵図がふたりにはピッタリだった。その夢のような世界に誠士は憧れてさえいた。

「なんだかシヨック」

「あれ？社長のこと気に入ってました？年ごろ教えてマズかったかなあ」

「いえ 僕はてつきりおふたりは恋人同士だと思ってましたから。理想の恋人って感じですごくお似合いだったから」

「よく誤解されるんですよねー どうしてかなあ？ 似てないからかなあ」

「オーラは似てますけどね」

「オーラ?! ははは、そんな事言う人初めてですよ。面白いなあ、高倉さん。そっかーオーラかあ」

「けど、あんなスゴイ人がお母さんなんて、やっぱり拓己くんは世界が違うなあ」

拓己を憧憬したその言葉になぜか本人は少ししゅんとした。

「そうなんです。今でもあんな人が僕の母親だなんて へんな感じです。」

16歳で渡米して、それから僕を産んで、シングルマザーで僕を育てながら大学院まで卒業したんです。その後も音楽の仕事やボランティア活動をばりばりやって認められてきました」

「すごいね　けど、彼女をそこまで駆り立てたものって何なんだろう？今の彼女の活動を支えているもの、っていつか」

「うーん　思想かなあ」

「思想？」

グロツケン教授が言っていた“思想教育”という言葉が再び現れたのに誠士は気づいた。

「混沌としたこの世界を少しでも秩序あるようにしたい”っていう。

それは色んな哲学や宗教の根底に出てくる感覚と同じなんだ、って母さんはいつからか気づいたんじゃないかなあ　ああ、それと運命とか社会に従順じゃないんですよ、性格的に」

急に拓己は嬉しそうに笑った。

「たとえ負けてもボロボロになっても自分の思ったようにしか生きられない性格なんです。無謀と分かっているもそうとしか生きられない性格」

その顔はまさに崇拜愛といった表情だった。

「そっか……。じゃあ、やっぱ僕たちは彼女たちからは離れられないね」
「彼女たち？」

誠士はユリを思った。

「ええ。きつとそういった思想感覚は女性たちのほうが早くマスタ
ーしていますから。だから もう、そんな人から離れるなんて諦め
たほうがいい」
「どうして？」

「あまりにも魔力がありすぎるからですよ」
誠士は片目をつぶってウインクを試みせた。

「うわっ、困ったなあ… じゃあ、僕はずっとマザコン？」
「残念ながら」

ふたりは顔を見合して大声で笑った。

フェミニスト・カウンセリング

『ひとりで頑張りすぎてはいませんか？』

ユリはカウンセラーに言われたことばをぼんやりと思い出していた。

一ヶ月くらい前から、頭痛と疲れやすさを感じるようになった。

病院では特に異常はなかったのだが、心労が原因かもしれないからカウンセリングを受けてはどうか、と医者に提案されていたのである。

はじめは取り合わなかったユリだが、グロツケン教授がいいカウンセラーを知っている、と教えてくれたので心が動いたのである。

フェミニスト・カウンセリング

女性特有の症状や社会的背景をとらえて特化したカウンセリング方法だった。

小さな事務所を構えたビルに幾人かのカウンセラーがいて、ユリはそこで宮野志津子という、50歳なかばのカウンセラーに担当してもらったことになった。

宮野は一見すると“普通の主婦”にしかみえないような風貌だったが、落ち着いた雰囲気と包み込むようなオーラがあった。ユリは何ともいえない安心感を感じた。

「頭痛が出だした一ヶ月前くらいに何かありましたか？」

「ええっと　そうですね、ある仕事が付いたのと、会社の重要な書類を総取締役の祖母から渡されました」

「ああ、室生さんは重い役職についておられたんですね。それはストレスも大きいでしょう?」

「ええ、まあ　けど…なんていうか…」
ユリは言いよんだ。

一番ショックだったのは「誠士さんを連れ戻しなさい」という百合子の言葉だったことだ。

最初は怒りだけでカモフラージュされていたのだが、今になってみるともつと違う気がした。

「言いたくないことはいわないでいいですよ」
宮野はにっこりと笑った。

「いえ。そうじゃないんです　ただ　その書類のことが直接の原因だとは思えないんです。それより気になったことは、その時祖母に言われた、かつての恋人だった人に頼りなさい、みたいなことなんです」

「恋人に?仕事を手伝ってもらうってことですか?それとも室生さんの仕事をカレに渡すってことですか?」

「?　たぶん…手伝ってもらう…ってことだとは思いますが　その人も会社の重役だったというか　まあ、確かに頼りにはなるんですけど…私としては、色々あって別れた人だし、ものすごく頑張ってきた仕事の成果がその人に取られてしまうような気がして…」

宮野はユリの言葉に耳を傾けてくれた。

全く知らない第三者に自分の心の深い話をする。いや、利害が絡

まない第三者だからこそ出来る話なのだとユリはその時思った。

「室生さんが頑張ってきた仕事を、スツと横からきてその男の人に持っていかれるような気がしたんですね」

「はい。それと私ひとりではやっていけないでしょう、みたいな…能力がない、女だから助けがいる、みたい評価をうけた気がしたんです。それも祖母に」

宮野に促されて口に出してみると色々整理が出来てきた。

「お婆さまはどういう存在ですか」

「尊敬してます。女性も活躍できる、人間らしく生活できる会社と一緒に作っていいこう、って 本当は優しい人なんですけど」

そこまで言ってユリは涙をこぼした。

そう、百合子に対して見捨てられたような気持ちを持っていたことに気づいた。

そしてそれが悲しかったことも。

「お婆さまの話し、続けます？」

宮野がゆっくりと声をかけた。

無言で数回うなずきながらユリは続けた。

「わたし 祖母が好きで、彼女に嫌われたくないのと、出来ないっていうレッテルを受けたなくなっって、その後も一生懸命仕事をやってきました。」

けど 頭はどんどん痛くなるし、最近は朝も起きるのがつらくって

だんだん何をしているのか分からなくなってきました」

「体の具合がよくないと気持ちも暗くなってきましたからね」

「こころ調子が悪いと仕事にも支障をきたしますから困っているんです。新しいプロジェクトも始まって頑張らないといけないのに」

「室生さんはどういった立場なんです？管理職なんですか？」

「はい。いわゆる専務のような立場なんです。……かなり強引に専務になりました。自分のやりたくなかったことも沢山してきました」

ユリは専務になった経緯を宮野に話した。

宮野はそれを聞いて心底感嘆の声をあげた。この日本で、女性管理職が1%にも満たない状況で、目的のためとはいえ、いかにユリが頑張ったかを知ったのだ。

「わたしは 室生さんを尊敬します」

その言葉を聞いてユリは救われた気がした。
ずっと自己嫌悪に陥っていた。

女性部、グリーンリングの人々や誠士には嫌われることばかりしてきた。

大きな目的のためには仕方がない、とは言いきかせてきたが、それでも嫌だった。

これでいいのか？と何度も自問してきた。答えはいつも出なかった。

「これからちょっと見方をかえてみませんか？」

「え？見方？」

「仕事をやっていくのに、どうしたらラクになれるか、です。ひとりで頑張りすぎてませんか？」

さらさらさら

隅田川のながれは大きくて、せせらぎは聞こえないはずだったが、ユリにはそんな音が聞こえた。

あるいは風の音だったのかもしれない。

いつの間にか蔵前橋に来ていた。

そつえば、ここはかつて子どもだった自分がいた町だ。

浅草にも近いこのあたりは、少し前まではまだ下町の風情の残る場所でもあった。

「おねーさまっ！」

不意に腰に抱きつかれたユリはビックリした。

「え?!み、ミクッ？」

「大丈夫ですか？」

大きな目をぱちくりさせて不安そうに下からのぞきこんでいた。

「どうして、ここにいるのっ?!」

「だって、おねーさま、青い顔して川のぞきこんで…」

「ちょっと、考え事してただけよっ!あなたこそどうしてここにいたいのよ」

「私の家、この近くなんです」

「へっ？」

「橋の向こうの本所です。ねえね、今からウチにきてくださいよ」「そういつてユリの手をぐいぐいとひっぱった。

そのままユリはひっぱられる形で橋を歩いた。

上機嫌のミクを見ていると、なんだか言われるままに行動するのも楽しい気がしてきた。

それにしても、夜遊びの時とは全く違うメイク・スーツ姿のユリがよくミクは分かったものだ。

「ここが私のアパートです」

木造の二階建ての新しくはないアパート。

扉をあけたとたん目に入ってきたのは、壁や一面に飾られた飾りやぬいぐるみたちだった。

素では7畳ほどのフロアリングフロアに押入れやユニットバスが付いた、いまどきのアパートだったのだろうが、窓際に置かれた長いテーブルにはミシンが乗り、そのとなりにも布や裁縫道具がごちゃごちゃと取り揃えてある。

そのうえ、オーディオ類、まんが、洋服架け、ベッド、座卓、クッションと物があるのだから狭くて仕方がない。

「ささ、どうぞおねえさま。汚いところですが、座ってください」

きよるきよるしながらユリはベットと座卓のスペースに入るように腰を下ろした。

「ミクは何か作ってるの？」

「はい。いちおーヌイグルミ作家なんです、私」

「えー！？そうなの！」

「って言っても売れてないんですよー 2、3回主婦の友なんかの手作りコーナーに載ったくらいで それだけじゃ食べてけないから夜、まんだらけでバイトしてるんです、あはっ」

ミクはやかんに水をいれながら答えた。

「でも、絶対にあきらめませんよー」

「いいなあ ミクは純粋で自分の夢に正直で」

ユリはひざをかかえて寂しそうに笑った。

「……どうしたんですか？おねーさま？おねーさまは、あんなにキラキラしてたじゃないですか。瞳子さんとおねーさまは……」
「ごめん」

ユリははずかしかった。

もう強気な頃の自分は遠いことだった。

『ひとりで頑張りすぎてませんか』

「ねえミク…… 誰かに頼ることって“弱さ”なのかなあ……」

「……うーん そうですねえー 人によるんじゃないですかあ。いっつも人に頼ってばかりの人はダメだけど、いっつも頑張ってばかりいる人なら、時には頼る必要があるんじゃないですかあ？」

おねーさまも困ってたらミクに頼ってくださいよ。愛するおねーさ

まのためにする苦勞は喜びでもありませんものお」

最後はヘンテコリンな世界にいつていたが、ミクのいう“時には頼る必要がある”ってのはユリには大きな意見だった。

「じゃ、ここに置いてくれる？しばらく？」

「え？！いいですけど、もちろん　きゃー、ホントっ！どうしましょう？　ラブラブ同棲？！やだやだ、シーツの洗濯してませんし、おねーさまのようなゴージャスな方がこんなボロアパートに！どうしましょう？！」

「あ、あのっ！ミク」

「はい？」

「あ、あなたは迷惑なんじゃないの？」

「なんでですか？」

「だって1人の自由な生活が壊れるんだよ。プライベートがなくなるから誰だってちょっとは考えるでしょう！？」

「まあ、そんな事はこれから考えればいいんですよ。あ、お金のことは心配しないで下さい。私が頑張つて働きますから。おねーさまは何もしなくていいんですよ」

なんでこんなにミクはふところがでつかいのか？

バカなのか究極にいい奴か、はたまた色恋が目当てなのか？

・ユリは空いた口がふさがらなかった。

だけど、最高に嬉しかったのも確かだった。
何にも出来ない“ただのユリ”を受けれてくれたから。

自分の余裕もないのに、他人を受け入れる度量のあるミク。
それはとても大きな愛のひとつだったのだから。

級長の本質

「今でも…私は咲田さんに助けてもらおう資格はありますか」
向かい合った会議ルームでユリは麗華におずおずと尋ねた。

「え？」

「私 咲田さんにたくさんお世話になっておきながら、肝心なこと
ぜんぜん話してきませんでした。それどころか、すごいヒドイこと
にいっぱいつき合わせて ごめんなさい」

「そんな、、ユリさま」

麗華は首をふりながら、でもユリがやっと何かを話そうとしてるの
を察知した。

ユリは百合子の“出すぎた杭は打たれない作戦”のことを話した。
そして、ユリを高倉商事の後継者にもくろんでいることも。

「でも専務になってみて、じゃあ、これからどうしらいいか、って
いったら…わからなくなっちゃたんです。 私、どうしたらいい
んでしょう？」

「ユリさま」

「そりゃ、スケジュールは分かっていますよ。プロジェクトやらの実
際の動きも分かっていますし…」

「けどビジョンに混乱をきたしている?!」
麗華が微笑んで口を挟んだ。

「そうなんです。さすが咲田さん」
ユリは下をむきながら唇に笑みがこぼれてくるのこらえた。こんな
感覚は久しぶりだった。

「…よかったです… ユリさまがやっと話してくださった… 全く
もう仕方ない人ですね、ひとりで突っ走る性格人は」
ふー、と鼻から麗華は息を吐き出した。

「そんなにひとりで頑張っちゃって こういう時にこそ、私たち
の出番があるんです！」
「わたし、たち？」

「ええ。もちろん女性部の皆やら西村さんたちやらプロジェクトチ
ームの若手たちです。そりゃ、思想教育はまだまだ出来てないかも
しれませんが、ひとりで抱え込むよりずっといいです。」

もつと人を信用してください。頼りにされると人って力になってく
れるもんですよ。もつとも…コアな話しは一番に私にしてもらいま
すけどね」

得意げに鼻をならす麗華をみてユリは心からホッとした。
なにか からまった糸が少しほどけたような感覚だった。

どこで見た女性だったか誠士は一瞬分からなかったが、夏には不似合いは小ぶりな桃の花を持っているのを見て、ジュディだと気づいた。

ジュディはぼうと桃子の墓の前に立っていたのだ。

「あの ジュディさん？ ですよ？ 桃子の葬式のお花やら演出をしてくださった…」

「え?! あっ」

ジュディは心底驚いた様子で振り返った。

「えっと… 桃子さんのお兄さん？」

「ええ、そうです。長谷川誠士です。暑いなか来てくださっただんですね。どうもありがとうございます」

「いえ」

ジュディは気まずそうに目をそらしながら微笑んだ。

ユリが好きだった誠士 そう思うと、どういった顔をしてよいか分からなかった。もうユリとはぜんぜん会っていないのだろうか？

ただ

「あれ? この人形 ジュディさんですか？」

「いえ」

墓石に座っている…それは小さな女の子の人形だった。

ボーイッシュなショートカットで生意気そうな顔で笑っている。手には桃の花を持っていた。女の子だと分かるのは、スカートを履い

ている、という記号があったからだ。

それがすぐにユリだということがジユデイには分かった。誰かがユリに似せて作ったのは明らかだった。

ユリに似ていると気づいたのは誠士も同じだった。

ただ、ジユデイのほうが鋭かったのは、それが新しいガールフレンドが作ったものだろう、というのに気づいたことだった。

「すみません…お先に失礼します」

こみ上げる思いを隠すかのようにジユデイは立ち去ろうとした。

「待ってください!」

誠士はあわてて追いかけた。

「あの　ちょっと話を聞いてもらいませんか?!　ちょっとでいいんです、お手間は取らせませんからっ」

「けど　」

「お願いします!」

営業あがりの誠士の押しには、どこか断れない気迫があった。

ジユデイは結局近くの喫茶店で1時間近く付き合うハメになった。

「そうですね　ジユデイさんもユリさんとは最近会ってないんですか」

「はい」

「本当にユリさんは、変わってしまったんでしょうか？」

「 私が最後のほうに会ったときは、いつもイライラしてました。 “ そんなツライんだったらもうその仕事を辞めたら ” って言っても “ そんなことできない ” って言うばかり。 そのうちお互い、会うと気づかれしてしまって…連絡を取らなくなっていったんです」

「 変わったのは軽井沢から帰った頃からでした？」

「 そんな昔からだっただかしら？ 私は徐々に変わっていったと思っ
ていたけど…そう…そうだわ… こっちに帰ってきてから、仕事
に復帰してからユリは変わっていったのよ」

ジユデイは記憶を繰るように声を上げた。

「 ……ということはこういった経緯で仕事に戻ったかに大きな理由が
ありそうだな…」

ぼそりとつぶやいてから誠士はコーヒーをすすった。

「 “ なんで帰ってきたの？” って聞いたら “ そろそろ仕事がしたく
なったから ” って笑って言ってました。 私は深く考えもしないで喜
んでたんですけど」

よく考えたら変です。 軽井沢で会ったときは帰ってくる気配は
全くありませんでしたもの。 あっちでの生活も視野に入れてたみた
いだし。 本当に…帰ってくる直接のきっかけは何だったのかしら？

「

誠士は自分と与一との確執がちらりと頭をかすめた。

そう、誠士が辞めてからユリは入れ変わるように高倉商事に戻った

からだ。

まさか

高倉を守るため？

桃子の死で決定的な別れをむかえてしまったが、ユリは仕事に対する誠士の熱意は信頼してくれていたのだろう。だから、安心して高倉を放り出せたのだ。

だが

その誠士が去ったとなれば

ユリが高倉商事を気にするのは自然の成行きだったろうし、百合子も放っておくまい。

しかし、帰ってきたユリは誠士とは全く逆の仕事を敢行していったのではないか？

そこが分からない。

ただ、その道程がユリを事の外傷つけていることは確かなようだった。

「 ちょっと調べてみますよ ユリさんが変わった原因が軽井沢から呼び戻されたことと大きく関係があるみたいですから」

「
」
その言葉に釈然としない顔をしたジュディだった。

「わたしは…原因は知らなくても、もういいです　もう　ユリのことは忘れます」
女の子の人形が^{まぶた}瞼に浮かんできた。

「けど」

涙で潤んだ瞳をしているジユディを見て誠士は押し黙った。

ユリとジユディが特別な関係だったことを不意に悟ったのだった。

「わたしは…ユリが大好きでした…　カッコよくて優しくて頭がよくって…尊敬もしてたかな…　そのユリが…ぜんぜん違う人みたいになって…そんなわたしの好きな…うっん、桃子の好きだった先生のユリじゃない！」

そう言うとジユディは涙を止めることができなくなった。

「う、ごめんなさい！とにかく、わたしはもうユリとは何の関係もありませんから」

カバンを取り上げるとジユディはそのまま駆けて店を出て行ってしまった。

『そんなの…ウソに決まってるじゃないか…どうして好きだったユリさんなら信用してやらないんだよ…』

取り残された誠士は寂しい気持ちを抱えたままジユディに返した。
声にならない声を。

『桃子だったらそんなことぐらいであきらめないぞ。ま、俺に似てしつこいからなあ…特別か。だって俺も桃子も知っているもの、子

どもの頃のユリさんの本質 』

「!!!!!!!!!!!!!!」

不意に誠士は頭に電撃が走った。

級長だよ！

『そうだ！？級長だっ！』

ゴリ男グループ寝返り作戦を思い出したのだった。

融合（リミックス）

ユリの仕事が動き始めた。

少しずつだったが、グリーンリングの予算を増やし、女性部を再編さんし、社員たちの教育を始めたのだ。180度変わったユリに最初は戸惑っていた取り巻きたちもいたが、概ね若い社員たちは切替えが早かった。

もともと、幾人かの年長の幹部たちにはウケが悪かったが、それは仕方の無いことだった。

「楽しみですね。今日のマイケルの講演」

レコーダーや機器の最終点検をしながら麗華はユリに話しかけた。

マイケル・ソードはアメリカでスピリチュアリティとビジネスの融合に最も成功している人物だった。それは、お金の影の部分を排除しても、やっていけるのだ、というビジネスモデルを表明している先駆者でもあった。

もともとヒーラーだったマイケルだが、自分一人で出来るヒーリングには限界があった。

病気になってマイケルに助けを求める人があまりにも多かったが、ヒーリングする以前に彼らは適切な栄養をとっていなかった。

現代は食品たちの持っているパワーがあまりにも落ちていたからである。

だからマイケルは実験的にサプリメントを作って患者に配ってみた。それが、とても評判がよかったのである。そこからマイケルのビジネスが始まったのだ。

付け焼刃的なスピリチュアルビジネスが横行するなか、マイケルは本物だった。

全米を代表するヒーラー12人にも選ばれていたので、ネームバリユーが大好きな重役たちを出席するよう説き伏せるのにも効果があった。

トリニティ・かれっじ

そこが講演場所であった。

今回はグロツケン教授がコーディネイターの総責任者だったのだ。通訳などの手配も教授によるものだった。

「come in!」

ノックをした後に穏やかな声が響いた。

ユリと麗華、そしてグロツケン教授はマイケルの控え室を訪れた。

「本日はどうも、よろしくお願いします」

先頭にたって、にこやかに迎えた男性を見てユリと麗華の表情は凍った。

誠士だった。

「ショウカイします。こちらボクが前からお世話にナてる、ハセガ・セイジさん。と、ツウヤクのトミタシユンスケさん。そして、ミスター・マイケル・ソードです」

何も知らないグロツケン教授はユリたちに誠士たちを紹介した。

マイケルは細身で面長な外見。

68歳だが、とても若々しい雰囲気と子どものような笑顔で立っていた。

マイケルのオーラに引き込まれユリは堅い握手を交わした。

大きなパワーが伝わってくるような暖かい手だった。

その後、誠士とは目を合わせないように握手を交わそうとしたユリだったが、顔を上げたときに一瞬目があってしまった。

何もかも見透かしたような誠士の瞳をみてユリは激しく動揺した。何かマズイことを知られたような、そんな気持ちだった。

動悸が止まらない。

「マイケルは滅多に講演をしません、今回は日本という国に対して活動するべきだ、との感覚があったそうで、オフアーを受けられました。大変忙しい方なので、私たちも有意義な会にしたいと思っています」

一通り挨拶が終わってから誠士がまとめた。

講演は静かだった。

マイケルは言う

「自らの動機と行動を識別する感覚がとても大切だ」

「つまり、自分がビジネスをすることによって、今マイナスの形でビジネスをしている企業が、よりプラスの形にトランスフォーメーション（変容）していくひとつのモデルにできたら、と考えた」

「あくまでもスピリチュアルを実践する場とすること」

実際に動き出した事業内容の細かな動きを聞いていくにつれ、高倉社員たちは引き込まれていった。

そう

皆が幸せになるビジネス方法もあるのだ。

いつも感じていた虚しさ

だが、走るのを止められない企業…市場原理主義というモンスターはどうやっていけばいいのか？

地球とともに破滅か？

一介の歯車にすぎない社員に何が出来る？
いや、少しは出来るかもしれない　これだけ多くの社員が聞いている

まだ

間に合うのだろうか…

「マイケルがやっていることはスゴクいいと思うし、素晴らしいと思う。けど、このままでは、もう間に合わないんじゃないでしょうか？　我々に何かできることはあると思いますか？」

ひとりの社員が質問した。

「それはいい質問だ」

マイケルはニツコリと笑った。

「答えはYesです。これから皆の意識はもっと変化してくる。今もこれだけ多くの人が聞いてくれます。だけど、地球規模ではもっと多くの人が変化しているのです。」

多くの人は未来のマイナス面にはかり目がいくが、そこに感情を合わせてはいけません。学者やマスコミで考えられた“予測”の範囲だけで考えてもいけない。

意識で未来をつくることだ。自分の中にある創造性と可能性にだけ目をむけるべきだ」

その言葉が翻訳されると少し空気がざわついた。

どつやら、納得がいかないようだ。

「あれは　ちよつと左脳人間には理解が無理ですね」
麗華がユリにささやいた。

「　そうね」

「えー、ちよつと私からも質問してみます」
壇上にいた誠士がマイクを持って立ち上がった。

「マイケルさん、それは、意識の力が現実を変える力がある、と、
こういうわけですか？それは今、量子論などで言われている“観測
するものの意識が変わると結果が変わる”ということにも関係して
いますか？」

「Yes．私は物理学には詳しくないのですが、その理論は知って
います。実験で認められているみたいですね。“量子に、こうなつて
欲しい”と思う結果が出ると。
違う結果を予測すると、そっちが出る、という感じですね。」

私が言うのは、もうちよつとスピリチュアルなものことですが、
、理解が難しければ今は、量子論として考えていただいてもかま
いません。」

興味がある方は、超心理学の研究や三大宗教、古代文明などを勉強
なさつたら面白いと思います。いかに意識をつかつて現実化され
たか、が書いてあります」

若い男性社員が手をあげた。

「では、僕たちは明日からどうしたらいいでしょう？　今までやってきた途上国での食料投資を急にやめるわけにはいかないんです」

「慌てることはない。けれど、出来ることから変化をすることは可能だ。儲けを最大限に出すしくみから、80%でもいいから、現地の人を雇用したり、地球環境の負担にならない作付けを考えたりする

確かに商社は規模が大きいので20%ものカットは額面が大きいかもしれない。けれど、その恐れが今のモンスターを作りだしたのです。皆さん分かってください。特に役員クラスの方に分かっていただきたい」

マイケルは無邪気に笑った。

「その20%が無くなったら、どれほど困るんでしょうか？　死にますか？

スピリチュアルは失うことの必要性を説いています。私は死にかかるとまで失いました。

しかし、大きく無くならないと、人間は神やスピリチュアルな存在に頼ろうとしません。

人類の存続を考えればもう危篤状態ですよ。だから世界中で意識の変化があるのです。

視点をかえれば出来ることがいっぱいあります。まず、は思い描くことです。

仕事の方法も、枠の中に入ろう、入ろうとしないようにすれば道はあります。そういったことが、あなたたちはできると思いますよ」

そういつてマイケルはにっこりと笑った。

ユリは冷静にマイケルの言葉を聞いていた。
もう変化は始まっているのだ。

ユリはじつと誠士の眼を見ていた。
そして、誠士も。

ソラミ

「どついつつもり？　よく高倉の社員の前に立てたものね」

ユリは振り向きざまに言い放った。

旧芝離宮恩賜公園の池のほとり。

真夏の閉園まぢかな大名庭園は人影もなく、ビジネススーツのユリと誠士は少し異様な雰囲気だった。

「しかも、グロツケン教授までダメして」

「ああでもないしと君は会ってもくれないじゃないか」

「会う必要がないからよ」

「僕は会いたかった」

その言葉にユリの動きは止まった。
堅い表情のままだったが。

「君がグロツケン教授を強引に引き抜いたこと、グリーンリングの予算を減らしたこと、その他にも色々聞いてた。　最初は信じられなかったよ。君がすっかり変わってしまったことが」

ユリは黙ったまま前を向いていた。

「でも、やっと分かったよ」

ゆっくりとユリは誠士のほうを振り向いた。

「これ」

誠士は何かを差し出した。
水色の紙切れだった。

ユリは無言のまま受け取った。

それは写真が貼られた台紙だった。
子どもが作ったらしいその水色の画用紙には“せいくんさようなら”
“元気だね”とマジックで書かれている。

「なに、これ？　せいくん？」

「見覚えはない？真ん中に立ってるのが俺、で、その横に立ってる背
の高い女の子は……」

誠士が言い終わる前にユリの表情が凍った。

分かった。その少女が誰であるのか
それに付随した記憶が水のように押し寄せてきた。

『あいつらヤベーだろ』

万引き事件のとき、本気で怒っていたせいくん。

『ケガない？』

右足首から出ていた赤い血は妙に鮮烈で。

いや、もつと前
記憶が混濁する。

『ぼくはよわむしじゃない！』

せいくんと同じ目のあの子

ときどきやってくる施設の子。

低学年で

かわいい子なのに　いつも寂しそうで

妹が悪い人につれていかれたからだ、って誰かが言っていた

だから私は、元気になってほしくって

私もいつも寂しかったから。

だから何かをあげたら喜んでくれるかもって

「思い出した？」

「…だったらどうだっていうの」

ユリは乾いた声をしぼりだした。

「いい加減、級長はもうやめろよ」

「なにを言ってる」

「ああ、じゃあ言ってるやる！　これは君だっ！　“るすばん学級”のしつかり級長の室生ユリだ！　君は大きな目的を達成するときには、周りを欺いたり、自分を偽ったり、そんなことを平気でするんだ。

ああ、恐ろしいね、小学生のときからだから、今回のことなんて朝飯前だろう。けど、そのせいで多くの人を傷つけていることも知らないんだ」

「勝手なことを言わないで！　何も知らないくせに！」

「ああ、知らないね。まちやくん奪還のときにどれだけ僕と初音が心配したか、誰かさんはてんで知りはない。あれだって後でゴリ男の報復に初音が巻き込まれたんだぞ。」

今回はもつとたちが悪いね。君を大切に思っている連中、軒並みダメされたみたいなものだ」

「それは、わる」

悪かったと思っっている

そう言おうとする前に誠士にユリは抱きしめられた。

「?!」

「君が好きなんだ」

耳元で聞く誠士の声は優しく、なつかしくて

ユリの胸は満たされた歓喜であふれそうになった。

「ずっと好きだった　かぶと虫の級長、僕の元にまた戻ってきてくれないか」

「あたしは」

そのまま誠士に答えてしまったら…

何もかもあずけて

愛しあえたら

『せんせい』

びくん！

ユリの体が大きく震えた。
同時に誠士の体も堅くなった。

ふたりは目を見開いたままじっと目を合わせた。

聞こえたのだ。
誠士にも。

ふたりはあたりを見わたしたが何もいる気配はない。

「いまの…なに？」

「気のせいさ」

「うそつ、聞こえたんでしょ？」

「大丈夫だ」

誠士は抱きしめる手にぐつと力を込めた。

あれは

桃子だ

「ああっ」

ユリは顔を被って嘆き崩れた。

「やっぱり私たち一緒になっちゃいけないのよ。桃子を あんな風に死なせてしまって その原因となった私たちが、一緒になるなんて 罪深すぎるのよ。桃子は怒ってるんだわ」

「ばかな。桃子はそんなヤツじゃない あんなに優しい桃子が… 大好きだった先生を恨むなんてことあるわけないだろ？ きつと俺に嫉妬してるんだよ、な、桃子！」

夕闇の迫った松林に叫んでみても、うつそうとした空気だけしか答えるものはなかった。

「あたしは耐えられないわ」

ユリは首を振りながら、誠士からゆっくり体を離れた。少し震えている。

「桃子がどうこうだけが問題じゃないの 私、怖い…あなたと私が愛し合うと、また何かよくないことが起こりそうで うん、きつと恐ろしいことが起こるわ」

「そんなわけないだろ」

そう言う誠士の顔も歪んでいた。

「ごめんなさい」
「ユリっ！！！」

ユリは誠士から走り去った。

こわい、こわい、こわい、こわい

ユリは自分の感情が本当は一番こわかったのだ。
あのまま一緒にいたら確実に誠士に抱かれてしまっただろう。
その感覚が。

『そう、破滅に向かうとしても満足しそうな自分がいた』

一方で誠士と自分の関係を許せない、憎んでいる自分もいた。
『桃子がそれを思い出させてくれたんだわ』

相反する感情に気がおかしくなりそうだった。
ユリはこの感覚にフタをした。

そう、

一旦、保留だ。

しかしいつたいあの声は何だったんだらう？

桃子……

新たな風

半年近くが過ぎた。

町はクリスマスの装いをこらし、誠士とユリが出会ってから何度めかの12月がやってきた。誠士は銀座の事務所の窓からその様子を眺めていた。

「イブの夜だというのに、まだお仕事ですか？」

聞き覚えのある声がして振り返ると、戸口には拓己が立っていた。シンプルなジャケットとニット帽姿で素顔を隠していたのを、急にそこでオーラを解き放ったようだった。

いつも驚くのは、それまでの見事な「気」の消し方だった。誠士に対峙するまでは、いつもこうやって銀座を歩いてくるのだから。

「今日は社長に頼まれた書類を持ってきました」

「ああ、メールに書いてあった資料ですね。スタッフに届けさせるって…拓己くん、使うかなあ」

「社長は僕と誠士さんを会わせたいんですよ」

「えっ」

誠士は意味がよく分からなかった。

「どついう事なんだろう？」

「ふふふ」

拓己は楽しそうに笑った。

「あの人は自分の気になった人間たちが、互いにどういったハーモニーを奏でるかを見るのが好きなんですよ」

「よく分からないな、あ、今コーヒー入れるから座って」

「ああ、すみません。僕はこれから、打ち合わせに戻らないといけないんです。ほんと、すみません」

「まだ仕事あるんだ　はあよく頑張るなあ」

「あと、これは僕からのクリスマス・プレゼントです」

拓己はポケットから包みを出すと誠士に渡した。

中はネクタイだった。誠士はお礼を言って結んでみせた。

「どお？」

ロゼ色に小さな模様の入ったネクタイは色素の薄い誠士の瞳と髪の色にとても似合っていた。

「ちよつと歪んでる…」

拓己が近づいて誠士のネクタイの位置をなおす。

『うわっ』

誠士は拓己のアップに耐えられなくなって、目をそらした。

「こんばんは！あっ…」

不意に高い女性の声がした。

短く髪を切った小柄な女性が事務所の戸口に立っていた。

勢いよく入ってきたものの、誠士と拓己の雰囲気は一瞬飲まれたように固まっていた。

それは

遙だった。

瞬間で拓己は気を消した。

「えーと、ああ、遙？　ちょっと待って」

「じゃ、また来ますんで、よろしくお願いします」

拓己は、にやっと誠士に笑いかけるとニット帽を深く下ろし、遙に会釈すると風のように出ていってしまった。

「私：お邪魔だった？」

「いやいやいや　あの人はネクタイを直してくれてただけで」

首を小刻みに降りながら、誠士は支離滅裂の言葉を返す。

「クスリ！相変わらずおかしな誠士さん……とりあえずメリークリスマス！」

にこやかに笑いながら近づくと、遙は誠士の頬に軽いキスをした。

「驚いたな、いつ日本に？」

「昨日よ。春日さんに聞いて、ここの事務所を教えてもらったの」

「裕太に？」

「聞いてると思うけど、私あっちのシュタイナー共同体にいたでしょ？ 紹介してくれたのが春日さんだったから、その報告をしにいったの」

「ああ、だからか。で、旦那さんも一緒に帰ってきたのかい？」

「ええ。ロルフも一緒よ。彼は今、秋葉原にいつてるわ、ふふっ、ばかでしょう？ イブにアキバですって？ ほんとガイジンの考えることとは分からないわね」

「でも遙には合っているみたいだよ」

「ふふ、まあね」

すっかり印象が変わった遙に驚く誠士だった。

桃子が死んだあと、しばらく病人のようになっていた遙。

逃げるように日本を飛び出した遙が向かった先はドイツだった。

遙には外国といえば、誠士に連れて行ってもらったドイツしか分からなかったのだ。

しかし、そこで遙は徐々に生き返ったのだった。

ドイツでの生活に慣れたころ、誠士たちがやっていたシュタイナーの共同体に出会い、どんどんと興味が出てきたのは皮肉な話だった。

語学を勉強しながら、共同体での作業にも参加させてもらう。

そんな時出会ったのが、実習生のロルフだった。

「あのね、実は私たちこっちでシュタイナーランドを手伝うことになったの。春日さんに協力して欲しい、ってずっと言われて……そ

れで今回帰ってきたの」

「え？じゃあ、ロルフも一緒に？」

「ええ」

遙はうなずいた。

それからしばらくシユタイナーランドの詳しい話が続いた。

「ところで、もうユリさんとは結婚しないの？」

遙は少し酔ってきていた。

土産に持ってきたドイツワイン。

それをふたりはちよつとづつ飲みながら話をしていったのだ。

「ふっ」

誠士はあまりにも単刀直入に聞く遙に思わず笑ってしまった。

「ユリさんが結婚してくれないんだよ、っていつか会ってもくれない」

「なに、それ？　それってパパやあたしに気兼ねしてるから？」

「いや、そんなことはナイと思うよ」

「もしかして　桃子さんのこと？」

この時ばかりは遙の声も小さくなった。

「さあ。そうかもしれないし、違つかもしれない。　あれから色々あったから…　ユリさんは今、会社を改革していて、そっちに情熱が向いている。きつと恋愛をする暇なんてないくらい忙しい。だ

って、すごい事をやるうとしてしているから…」

誠士の顔をしばらく無言で見ていた遙は、すぐになっこり笑った。
「なあんだ」

「やっぱ、好きなんじゃない。だったら頑張るしかないね」
遙は立ち上がった。

「よかったあ　ちょっと心配したんだ。誠士さんユリさんのこと忘れて、さっきの男の子にのりかえたのかと思った。だって、ちらっと見たただけだけど、涼川拓己に似たすごい綺麗な子だったでしょう？…あれは危ない…」

「いや、彼はそうじゃなくて…」

「はっ！もしかしてホンモノ？！」

「えっ…いや、あのっ」

「うっそー！　やだ、そういえば誠士さん涼川拓己の仕事してたもんねえ。きゃー　びっくりー！！！」

「あのっ遙ー！」

「だったらスゴイ秘密！涼川拓己の恋人はオトコだった！　あ、けどその恋人って私の元・夫？！　うーん、複雑！これは　私はどういった位置をとればいいんだろう？？」

「だから違っって」

ひとりで興奮している遙を止める言葉を、誠士はもはや見つけられなかった。

Take my revolution 1

「ユリさま」

颯爽と現れたユリは髪を短く切っていた。

昨日までは長く伸びていた髪をひつつめたり、夜会巻きにしたり、パーティでは巻髪にしたり、と華やかを演出していた。

「受付の女の子なんて口をあけたままだったんです。そんなにビドイかなあ」

「いや、ビックリしたんだと思いますよ。かつこよすぎて」

麗華はユリに見とれてぼうっとなった受付嬢を想像した。

「けど、何か心境の変化でも？」

「いや 冬だから。ほら、乾かすのにラクでしょう？」

「はあ？」

意識的には自覚はないユリだったが、何かが変わったのは事実のようだった。

もしかして戦闘態勢に入った無意識表示だったのかもしれない。

その証拠にきりりとした横顔は、一層輝いて見えだし、潔さに磨きがかかっていた。

最近は抵抗勢力が露骨になってきていた。

そう、新たな流れに対して警戒し脅しをかけてくる権力組織。

ある銀行は融資を公然と断ってきたし、外的な会議では必ず息のかかった人物の妨害工作にあい、事業はスムーズに進まないよう邪魔が入る。

高倉の役員や社員の中にも、脅しや買収にあっているものもいた。マイケル・ソードの講義から、その動きは活発化したようだった。

「思想の影響化をヤツらは一番怖がるのよ」

「いまだにレッド・パージ*気分なんですよ！ほんとヤツらの恐怖心と欲望には辟易しますっ！」

*1949年からはじまった共

産主義に対する公的弾圧化

麗華は憤慨していた。

「松永さんも“危険人物”に指定されたらしくって、色々邪魔されてるみたいです。怒ってました」

ユリが世話になった経営コンサルタントの松永謙二は、齒に衣を着せぬ物言いをするのでマスコミを使っての思想操作ともみなされたのだろう。

「専務、取締りがお呼びです」

ユリに内線が入った。

「この事業計画はやり直ししてください」

「え?!」

与一に提出していた、来期の事業計画書の草案を返された。

「どうして　どこが、だめですか？」

「すべてだよ。どの部門も経常利益が少なすぎる」

「いいえ、この経常利益でも回っていきます。ちゃんと理由を書いたハズです」

「そんな理由はいらない。この計画書では経営企画部から返されるに決まっとる。第一これでやったとしたら株主が黙っておるまい」

「だから、株主には私からお話します。経営企画部にも私から説明しますから」

「だめだ！」

与一は一喝した。

今までにない力強さだった。

『ああ、この人も…』

ユリは背後の力を感じた。

恐れは頑なさを生む。

「…わかりました…」

一旦、ひきさがったユリだったが、心の中では全くあきらめていなかった。

なにか他にもまだ方法があるハズだ。

ユリはこの件に関して楽天的だった。
なぜか絶望やあきらめは湧いてこないのだ。

それは

色々な仲間を見ているからかもしれない。

マイケルも松永も　まだつながっていない多くの仲間たち、そして、誠士…

きっと流れは押さえられないだろう

そう感じるから

「ね、おねーさま？」
「え？」

気が付くと、ミクの過剰なまでのマスカラの目が笑っていた。
今夜は涼川拓己のシークレット・ライブに来ていたのだ。

「ああ。なに？」
「もう！タクミのライブですよ！ チケット取るのものすごいー
ーく苦労したんですから！ ファンクラブじゃ外れたから、ラジオ番組の優先番号にかけてね」

ミクはいかにこのチケットが手に入りにくかったかを、力を込めて

しゃべり続けていた。

アイドルには興味のなかったユリだったが、グリーンリングの協賛者として涼川拓己のことは興味があった。あれからちよくちよくと拓己の行動はチェックしていたのだ。

ほんの2000人ほどしか入らない会場。

シークレット・ライブだから小さなキャパは不思議ではないのだが、それにしても突然すぎる催しだった。

ほとんど告知されなかったファンたちは、外で法外な値で売っているダフ屋に群れていたが、すぐに警察がきて逃散した。拓己サイドは絶対にダフ屋を許さなかったのだ。

それでも、ネットオークションなどでは100万以上の値につりあがり、後で大きな話題になることになる。

会場の明かりが落ちた。

大きく上がる歓声。

ソ、ド、ラーソファ、ソ、ド…

オルガンが優しい音色で広げたかと思うと、すぐに鐘の音が響きわたった。

聞き覚えのあるメロディが、鐘の音で続く。

ハイ・ジュード

澄んだ音色は鉄琴のようだ。
演奏しているのはどうやら拓己らしい。

クリスマスシーズンに聞く、鐘の音にかけているのだとしても、美しすぎる調和音だった。

会場は一瞬で静まりかえり、フレーズが繰り返される。

間奏のあと拓己は、歌い出した。

Hey Jude, don't make it bad
なあジュード、悪くとるんじゃない

Take a sad song and make it better

悲しい歌だつてマシにできる

Remember to let her into your
heart, then you can start to
make it better
あの娘を心の中に受け入れることだ、そうすればいい方向に踏み出せる

静かに、

耐えようもなく優しく

拓己は歌った。

Yeh yeh yeh yeh yeh yeh
Dada dada dada

N a n a n a n a
h e y J u d e .

最後はみなと合唱になっていた。
繰り返されるd a d a d a d a d aの歌詞。

フレーズが終わると大歓声が沸き起こった。

「拓己！拓己！」

沢山の人が泣きながら叫んでいた。

「みんな、ありがとう！」

興奮した顔の拓己が汗をぬぐいながら手をあげた。

Take my revolution 2

「今日は いつもと違った形のライブになります。だから
楽しみにしておいてください」

わぁー、と声があがる。

待つてました、といわんばかりの期待の声だった。

「ちょっと最初はベタなんですよね ひかれるかもしれないけど、
まあ、我慢して付き合ってください」

拓己は笑いながらしゃべった。

いいよー、ベタってなにー、 各々の歓声を引き受けながら、拓己
は大きく手をあげた。

「では、スタート！」

天井からスクリーンが出てきて、なにやらVTRが映し出された。

「こちら、国会前の涼川です。いま、話題の“こんなニッポンに誰
がした”疑惑の証人にこれからインタビューをしたいと思います。
まずは、労働者派遣法を提唱した元太川総理に聞いてみたいと思っ
ます」

メガネに背広姿の拓己がマイクを抱えて、趣味の陶磁器を持った太
川大臣に扮した人物に食いつく。どうやら太川大臣はフォースのメ
ンバー・フリッツのようだ。

気づいたファンの小さな悲鳴が洩れた。

「あなたの内閣で、労働者派遣法の下地が出来て次の内閣で可決されたのですが、今のこの使い捨て労働、どう思っておられるんでしょう?」

「なんだね君は。僕はいま陶芸に忙しいんだ。派遣?それは労働者のニーズとして、そうなったんだ。自由に働けるよう規制を緩和したんだ」

「では労働者のニーズがあったという証拠があるんでしょうか? 本当はアメリカや財界などから“規制緩和してもつと労働者を安く叩け”って言われたんじゃないですか!」

「な、な、何を言うんだね!君は失敬な!私はもう帰る!釜の火入れが忙しいんだ」

「ああ、ちよつと!」

「うーん うまく逃げられてしまいました。では、次いきます! 次は大物ですよ。な、なんと!あの大泉さんです!」

肩で風を切りながら「ごくろう!」と片手をあげるあのパフォーマンスの元総理に拓己アナは切り込む。

今回は裕也が元・大泉総理らしい。

「いやあ〜 かんどーかんどー ナイス・パフォーマンスだったね」
「あの…何がナイスなんですか? 太川さん、逃げただけで答えてませんが」

「いやあ〜太川さんは、なかなかだね、ハイセンスの持ち主ですからね。働く、ということに関しては少しニガテな部分もあった

のではないかな」

「じゃあ、大泉さんが行われた悪行の数々はハイセンスだったから許された、と言われるんでしょうか？いけますよ？」

派遣労働を製造業に拡大して更に正社員を減らす方向にしました。健康保険料も2割から3割へ、中年期以降には介護保険などと言って更にお金を取ることにしました。

年金の保険料もドーン上げましたし、そのくせ大企業の法人税はドーンと下げました。

テロ措置法とかで自衛隊を海外に派遣したのもアナタ、アナタですねっ！」

「いやあ〜 よく口が回ったねえ〜 はっはっは。 自衛隊は国際貢献だよ君。それに、お金がないのに高齢者はどんどん増えるからねえ。涙を飲んで税金をあげるしかなかったんですねえ」

「しかし、自衛隊が出て行ってテロはなくなっただんでしょうか？ だいたい憲法違反では？ それに予算がないのを高齢者のせいにしていきますが、それならなんでお金持ちの税金は安くしたんでしょう？ ヘンじゃないですか？」

「何も分からんクセに勝手なことを言っちゃあ困るよ君。話にならんね」

「あ、待ってください、総理！」

そのままスタスタと「ごくろう！」を繰り返して、大泉総理の裕也は去っていった。

「どうも大泉さんにも、逃げられてしまったようです。 二ついった状況から、多くの人は与党ではだめだ、こんどは主民党にしよう、とか思っています。」

しかし、本当に主民党なら政治は変えられるのでしょうか？ちょっと内情をのぞいてみましょう」

そういつて話題の、主民党の本部の設定、と書かれた建物に拓己アナは入っていく。

「あ！鷲山幹事長、お話を あ の、尾沢代表にインタビューしたいんですが」

廊下を歩いていた鷲山幹事長に扮したソンミンにマイクを向ける。

「ああ、無理無理無理 代表には数ヶ月前からきちんとアポをとって、身元を十分調べてからじゃないとね、ダメですよ」

「そうですか、じゃ、また出なおしてきます」

「ちよっと待ったあ！」

皆がくすくすと笑う。

「なんで僕に聞かないの？」

「え？」

「なんで、僕に、インタビュー、し・な・い・ん・ですか？ 僕、幹事長、フリー、今日の前にいる」

「えーと 「拓己が薄ら笑いをうかべる。」

笑い声が大きくなる。

「まあ、いつか…」

「“まあ、いつか”？」

「ああ、いえいえ…では、鷺山幹事長にお聞きします。鷺山サブレはなんで売れなかったんでしょう？」

「ちがーう！」

「え？」

「なんで?! なんでサブレなの?! 違うでしょう?」

「ああ、はい。では、なんで鷺山缶コーヒ―は売れなかったんでしょう?」

「だからあ」

「だから! 与党とのハッキリした大きな違いは何なんですか! 道路特定財源のこと、とかテロ特措法に反対しているとか、そんな“意見の違いレベル”では分かりません!」

「ギクリ! そ、それは」

「政党としての大きな違いが国民には伝わってこないんですよ! 官僚の言いなりになっていない? それが何か?」

「なんだかなあ、ここにきて阿房総理と尾沢代表の密着度も連立を彷彿させるんです。そういつた雰囲気か“違いが分からない”といわれるゆえんでは? でもそれって問題じゃありません?」

「うう」

「みなさん」

ここであるりと拓己アナがカメラ目線となる。

「僕は政党助成金や政治献金を大きく受けている党や議員は問題だ
と思いまーす！」

なぜかというと！ ずばり！お金をもらうと人間はもらった人に対
してエラソーに言えなくなってしまうからでーす」

じゃ、じゃ、じゃーん

音楽がなり「マネーマネーマネー」のイントロが始まる。

VTTRの中の拓己アナやフォースのメンバーが仮装のまま寄ってき
て、踊りはじめた。

イントロが終わった時点、歌詞がはじまる直前にスクリーンがバサ
リ！と落ちた。

そして現れるフォース！！！！

きゃああああああ

money それは不思議な魔力

money それは苦しい呪縛

僕たちは一生、働かされるんだらうか

愛も心も夢も忘れ

それじゃ意味ない人生だ

それじゃ悲しい人間だ

あー だけど思っんだ
あー あるさユートピア

make a dream
with us }

『うっそお』

ユリは茫然としていた。

まさか拓己がここまでやるなんて…
ずいぶんと思っ切ったことをやるもんだ。

政治色を出すアーティストは日本ではまだまだ異色の存在だった。
ここにきて、それに打って出るとは、まさにシークレットプラン。

内容はどんどんと過激になっていった。

拓己が派遣社員の青年になって繰り広げられるミュージカル仕立て
のライブ。

祖母の介護、農家をやっている両親の苦悩 役をすべてフォー
スのメンバーでやるので、一応コメディタッチであった。

途中、客席にいたある政治家にスポットがあたった。

「あのおじさんが助けてくれたんだよ」
そして苦笑して、その政治家が席を立って挨拶する、というものだ
った。

それは
あきらかに意図的な演出であった。

『直接的すぎる』

能天気な騒いでいる少女たちをバックにユリは、不安を感じていた。拓己にこの先、恐ろしいことが起きなければいいのだけれど…

「最後に皆で歌いましょう！ イマジン！」

入り口で渡されていた歌詞カード。

最初はクリスマス・カードかと思った。

見開きになった白いカードの中には

“今夜の出会いに感謝します。あなたに愛が降り注ぎますように”

涼川拓己

上のページにはこう書いてあった。

そして下のページにイマジンの歌詞が英語と日本語で書かれていたのである。

みんなが歌いはじめたジョン・レノンの「イマジン」は美しく感動的だった。

……
I hope someday you'll join us
and the world will be as one

ビー・アズ・ワン……ひとつに

青いライトに照らされて、天井から静かに雪が降ってきていた。

インディゴ・チルドレン

小田原を出ると、所々に積もる雪と冷たい山の空気に包まれた景色が現れた。

静寂の風景に誠士のはやっていた気持ちはしだいに静かになっていった。

タクシーは広海に指定された箱根の旅館に向かっていった。

今朝、拓己からのメールに添付されていた動画を見て誠士は度肝を抜かれた。

それは、昨夜行われたというシークレット・ライブの模様だった。

『21世紀のジョン・レノンになるつもりか?! こんなことをして この後どんな事が起こるか』

拓己の身が心配であった。

案の定、新聞やTVでは昨夜のライブは一切取り上げられていない。稀にみる大きな話題なのに、だ。

あまりにも不自然で明らかに意図的な報道規制が働いているのは間違いない。違いなかった。

その点インターネットは盛況であった。

掲示板やブログの書き込み、ライブで紹介された議員の政党HPは大騒ぎだった。

You Tubeには早々にライブ映像がUPされ、アクセス数はうなぎのぼりだった。

新幹線の中でざっとネットサーフィンした感じでは、概ね若者の反応は良好。

“政治家の違いがよく分からなかったけどライブでよく分かった”

“これからは　さんを応援しよう”

“　さんのHPにいったら分かりやすく政治のことが書いてあった”

ブログ派は慎重論が目立つ。

“あれは明らかにやりすぎ” “アイドルが政治を語るのは慎重にすべし”

“政党の支持は自由であるべきだ。あれではファンへの押し付け” などなど

しかし気になるのは

多くの記事に対してコメント暴言らしき介入がかなりあることだった。

そこに右的チンピラものつかり、嫌なオーラをかもし出していた。

これがネットにはびこる抵抗勢力の末端事業というわけだ。

ついた旅館はみるからに豪華な日本建築で、犬避け格子のある玄関から、年代ものの幾何学格子枠の入った廊下の形状はすばらしく、すべての調度や造りに隙がなかった。

『よくこんな旅館があったものだ』

誠士は建築の完璧さに圧倒されながら奥部屋の“椿”に通された。

襖をあけると、部屋には広海、拓己、そして白髪の西洋人の男性が座っていた。

真っ先に拓己のライブの事を聞こうと思っていた誠士だったが、第三者の存在にそうもいかなかった。

上品なるその紳士の名前はジェフリー・フリーマン。

世界中で金融関係の仕事をしている、と広海は誠士に紹介した。

名前の自己紹介が終わったあと広海は流暢な英語を使って、笑いながらジェフリーに確認した。

「今はニューヨークにいるの？」

ジェフリーは穏やかな笑みを湛えながら、少し困ったように答えた。

「Yes この調査が終わったら、また別のところに移るつもりだけれどね」

「全く忙しい人ねえ」

そういった後、広海はくるっと誠士のほうを向いて日本語で補足をした。

「日本で調べたいことがあるから協力してって言われているのよ」

「調べたいこと？」

「ええ。それはジェフリーが今から話すわ」

穏やかなジェフリーのブルーグレイの瞳は温かさと人に対する愛情があふれていた。

ひきこまれた誠士はジェフリーに微笑みかけた。

「あなたは 信用のおける人だと、新しい流れに関わっている人だ

と、ヒロミから聞いています。だから　これから話す内容は他言
しないで聞いて欲しいのです」

「I promise」
わかりました

そしてジェフリー氏は話しだした。

私はユダヤ人です。

ご存知のようにユダヤ人は世界中で色々な火種になっていることは
ご存知のことと思います。有史以来、ユダヤ人は歴史の表と裏で多
くの働きをしてきました。過去のことは色々なところで本なども出
ているので詳しく話しをするつもりはありません。

ただ、現在でも多くの富と権力を掌握しているユダヤ人がいること
は念頭においておいてください。それは世界中でほんの数人といっ
た人たちなのです。

その人たちの中には闇と光が混在しています。

闇は多くの人を不安であやつり、貧困と病苦と恐怖に陥れ、そして
自分たちで操作しやすいようにしようとしています。地球が壊れな
い程度の戦争を商売の道具にするのもこの一味です。

彼らはオイルマネーで力をつけたアラブ富豪が自分たちにとってか
わるのではないか、というのも心配でたまりません。またロシアや
中国といった思想を統治している国も困ります。自分たちの力＝金
による侵略がうまくいかないからです。

そして光は全く反対の方向です。

世界中でおきている人々の意識の变革をすすめる方向にいます。

物質的なものに幸福を求めても意味がないことを皆はもう知っています。不合理な富を得れば、それは地球を結局は破壊していることになりパラドクスに陥ってしまうのです。みんなで平和で幸せにならないとダメだということです。

そうすると今までの三次元的な意識では解決しないのです。多くの革命家が志を成功させても必ず歪んでいきました。そうです、この世はいつも悪が、恐れが、立ち上がるようになってい

だから、そうではないもつと次元の高い意識体に進化しなければならぬのです。

亜流ですが、インターネットはもうひとつの意識体として容認され、情報は世界中をすごい速さで駆け巡りはじめました。ネットさえつなげれば世界中の人たちの意識とつながることが可能になったのです。

中東で戦争しか知らなかった子どもでも、ネットをみることで出来れば“この戦争は正しいのか？自分はこれでいいのか？”と世界に問うことも出来ます。求めれば意識はつながるのです。

そしていま

新しい子どもたち、が世界を変えようとしています。

「新しい子供？」

誠士は目を輝かせた。

ひとことという進化した人間です。

DNA自体が変化しているのです。新しい子どもの中には染色体を変化させた子どもたちがいるのです。

その子たちが生まれた経緯は色々ありますが、エイズが大きな影響を与えたことは確かです。エイズに感染した母体から生まれた子どもは、必然的にHIVのキャリアとなります。

その資料をごらんください。1995年の“サイエンスニュース”に発表された記事です。1歳の時はあきらかに感染していた男児が4年後には全く治癒していたということです。HIVが全く見当たらなかったのです。

それどころか、他の病気に対する抵抗力も普通の人の3000倍以上もあったのです。

染色体をしらべると明らかに変化していました。こういった子どもや大人が今や6000万人はいるということです。

「お、大人も？」

拓己が口を挟んだ。

はい。100匹目の猿の現象のようです。

自発的突然変異が起こった時期や場所周辺では、大人もなぜかスイッチが起こります。

エイズの子どもだけでなく、インディゴ・チルドレンと言われる子どもたちや、中国やロシアでも突然変異した子どもたちがいます。

重要なのはこういった突然変異をした子どもたちはサイキックな能力にも秀でていることです。親の思考を読み取ることができたり、耳や脇の下でモノを見ることができたり、物質を瞬間移動させたりできます。

これは公の機関が行っている実験で証明されています。つまり、この子どもたちは意識化したことを物質化する能力に秀でているわけです。それはすばらしいことです。

我々は、もう三次元的な意識を離脱する時期に来ているのだと思います。

ジェフリーは大筋を話すと一旦トイレに立ち上がった。

カワセミがちいちいと鳴いた。その遠く後ろでカラスの声が重なる。かすかに聞こえる小川のせせらぎも、静けさに拍車をかけ、なにか異次元にきたような気分だった。

「社長はジェフリーとどこで知り合っただんですか？」

「あるニューエイジのカリスマの講演会でよ。一応、名刺を交換はしたんだけど、まさか彼から連絡があるなんて思ってもみなかったわ。実は彼ってびっくりかえるようなビップよ」

「いいんですかね。こんなトコに来ていて」

拓己がヒトゴトのように笑う。
自分こそ、あんなライブをやった人間なのに。

「いやあ、お待たせしました」
ジェフリーが帰ってきた。

「本題はこれからなんですよ。じつは私の孫娘がそのインディゴチルドレンかもしれないんです」

「ええっ!!!」
3人は息を呑んだ。

「よく分からないのですが、、彼女は日本人の生まれ変わりだ、
というんです」

「生まれ変わり？　つまり前世の記憶がある、ということですか？」
広海がたずねた。

「ええ。もうじき4歳なんですけど、“私は日本人の女性だった、
大きな木のあるテンプルのような家にいた”っていうんです。

日本語のような言葉も話します“i i n u”とか“a a t o”とか、
、日系人の友人に聞いたら“d o g”と“T a n k y o u”で
はないだろうか、と言っんです。確かに“i i n u”と言ったとき
に犬がいたそうなんです」

「“i i n u”は犬で、“a a t o”はありがとう」
「それと…この写真の女性をみて激しく反応しました」

ジェフリーは持ってきていた雑誌を広げた。

それはエコノミー系の雑誌のようだった。

「あっ！……！」

誠士は驚いて倒れそうになった。

それはユリの写真だった。

「s e , s e , s e , s e 」と繰り返すんです

まさか、

まさか、そんな……

「あら、この人高倉財閥のお嬢さんじゃない？ね、長谷川さん？」

「……ええ」

誠士は青い顔をして答えた。

「OH！やはりヒロミはご存知でしたか。なぜか今回のこと件では、あなたの顔が浮かんだんです。それで」

ジェフリーは、どうにかしてユリに会いたいことを広海に話し続けていた。

誠士は茫然としていた。

『ジェフリーの孫娘は

ももこなのか…』

月夢

「さつきジエフリーの前では聞かなかつただけど、長谷川さん、あなたジュフリーのお孫さんの身元に思い当たるフシがあるんじゃないか？」

ジエフリーが拓己と連れ立って散策に行った後に広海は誠士にたずねた。

「ええ」

誠士は広海に妹であるかもしれないことを話した。

「…まあ、まさかドンピシャであなたに会うなんて さすがジエフリーのシンクロ力はすごいわね。けど、どうして高倉のお嬢さんなの？」

「桃子はユリさんを慕っていたんです。僕よりもずっと 強い思いを残して死んだのだったら生まれ変わっても彼女を求める気持ちは強いと思います」

「……………ねえ…」

広海は少しトーンを低めた。

「さつきから感じていたんだけど あなた、そのユリさんと愛し合っていたんじゃないの？」

誠士は驚いて息を呑んだ。

そして、少し悲しい目をして視線を落とした。

「やっぱり」

しばらく広海は何かを考えているようだった。

「困ったわねえ… ジェフリーに何て言おう…」

ユリは夢をみていた。

うっそうとした森の中にある階段を登っていくのである。四方を山々に囲まれた、それは神社の階段だった。

そう、待っているから。

「ほら、大吉です、願いがすぐに叶う、ですって」

桃子が笑って賽銭箱の前で、おみくじを差し出した。

「えー私のは何だろう」

そういつてユリは自分のおみくじを見るのだが、どうしても文字が読めない。

「身近な人が力になってくれる、ってことは、いいきざしじゃないかな」

「そんなこと書いてあるの？桃子はこれ読めるの？」

「うっやっやっね…」

桃子がユリの手からくじを取り上げて、手の中に入れて何度かこする。

「指でなでると文字が浮き出てくるんです」

「へえ〜」

そんなみくじはないハズなのに夢の中のユリは妙に納得していた。

「私もやってみよう。こうかな？」

指でみくじをこすってみる。

「ああ、本当だ。書いてある」

種をまき苗を植える月日の恵みと努力により実るように輝かしい未来が展開しようとしています。しかしその前に試練が訪れるでしょう。充分に将来にむけて焦ることなく進みましょう。

恋愛 周囲の理解が大切

方位 南か北の人

失物 おそくとも出る

おなじみのおみくじの言葉がなぜか読めてくる。

内容を気にもとめないでいると、今度は場面が変わっていた。

「あのイノシシは夜にやってくるから、ここに罾をしかける」

美しくたくましい若い男性がイノシシ退治の手順を説明した。

その目は、桃子と同じものだった。

どこか遠い昔のような… 邪馬台国のような衣装をつけた人々が、

周りを取り囲んでいた。

「エサを喰っている間に矢を射つてくれ。その後は私にまかせろ」
ユリはその男性にキツパリと言い切った。

その男性は少し意地の悪い笑みをうかべた。

「おまえに出来るか？」

「ああ、やる」

ユリはあきらかに女のようにだった。

しかし、腕には自信があった。

「まあいいだろう。だが、おまえが失敗したら、おまえは私の花嫁となるんだぞ」

「分かっている」

そうだ。

失敗はできない。

もし、しくじたら… 私は終わりだ

なぜだかそう思った。

長く赤い髪をぎゅっとしぼる。

私は赤い月の子。

人は不吉だと忌み嫌うが、それが大きな力の元なのを誰も知らない。
そう彼を除いては。先ほどの男が瞼に浮かんだ。

満月の下、誰かの放った弓矢がまっすぐに巨大なオスイノシシに向かった。

きれいに横肩に命中した瞬間、イノシシはきゅーん　という音を
発した。

それはどこか寂しい声だった。

声を聞きとめる間もなく矢は雨のようにイノシシに降り注いだ。
5本、9本、15本

激しく暴れるイノシシにユリは立ち向かう。
大地を蹴った

「はぁー」
首を刀でなでつけた瞬間

イノシシと眼があった

それは澄んだ太陽の眼だった

ドサリ…

イノシシはそのまま倒れた。

どこかの草むらでユリは泣いていた。

さっきのイノシシは愛しい人のはずだったのだ。

それが死んでしまった。
私が殺したのだ。

そう、あの人が殺させたのだ。あの人は彼を殺したがっていたから。
悲しくて涙がとまらなかった。

そんなユリの頭上には暖かい月の光が降り注いでいた。

「泣かないで。僕は大丈夫だから、
どこからか優しい声がユリに響いてきた。

誠士は泣き声を聞いた。

悲しみに溢れた、その感情は誠士のものなのか、他の誰かのものか
分からなかった。

ただ自分の為に誰かが泣いているような気がした。

「泣かないで。僕は大丈夫だから」
愛しい思いを込めて語りかけていた。

そこで目が覚めた。

異様なほど明るい光が障子から輝いていた。
障子をあけると黒い木々の上に、満月が煌々と輝いていたのだ。

『そうか 月明かりか』

深い森に囲まれた旅館は、恐ろしいほど静かで冷徹な空気が満ちて

いた。

隣ではジェフリーが深い眠りにについている。

「あつ」

ユリは自分の泣き声で目を覚ました。

窓からは眩しいほどの月明かりが差し込んでいた。
そう冴え冴えとするほど…

夢の内容はもうぼんやりとしか思い出せなかった。

桃子がいたこと、そして、誠士もいたような気がする。

誰かが優しく抱きしめてくれたことは覚えていた。
太陽と干草のような匂いがしたことも。

「!?!?」

不意に家の中の空気が変わったことをユリは気づいた。

「お婆さまっ?」

部屋を飛び出ると、百合子の寝室に駆け込んだ。
目に飛び込んできたのは、ベッドで半身を折るよううつ伏せになっ
ている百合子の姿だった。

「お婆さまっ?」

肩をゆすってみたが反応はなく、胸に当てていたであろう右手がタラリと落ちた。心筋梗塞だったようだ。脈を取るとすでに事切れていた。

そのまましばらくユリは茫然とそこに立っていた。

百合子が… 祖母が死んでしまった…

世界を変える、と言ったお婆さまが…

わたしはいつたいこれからどうしたらいいの？

波

年が明けてからどう過ごしていたのかユリはよく覚えていない。

百合子の葬式と遺産相続、会社の役員人事の変更…

あまりにも目まぐるしく日々はすぎ、気がつくとも菜の花の咲く桃子の命日に近づいていた。

「相談役の動きには重々、気をつけてください」

四谷の交差点に差し掛かった頃、運転していた暁生が口を開いた。

取締役を下ろされた与一は、商事の相談役となっていたが、すべての権限をユリに奪われたウラミは大きかった。

今でもユリは激しく激昂していた与一のパワーに飲み込まれそうになる。

弁護士が遺産の相続の公開を行ったときの与一のショックはそれほど大きかったのだ。

与一には法定相続ぶんが与えられる形となっていたが、遺言信託や会社を中心とした財産、権限は巧妙にユリに託すような形が取られていた。

自分の相続ぶんを放棄してユリに残すように百合子に頼んでいた美雪の話しも寝耳に水だったのだろう。

与一は、母と姉に裏切られた気分だった。

遺産で揉めるのはお金の問題だけではなく、親族の愛情が絡む根深

いものだとユリはその時知った。与一が何よりも怒っていたの、百合子や美雪に愛されていなかった、という思い込みによるものだった。

「分かっているわ。でも何をどう気をつけるっていうの？」

「柿本、元専務たちの動き。相談役が最近、頻繁に会っている。それに経団連会長ともちよくちよく会食しているのが気にいらん。あと…」

「あと？」

「…いや… いったいあり過ぎてキリがないな。まあ、身近に気をつけるんだな。あつちにはアンタが大怪我して動けなくなったり、死んだりしたらラッキーなんだからな」

「ふん、そりゃあラッキーよね」

ユリは鼻を鳴らした。

「しばらく叔父さまとは距離をおくしかないわ… 今は役員たちも私に付いているし… どうしようもないのよ」

「……………」

暁生は無言のまま答えなかった。

「先生、忙しいのによくおいでくださいました」
桃子の父である八神がお茶をいれてもってきた。

決算期で命日に来れなかったことを、ユリはずっと気にしていた。しばらく世間話をしてから八神は思い余ったように口を開いた。

「あの…先生はジェフリーさんという方にお会いになれませんでしたが？」

「え？ジェフリーさん？ どの方ですか？」

「アメリカの方です。…去年の暮れくらいに誠士くんとうちにやっ
てこられたんですけどね」

「誠士さんと？」

「はい。それで…ジェフリーさんは桃子のことを色々お聞きになっ
て、アルバムやら写真やらをお見せしたんです…」

「ジェフリーさんと桃子は知り合いだったのかしら？」

「いいえ…」

八神は何か言いにくそうなそぶりだった。

「ジェフリーさんは、桃子の生まれ変わりがいるというんです」

「？生まれ変わり?! って桃子の？」

何ともいえない複雑な顔でうなずきながら八神は続けた。

「はい。…その、お孫さんが桃子の生まれ変わりじゃないかって、
思ってたらして…それでうちに調べにこられたんです」

八神はジェフリーの孫娘が前世の記憶があること、それが桃子らしいことなどを説明した。

「私もどういつていいか分からなくて…… けどあの子が亡くなって4年が過ぎた今でも、どこかで生きている気がしてるんです。あの子は紛れもなく私の娘でした」

八神は涙をぬぐった。

「こんなこと言うのは神官としてどうかと思いますが けど、ジェフリーさんがあ言われたのを聞くと、無性にその女の子に会いたくなりました。」

もし、桃子だったら 幸せに暮らしてるんだろうか、また寝込んでいないだろうか、向こうのご両親はいい方なんだろうか…そんなことばかり気になって…」

ユリもその言葉を聞いて泣きそうになった。

桃子が生きていたら、それが生まれ変わりだったとしても、どんなに嬉しいことが。

ただ、にわかには信じられなかった。

本当に、生まれ変わりなど、存在するものだろうか？

ジェフリー

いったい何者？

無償の果て

数日経った頃、ユリの自宅に泥棒が入った。

部屋が荒らされ、ちよっとした現金と貴金属が盗まれたのだ。

しかし

何かがおかしかった。

現金や貴金属、すべてに手をつけていなかったことと、パソコンを立ち上げた形跡があるのに、持って逃げなかったことなどがひっかかった。

何かを探していた？

だけど、何を？

現金や貴金属はカモフラージュだとしても、その他に盗られたものがユリには思いつかない。

ただ、不穏だった。

何かが自分を狙っているのは確かだった。

「村岡さんの次に専務についた友淵義雄が、えらくこの案件に反対してるんです。今まで好意的だった意見をひっくりかえして…どうしたのかしら？」

麗華が首をひねっている。

「
この意見を、ユリはもっと深いものとして本能的にとらえた。
それは直感のようなものだった。」

急にユリは紙に何かを書きだした。そうして麗華にくつつくように近づくとそれを書いた紙を差し出した。

“友淵専務の本当の思想を調べてもらえませんか。それから、村岡さんが何で辞めたかも”

「はっ！まさかユリさま……」

ユリはうなずいた。

“こうなったらほとんどの役員が脅されているかもしれない。その内容はまだ何か分からないけど。友淵専務が与一相談役の指示で動いていたというのなら、これは社内の問題。敵は外ばかりにいるとは限らない”

麗華は深くうなずいた。

どうやら社内に対決が始まったようである。

王様は二人。

ひとりには仲良くやりたくても、片方はもうひとりの王が疎ましい。
こういった場合

どっちが勝つのが法則だろうか？
波に乗るのはどっちだろうか？

麗華はまだ運命の流れにのるコツがつかめないでいた。

数ヶ月がたち、夏の盛りも過ぎようとしていた。ユリたちと与一の不穏な状況が続いていた。

何人かの役員が脅されているのは確かだったし、そのためにユリの立場を貶めるような事件が何度か起きたりしていた。

そのたびに何とか切り抜けてきたユリたちだったが、疲れがみえはじめてもいた。

ガタタツ

何かが倒れた物音がした。

誠士は驚いて事務所の扉を開けた。

「君は」

そこには普通ではない状態の暁生が倒れていた。

「相良くん！しっかり！ きゅ、救急車」

電話をかけにいこうとした足を、暁生に掴まれた。

「だめだ 救急車は」

「何言ってるんだ。そんなにケガしてて」

「だめだ　呼ばないでくれ　頼む　ユリのためにも」
「ユリ？　　どういうことだ？」

暁生は手を伸ばして、起き上がる体勢をとろうとした。
誠土がその手を取って体を支えた。

「た、高倉商事をスムーズに動かすには役員の賛同が必要だが…
今、それが与一相談役の派閥に傾いている

相談役は持つてもいない“闇の記録”を持っているかのようには振舞
つて、役員たちを脅している　役員のこれまでの悪行も“闇の記
録”には書いてあるから」

「“闇の記録”？」

「ああ…　高倉商事がやってきた裏の仕事の全証拠だ　代々、当
主だけが持つ記録だ。それを相談役は欲しがっている」

「じゃあ、ユリが今それを？」

「いや　だが、連中はユリが持っていると思っていた。詳しい話を
先代から聞いていないから　本当は　お、俺が持っていたんだ」

暁生は苦しそうに息を吐いた。

「嶋崎家は代々、高倉家の裏の一族だった。だから、記録は俺が持
っていた　けど、与一の息のかかった連中からはユリが持っていると
思っ、何かしそつだった

だから、俺が持っていることをあいつに分からせてやったんだ

「

「あいつ?」

「高倉与一さ ははっ」

与一と暁生の間で何かがあったのだ。

「それで君はそんなことに?」
暁生はうなずいた。

「けど安心してくれ、高倉与一はもうユリに手出しは出来ない……
あ、あなたに頼みがある…… もう俺は闇の記録を保管すること
が出来ない だから、あなたに託す」

「何言っただ!おい !しっかりしろ」

「あそこに 山王神社の大杉の根元に隠した 頼む ゆ、
ユリを守ってくれ…… そして幸せに」

暁生の瞳から急速に生気が失われた。

「おいっ、相良くんっ!しっかりしろっ!おいっ!」

安心したように暁生は息絶えていた。

誠士は茫然としていた。

何がどうなったか、全く理解できなかった。
ただ、大変なことが起こったこと、

そして

暁生がユリへの愛を貫き通して死んだことは分かった。

あまりにも高潔で、ひとりよがりには滑稽で、うらやましくもあり、哀れでもあった。

そんなごちゃまぜの気持ちで、誠士は泣いた。

「君は ばかだよ」

観月祭

「うつつ…どうしてこんなことに…あなた…」

路子夫人は警察の霊安室で泣き崩れた。

今朝、廃屋でナイフで刺されて死んでいた与一が発見された。

警察の見解は、強盗のような通り魔的殺人、もしくは仕事や人間関係のこじれ ふたつの線で捜査していた。

『ちがう… 叔父さまは 暁生と何かあったんだ』

ユリは何となく感じていた。

暁生がここ2、3日、行方が分からないのだ。

「だからいい加減にしろって言ったのに…パパ。 会社なんかこたわるからいけないのよ。本当にバカだわ…」

遙が怒りながら泣いていた。

遺言公開から与一が会社関係のことで不穩に荒れていたのを遙は知っていたのだ。

「ユリ、ちょっと」

美雪が廊下にユリをいざなった。

「与一が死んだのは、暁生くんと何か関係あるんじゃないの？」
盛夏でもひんやりとした廊下は意外なほど暗くて静かだった。

「…たぶん。 叔父さまは“闇の記録”を欲しがっていたみたい。

そう言いだしたのは暁生なのよ。私もそう聞いて『そのとおりだ』
と思った」

「それで、暁生くんは？」

「2、3日まえから連絡が取れない」

「じゃあ…ひよっとして」

美雪とユリは愕然として顔を見合した。

「だとしたら“闇の記録”はどうなったの！」

「かあさん　　まだ暁生がどうなったかは分からないのよ

もし暁生の身に何かあったのなら永遠にあの記録の場所は分からない
いでしよう。」

私は記録なんかはなくても全然構わない。ただ暁生に無事でいて
欲しいの。あんなものために暁生が大変なことに巻き込まれたの
なら　　ないほうがいい」

「そうね。けど問題は、もしあれが何かの拍子で第三者の手に渡っ
たら…ということよ」

「ええ　こうなったら記録のことに關しては腹をくくるしかないわ
今は咲田さんたちに頼んで暁生の行方を調べてもらっているか
ら…　それより…おかあさん」

「なあに」

「私たち…ふたりつきりになってしまったわ」

しみじみと告げたユリの言葉の重みを美雪は実感した。

高倉一族を率いていた大きな柱がつきつきとなくなり、いつの間に美雪とユリの肩にその重みがずっしりとのしかかっていた。これからどうやってこの巨大な帝国を治めていったらいいのか？

もう今までのようにきれいごとだけでは済まされないような気がした。

暁生の行方はようとして知れなかった。

ユリたちだけでなく、第一容疑者として追っている警察も、暁生の行方を捉えることはまだ出来ないでいるらしかった。同時に“闇の記録”が誰かの手に渡ったような動きもなかったのである。

そんなある日。

九月にしては少し涼しい日だった。
ユリの元に一通の招待状が届いた。

差出人は桃子の養父八神からのもので、山王神社の観月祭かんげつきいに是非来て欲しい、といった内容だった。

それを見たとき、なぜかユリの心がはやった。

『いかなければ』

桃子の件も気になっていたが、暁生の事件でしばらく手を付けられないでいた。

観月祭

それは、九月に行われる豊穰を感謝する「お月見」である。

小高い台地にある山王神社の鳥居をぬけると、境内までは蠟燭が等間隔に置かれ、幽玄の道を形づくっていた。

数人の人が本殿を左に抜ける儀式殿の広場へと歩いていった。氏子たちや近所の人たちのようだ。ユリもそれに続いた。

晩夏の日暮れは遅い。

夜の7時になってかがり火が焚かれると、やっと儀式がはじまった。司会を宮司である八神がつとめる。

「昨日から少し雨がパラついてましたんで心配したんですけど、さつきからきれいなお月さまが、顔を出しはじめました。よかったです。」

観月祭はそもそも月信仰と収穫祭をミックスさせて出来た行事です。うちの山王神社はまさにツクヨミノミコトがご神体ですので、毎年この催しは大祭りとなっております。

この後ごらんいただきますのは、まず雅楽の演奏、つづいて、神楽の舞い……」

観月祭のプログラムが説明されると、宮作りの囲いに囲まれた畳の舞台に座っていた雅楽管弦楽が演奏しはじめた。

琴、笙うゑこや篳篥ひちりきからは特殊の波動が出ているのだろうか。

音に合わせて舞われる神楽を見ていると、ユリはだんだんぼうつと

してきていた。

神楽はゆっくりとした動きなのでだんだんと催眠状態に陥って…

巫女たちの着ている千早ちはやの大きな袖が、ゆるり、ゆるり、と揺れ髪を束ねている水引のような丈長が後ろを向くたびにふわ～ふわ～と出現する。

「あっ」

意識を失いかけた時、肩をつかまれた。

「大丈夫？」

誠士だった。

驚いたが、なぜかユリは安心してそのまま気を失ってしまった。

拡大

目に入ってきたのは宮作りの高い天井。
そして優しく微笑む誠士の顔だった。

「あたし…」

「よかった　あと少し目を覚まさなかったら医者をやぼうかと思っていたんだ」

「ここは？」

「勤番所。本堂の横にある」

「そう」

そういつて起き上がろうとした。

「ああ、だめだめ。もうちょっと寝てない！」

誠士が肩を持って布団にユリを戻した。

逆らうエナジーのなかったユリはふたたび身を横にした。

「ちょっと疲れただけだと思う」

「うん」

しばらく沈黙が落ちた。

鈴虫の鳴く声がしじまをうめる。

「観月祭　終わったんだ」

「うん。9時前ごろに終わった。　すごく幻想的だったよ」
壁にかかっている時計を見ると9時15分をすぎたところだった。

それから誠士は宮司や巫女たちのいる社務所に行き、ユリのために雑炊を持ってきたり給仕をしたりした。

「今日はここに泊まっていって、八神さんが言ってくれてる。浴衣も持ってきたから着替えもあるし、ゆっくりしていきといいよ」

「でも」

天井の高い、広い勤番所でひとりで過ごすのは心細かったし、何よりも、他人の家にいるのは落ち着かなかった。

「大丈夫。僕も泊まるから」

「え」

「最もユリさんが嫌じゃなければ、だけど。もちろん何もしないよ。何か用事があれば言いつけて」

誠士はカラカラと笑った。

「ううん」

ユリは微笑みながら首をふった。

「ありがとう」

その後すぐにユリはまた深い眠りに落ちた。

聞きたいことがいっぱいあったのに。

桃子のこと、ジェフリーを連れてきたのはそういえば誠士だった、そういえばシュタイナーランドの銀座事務所を辞めたと聞いた。遙が後を引継いだとか聞いたが、今は何をしているのか？

そう、たくさん疑問があったのに

どこからか金色の光がユリの中に入ってきていた。

それは歓喜のような、オーガズムのような、頭の中が無になって宇宙に開けているような感覚であった。

光線の元を辿ってみると誠士から出ていた。

腰よりやや下あたりから金色の光が放たれ、弧を描いてユリの子宮あたりに入りこんでいた。

眠っているはずなのにユリにはそれが見えた。

『ああ…この感じ…』

頭の後ろが開けていく。

それは全き感覚とでもいうのか

あまりに気持ちよくてユリはその感覚に浸りきった。

「ああ、だめ」

誠士のその言葉でふたりは目を覚ました。

「うあ、あ

泣きそつな声で誠士は身を起こした。

ユリには誠士の身に何が起こったかすぐに分かった。

「ふとんまで汚れた？」

「あ いや けど、ヤバい」

「ああ、そのままです」

ユリは身を起こしてバッグからチリ紙やハンカチを取り出した。

気まずそうにそれを受け取り、後始末をしている誠士。

そんな誠士を見ると、ユリはなんだか誠士が可愛らしくて仕方がなくなつた。

「よかつたわ 最高のオーガズムだつた」

そのまま後ろから誠士を抱きしめた。

「え？」

羞恥のため顔を上げられなかった誠士が、驚いてユリの眼を覗き込んだ。

「だってセックスしてたでしょ？ 私たち」

信じられないといった顔しつつも誠士はうなずいた。

「うん」

そのままユリは誠士に口づけた。

何度もかわしながら再びエネルギーが高まるのをふたりは感じた。

「ダメだよ ユリ このままじゃ我慢できなくなっちゃう」

「我慢する必要なんてないのよ」

ユリは誠士の浴衣の肩を落とした。

そのまますべるように肌を手でなぞる。

「私、分かってきたわ セックスはふたりの精神的レベルが高まれば、恐れることなんてないんだわ。ううん、それより意識が拡大していくのよ」

「拡大？」

「だってさっきの感覚はそうだったじゃない？ 宇宙と一体というか、すごく意識が広がらなかった？」

「あ」

小刻みに左の乳首を刺激された誠士はユリの問いに答えることが出来なかった。

「あたしはあなたに与えるわ。それが本当に高めあう道だから」
「ズルいよ… 僕からはユリに与えることは」

快感のために目をとじた誠士の眉間がよっていた。

「もちろん、お互いに与えあわないと。この実験は成功しないのよ」
「実験？」

ユリは自分の浴衣の前身頃から誠士の手を招きいれた。
自然に誠士の手はユリの下着の上の恥丘をたどり、なつかしい裂筋を下降した。

『ああ、そつだユリの…』

そのまますぐに中に入ってしまうのは躊躇われた。
その前にもっと味わいたい

誠士はユリの放っているオーラののような暖かさに触れたくて、内腿を愛撫した。

それはユリにとってゾクゾクするような快感だった。

「ああ やだ 気持ちいい」

そのまま足首に向かって下降していく誠士の愛撫は、まるで懐かしい思い出を愛でるような優しさだった。

「やっと会えたよ 級長に」

ひとつ、ひとつの行為、お互いの分け与え

相手がどう感じているかにだけ意識を向けてつながってみたら…

ふたりは再びふっとんだ。

深いセックスは高い意識とつながることができる。

問題さえ回転するようにはじけ飛んでいくような気分だった。

「これからね わたしたち」

「ああ」

開け放った木戸から、十三夜のまんまるの月がくつきりとふたりを照らしだした。

「僕は君と生きていくよ…… そう決まっているみたいだから」

「そうみたいね」

『暁生くんに託された想いも携えてね』
声にならない思いを誠士はつぶやいた。

暁生の仕事を誠士は受け継ごうとしていた。

これから必要であろうユリの影の仕事を

「これでいいのかい？ローズ」
本殿前の大杉の影にいたジェフリーは小さな孫娘にたずねた。

「ええ。おじいさま」
まだ4歳をすぎたばかりだという、その少女はしっかりした口調で返事をした。

月は真天に輝いていた。

(完結)

拡大（後書き）

ここまで読んでくださった皆さまに本当に感謝いたします（^^）
物語はまだまだ続きそうですが、ユリと誠土のお話はここで一旦
おしまいです。

途中、わたくしの親が死んだり、プライベートでも色々なことがあ
って続けられるかとも思いましたが、何とか最終話を書き上げられ
てホッとしております。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8975c/>

月読 - つくよみ -

2011年1月15日02時08分発行